豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

-阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査-

平成7(1995)年度

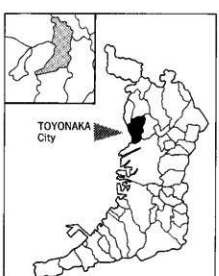
平成9(1997)年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

-阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査-

平成7(1995)年度



平成9(1997)年3月

豊中市教育委員会

序　文

平成７年１月17日午前５時46分、淡路島北部付近をはじめとする複数の震源から発したマグニチュード7.2の激震は、阪神地域・淡路島に計り知れない恐怖と災禍をもたらしました。

猪名川を介して兵庫県に接する豊中市におきましても、貴い命が失われ、また多くの家屋が損壊をうけるなど、その被害はわたしたちのくらしに重大な影響をもたらしました。

２年の月日がたった今日、阪神・淡路大震災からの復旧・復興が着実にすすむなか、ふるさとの歴史・文化・自然を生かした新たなまちづくりが模索されております。そして、より潤いのある生活・文化をこれからの社会に伝えていくことが、重要な課題となっております。

この報告は、阪神・淡路大震災に伴う復旧・復興事業の緊急性と文化遺産の一つである埋蔵文化財の重要性をふまえ、豊中市が平成７年度事業として国ならびに大阪府の補助を受けて実施した蛍池東遺跡、新免遺跡、本町遺跡、岡町南遺跡、穂積遺跡、利倉南遺跡、小曽根遺跡における緊急発掘調査の概要と成果を報告するものです。これらの遺跡は、これまでにおこなった発掘調査からも豊中の歴史を語る上で欠かせない重要な遺跡であることが知られております。そして今回の報告におきましても、新たな知見が加えられることになりました。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導、ご助言を、また土地所有者ならびに近隣の方々には文化財の重要性に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました。文化庁、大阪府ならびに関係各機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のひとかたならぬお力添えにより、豊中市の文化財保護行政を推進できましたことを、ここに厚くお礼申し上げるとともに、今後もさらなるご支援をお願い申し上げます。

最後に、先の震災で亡くなられた方々のご冥福と、被災された方々の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

豊中市教育委員会
教育長　栗原　有史

例　言

1．本書は、豊中市教育委員会が平成７年度阪神淡路大震災復旧・復興事業に関する国庫補助事業（総額34,000,000円、国庫50％、府費25％、市費25％）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要および成果の報告を行う。

2．本年度事業は、蛍池東遺跡、新免遺跡、本町遺跡、岡町南遺跡、穂積遺跡、利倉南遺跡、小曽根遺跡について、平成７年６月５日から平成９年３月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。

3．発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は、次項に記すとおりである。

4．本書のうち、第Ⅰ章・第Ⅻ章・第ⅩⅣ章は橘田正徳が、第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅵ章は服部昭志が、第Ⅴ章・第Ⅶ章・第Ⅺ章は新本真之が、第Ⅷ章は清水篤が、第Ⅸ章・第Ⅹ章は渋家章が執筆し、編集は橘田が行った。

5．各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、国土座標系に基づく座標北を示す。

6．挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。

7．各挿図に掲載した座標は、国土座標第Ⅵ系に基づく。なお、基準点測量については、震災後の改測データを採用して行っているため、座標値は震災以前と異なる場合がある。その著しい例として、小曽根遺跡周辺の場合はＸ＝＋92mm 、 Ｙ＝－36mm で、平均二乗法による偏差は±98.793mmであることを付記する。

8．各調査区の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

発掘調査一覧

遺跡名	(次数)	調査地	調査面積	担当者	調査期間
蛍池東遺跡	第9次	蛍池中町3丁目119	233㎡	服部　聡志	平成8年10月28日 ～11月29日
新免遺跡	第44次	玉井町2丁目191-1	11㎡	服部　聡志	平成7年10月23日 ～10月31日
新免遺跡	第45次	末広町1丁目90	95.2㎡	服部　聡志	平成8年4月23日 ～5月31日
新免遺跡	第46次	末広町1丁目86	47.3㎡	新本　真之	平成8年4月23日 ～5月24日
本町遺跡	第22次	本町2丁目102	121㎡	服部　聡志	平成7年12月23日 ～8年1月31日
本町遺跡	第23次	本町3丁目73-1,76-1	77㎡	清水　篤	平成8年2月1日 ～3月8日
本町遺跡	第24次	本町2丁目51	72㎡	新本　真之	平成8年7月15日 ～8月30日
本町遺跡	第25次	本町3丁目288	65.5㎡	清家　章	平成8年7月15日 ～8月30日
岡町南遺跡	第1次	岡町南2丁目86	72.5㎡	清家　章	平成8年6月3日 ～6月28日
穂積遺跡	第17次	服部西町2丁目60-1	130㎡	清家　章 新本　真之	平成8年2月28日 ～3月29日
利倉南遺跡	第1次	利倉3丁目103-1	90㎡	清家　章	平成8年10月1日 ～11月29日
小曽根遺跡	第21次	浜1丁目403-1,404-1	285㎡	橘田　正徳	平成8年4月24日 ～6月28日

試掘調査一覧

遺跡名	所在地	建築面積	担当者	調査期間
原田遺跡西方	原田元町3丁目87-2他	761㎡	橘田　正徳	平成8年3月18日
本町遺跡	本町3丁目60	37㎡	清家　章	平成8年3月26日
待兼山遺跡	刀根山元町89	143㎡	清水　篤	平成8年3月29日

目　次

第Ⅰ章 位置と環境 …… 1
第Ⅱ章 蛍池東遺跡第９次調査の概要
1．調査の経緯 …… 5
2．調査の概要 …… 6
（1）基本層序　（2）検出した遺構と遺物
第Ⅲ章 新免遺跡第44次調査
1．調査の経緯 …… 11
2．位置と環境 …… 11
3．調査の成果 …… 12
（1）基本層序　（2）検出した遺構と遺物
4．まとめ …… 14
第Ⅳ章 新免遺跡第45次調査
1．調査の経緯 …… 15
2．位置と環境 …… 16
3．調査の成果 …… 16
（1）基本層序　（2）検出した遺構と遺物
4．まとめ …… 18
第Ⅴ章 新免遺跡第46次調査
1．調査の経緯 …… 19
2．遺跡の概要 …… 19
3．調査の成果 …… 20
（1）基本層序　（2）検出した遺構（3）出土遺物
4．まとめ …… 22
第Ⅵ章 本町遺跡第22次調査
1．調査の経緯 …… 23
2．位置と環境 …… 24
3．調査の成果 …… 24
（1）基本層序　（2）検出した遺構と遺物
4．まとめ …… 29
第Ⅶ章 本町遺跡第23次調査
1．調査の経緯 …… 31

2．調査の概要 …… 31
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
3．まとめ …… 36
第Ⅷ章 本町遺跡第24次調査
1．調査の経緯 …… 37
2．遺跡の概要 …… 37
3．調査の概要 …… 38
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
4．まとめ …… 42
第Ⅸ章 本町遺跡第25次調査
1．調査の経緯 …… 43
2．既往の調査 …… 43
3．調査の概要 …… 44
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
4．まとめ …… 48
第Ⅹ章 岡町南遺跡第1次調査
1．調査の経緯 …… 49
2．遺跡の概要 …… 49
3．調査の概要 …… 50
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
4．まとめ …… 52
第Ⅺ章 穂積遺跡第17次調査
1．調査の経緯 …… 53
2．遺跡の概要 …… 53
3．調査の概要 …… 55
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
4．まとめ …… 60
第Ⅻ章 利倉南遺跡第3次調査の概要
1．調査の経緯 …… 61
2．既往の調査 …… 61
3．調査の概要 …… 62
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
4．まとめ …… 66
第ⅩⅢ章 小曽根遺跡第21次調査の概要
1．調査の経緯 …… 67

2．調査区周辺の環境と既往の調査 …… 68
3．調査の概要 …… 69
（1）基本層序　（2）検出した遺構　（3）出土遺物
4．まとめ …… 75
第Ⅳ章 試掘調査の概要 …… 79
1．原田遺跡西方
2．本町遺跡
3．待業山遺跡

挿　図　目　次

第Ⅰ章 位置と環境
第1図 遺跡分布図 …… 3
第Ⅱ章 蛍池東遺跡第9次調査の概要
第2図 調査範囲図 …… 5
第3図 調査地点の位置 …… 5
第4図 遺構全体図 …… 7
第5図 倉庫1平面・断面図 …… 8
第6図 倉庫1出土遺物 …… 8
第7図 竪穴住居1平面・断面図 …… 9
第8図 土壙墓1平面・断面図 …… 10
第9図 土壙墓1出土遺物 …… 10
第Ⅲ章 新免遺跡第44次調査
第10図 調査範囲図 …… 11
第11図 調査地位置図 …… 12
第12図 遺構平面図 …… 13
第13図 上坑1・2・4、SP－6出土遺物 …13
第14図 土坑3出土遺物 …… 14
第Ⅳ章 新免遺跡第45次調査
第15図 調査範囲図 …… 15
第16図 調査地位置図 …… 15
第17図 溝1土層断面図 …… 16
第18図 遺構平面図 …… 17
第19図 出土遺物 …… 18
第Ⅴ章 新免遺跡第46次調査
第20図 調査範囲図 …… 19
第21図 調査地位置図 …… 19
第22図 調査区全体図 …… 20
第23図 溝1土層断面図 …… 21
第24図 出土遺物 …… 21
第Ⅵ章 本町遺跡第22次調査
第25図 調査範囲図 …… 23
第26図 調査地位置図 …… 23
第27図 遺構平面図 …… 折込
第28図 B区土坑1出土遺物 …… 26
第29図 C区出土遺物 …… 27
第30図 C区出土遺物 …… 28

第Ⅶ章 本町遺跡第23次調査
第31図 調査範囲図 …… 31
第32図 調査地点位置図 …… 31
第33図 調査区平面・断面図 …… 32
第Ⅷ章 本町遺跡第24次調査
第36図 調査範囲図 …… 37
第37図 調査地位置図 …… 37
第38図 調査区平面・断面図 …… 38
第Ⅸ章 本町遺跡第25次調査
第42図 調査範囲図 …… 43
第43図 調査地位置図 …… 43
第44図 調査区平面・断面図 …… 45
第Ⅹ章 岡町南遺跡第1次調査
第47図 調査範囲図 …… 49
第48図 調査地位置図 …… 49
第49図 調査区平面・断面図 …… 50
第Ⅺ章 穂積遺跡第17次調査
第52図 調査範囲図 …… 53
第53図 調査地位置図 …… 53
第54図 調査区平面・断面図 …… 54
第55図 掘立柱建物1・2平面・断面図 … 55
第56図 住居1平面・断面図 …… 56
第Ⅻ章 利倉南遺跡第3次調査の概要
第61図 調査範囲図 …… 61
第62図 調査地位置図 …… 61
第63図 井戸1検出状況 …… 62
第64図 井戸内土器出土状況 …… 62
第Ⅻ章 小曽根遺跡第21次調査の概要
第68図 調査範囲図 …… 67
第69図 調査地位置図 …… 67
第70図 今西家屋敷周辺の基本層序模式図 …… 70
第71図 第Ⅲ・Ⅳ層上面平面・断面図 …… 折込
第72図 第Ⅶ・Ⅷ層上面平面図 …… 折込
第34図 カマド平面・断面図 …… 34
第35図 出土遺物実測図 …… 35
第39図 掘立柱建物平面・断面図 …… 39
第40図 出土遺物1 …… 40
第41図 出土遺物2 …… 41
第45図 包含層出土遺物実測図 …… 46
第46図 遺構出土遺物実測図 …… 47
第50図 掘立柱建物平面・断面図 …… 51
第51図 出土遺物 …… 52
第57図 出土遺物1 …… 57
第58図 出土遺物2 …… 58
第59図 出土遺物3 …… 59
第60図 出土遺物4 …… 59
第65図 第2面・第3面平面・断面図 … 63
第66図 土坑1 …… 64
第67図 青銅製品遺物実測図 …… 65

第73図 土坑平面・断面図 …… 71
第74図 溝1断面図 …… 72
第75図 溝2断面図 …… 73
第76図 落ち込み1断面図 …… 73
第77図 落ち込み2断面図 …… 74
第78図 土坑1断面図 …… 75
第78図 出土遺物 …… 75
第80図 今西家屋敷内堀推定範囲図 …… 77

図　版　目　次

図版1 蛍池東遺跡第9次調査
（1）遺構検出状況
（2）遺構完掘状況
図版2 蛍池東遺跡第9次調査
（1）遺構完掘状況
（2）倉庫1、2、3全景
図版3 蛍池東遺跡第9次調査
（1）竪穴住居1
（2）土壙墓1
図版4 新免遺跡第44次調査
（1）遺構検出状況
（2）遺構完掘状況
図版5 新免遺跡第44次調査
（1）土坑4高坏出土状況
（2）出土遺物
図版6 新免遺跡第44次調査　出土遺物
図版7 新免遺跡第45次調査
（1）遺構検出状況
（2）遺構完掘状況
図版8 新免遺跡第45次調査
（1）溝1、2土層断面
（2）溝1、2出土遺物
図版9 新免遺跡第46次調査
（1）遺構検出状況
（2）溝1土層断面
岡町南遺跡第1次調査
（3）出土遺物
図版10 本町遺跡第22次調査
（1）A区全景
（2）B、C、D区全景
図版11 本町遺跡第22次調査
（1）B区全景
（2）D区全景
図版12 本町遺跡第22次調査　出土遺物
図版13 本町遺跡第22次調査　出土遺物
図版14 本町遺跡第23次調査
（1）調査区全景
（2）溝2遺物出土状況

図版15 本町遺跡第23次調査
（1）竪穴住居
（2）土坑3
図版16 本町遺跡第23次調査
（1）カマド完掘状況
（2）カマド煙出部
図版17 本町遺跡第23次調査 出土遺物
図版18 本町遺跡第24次調査
（1）掘立柱建物完掘状況
（2）SP—1土層断面
図版19 本町遺跡第24次調査
（1）遺構完掘状況
（2）遺構完掘状況
図版20 本町遺跡第24次調査 出土遺物
図版21 本町遺跡第24次調査 出土遺物
図版22 本町遺跡第25次調査
（1）A区全景
（2）B区全景
図版23 本町遺跡第25次調査 出土遺物
図版24 国町南遺跡第1次調査
（1）遺構完掘状況
（2）SP—46遺物出土状況
（3）防空壕完掘状況
新免遺跡第46次調査
（4）出土遺物
図版25 穂積遺跡第17次調査
（1）遺構完掘状況
（2）遺構完掘状況
図版26 穂積遺跡第17次調査
（1）溝2上層遺物出土状況
（2）井戸1遺物出土状況
図版27 穂積遺跡第17次調査 出土遺物
図版28 穂積遺跡第17次調査 出土遺物
図版29 穂積遺跡第17次調査 出土遺物
図版30 利倉南遺跡第3次調査
（1）第1面全景
（2）第3面全景
図版31 利倉南遺跡第3次調査
（1）小形倭鏡出土状況
（2）銅鐸片出土状況
（3）銅鐸片
（4）銅鏃
（5）小形倭鏡

図版32　小曽根遺跡第21次調査
（1）調査区全景
（2）土坑1断面
図版33　小曽根遺跡第21次調査
（1）第1トレンチ全景
（2）第2トレンチ全景
図版34　小曽根遺跡第21次調査
（1）溝1断面(第1トレンチ)
（2）落ち込み1断面(第2トレンチ)
図版35　小曽根遺跡第21次調査
（1）溝2断面(第1トレンチ)
（2）溝2断面(第2トレンチ)

第Ⅰ章　位置と環境

位置と環境　豊中市は、大阪府北西部に位置し、西は猪名川を介して兵庫県に接する。旧国の区分では摂津国豊島郡に属する。

豊中市の地形を概観すると、北部から東部にかけては待兼山・島熊山などの丘陵と、これらから派生する段丘が広がる。千里川を北の境とする中部は、通称豊中台地とよばれる中・低位段丘が、また台地の段丘崖を地形界に南部から西部にかけては猪名川などの沖積作用により形成された沖積平野が広がる。

なお、今回報告を行う、蛍池東遺跡は待兼山丘陵低位段丘上に、新免遺跡・本町遺跡・岡町南遺跡は豊中台地に、穂積遺跡、小曽根遺跡、利倉南遺跡は沖積平野に立地する。

歴史的環境　豊中市域において、人々の活動が確認されているのは旧石器時代に溯るが、明確な遺跡は知られていない。現状では、蛍池北遺跡・蛍池西遺跡において、この時期の遺物が比較的まとまって出土しており、将来待兼山丘陵周辺に該期の遺跡が発見される可能性を指摘するにとどまる。

つづく、縄文時代においても明確な住居を伴う集落は確認されていないが、千里川流域の河岸段丘上に立地する野畑遺跡・野畑春日町遺跡・内田遺跡において中期から後期の遺構・遺物が確認されており、千里川流域に一定の活動領域があったことが想定できる。また、市内各地でも早期から晩期の遺物が散発的に出土しており、豊中台地等においても該期の人々の活動領域が存在した可能性が予想できる。

弥生時代には、待兼山丘陵、豊中台地、また沖積平野において集落の形成が認められるようになる。前期の段階では沖積平野上の勝部遺跡・小曽根遺跡において集落の展開が想定されているが、山ノ上遺跡のように台地から派生する舌状丘陵に立地する遺跡においても生活の痕跡が確認されていることは注目される。中期には、蛍池北遺跡や新免遺跡において集落が出現し、小曽根遺跡においても前期にひき続き集落が展開する。この時期を通じて、拠点的な集落として繁栄する小曽根遺跡や方形周溝墓群を中心とする大規模な墓地を擁する蛍池北遺跡が後期には衰退するのに対して、新免遺跡は後期以降も拠点的な集落として展開している。中期後半から後期には、平野部・丘陵を問わず大小の集落が出現し、後期には集落の数が増大する傾向にある。なお、この時期に出現し、展開する穂積遺跡、服部遺跡などの大規模な集落では東西各地の搬入土器が比較的まとまって出土しており、該期の流通を考える上で注意されよう。終末期になると、墓制に大きな変化が見出される。後期に一般化する円形周溝墓に加えて、終末期になると突出部を有する円形（前方後円形）周溝墓が服部遺跡に出現し、突出した権力が形成し始める社会的状況が窺われる。

古墳時代の集落の多くは、弥生時代の集落の立地を踏襲するものが多い。しかし、前代から継続して展開する集落の例は今のところ少なく、利倉西遺跡、利倉南遺跡、島田遺跡などを挙げるだけである。その他の集落については、弥生時代終末期から古墳時代前期の間に途絶し、中期または後期に再び集落が展開するようである。なお、前・中期の主要な集落は平野部にみられるが、後期には桜井谷窯跡群における須恵器生産の隆盛に伴い、千里川流域の柴原遺跡、内田遺跡、新免遺跡、本町遺跡た天竺川流域の熊野山遺跡において集落が展開する。これらの遺跡では須恵器不良品が多量に出土する遺構を確認しており、須恵器生産に関与した集団が存在した可能性が想定されている。また、蛍池東遺跡では難波宮下層遺構または和歌山県鳴滝遺跡に匹敵する規模を有する前期末から中期の倉庫群が確認されおり、この時期から、豊中の地にも政治的施設がみられるようになる。

一方、市内の古墳は前期古墳の待兼山古墳、御神山古墳が丘陵上に築造されるが、継続する古墳は認められない。前期末からは台地上に桜塚古墳群の築造がはじまり、後期には太鼓塚古墳群、新免宮山古墳群が形成される。この他、台地及び平野部の各遺跡において古墳周濠の検出が相次いでおり、古墳分布の再検討が成されつつある。

これら古墳の築造が終末を迎える飛鳥時代には、金寺山廃寺が造営され、その関連が考えられる建物が本町遺跡に出現する。奈良時代には、旧山陽道に近接する蛍池北遺跡、伊丹街道沿いの山ノ上遺跡、また桜塚街道上の曽根遺跡や猪名川下流域の上津島南遺跡、島田遺跡などにおいてまとまりのある集落が展開し、その他の遺跡でも建物群が散発的に展開する。このうち、蛍池北遺跡では柵列を伴って整然と並ぶ建物が、また上津島南遺跡や島田遺跡では、当該期の一般的な建物にはみられない大規模な建物群が検出されており、官衙関連機関もしくは有力氏族の居宅と想定されている。なお、これらの遺跡はその性格を変化させつつも平安時代以降に継続しており、該期の集落の形成や廃絶との関連が注目される。

平安時代前期から中期の集落の状況は不明瞭な部分が多く、奈良時代に展開する先の遺跡の他に、少路遺跡、新免遺跡、豊島北遺跡、服部遺跡において遺構が散発的に検出されているだけにとどまる。このような中、曽根遺跡では官衙もしくは郡規模の開発領主の居宅と推定される大型建物群が周囲に関連施設をともなって展開する。この建物群が廃絶する時期からあとに、政治的色彩をおびた建物群の展開は見られなくなるとともに、にわかに中世村落への移行の動きが平野部の集落からはじまる。

平安時代後期には、小曽根遺跡・穂積遺跡・島田遺跡・上津島南遺跡など平野部の遺跡でまとまりのある集落が出現する。このなかで小曽根遺跡や穂積遺跡は、摂関家領垂水西牧（後の春日社領）として荘園化しており、公事・年貢を担い得る名主層の確立がうかがわれる。一方、その様相が明らかになりつつある小曽根遺跡では、一定の区画の中で建物群が展開しており、経営の安定化に成功した百姓層の姿を見出せることは注目されよう。以後、集落は鎌倉時代を通じてその範囲を拡大し、後期には服部遺跡や熊野田遺跡などの新たな集落が成立する。また、平安時代

1．太鼓塚古墳群
2．野畑春日町古墳群
3．野畑遺跡
4．野畑春日町遺跡
5．少路遺跡
6．侍兼山古墳
7．侍兼山遺跡
8．内田遺跡
9．桜井谷石器散布地
10．柴原遺跡
11．桜井谷窯跡群
12．蛍池北遺跡
13．蛍池東遺跡
14．蛍池西遺跡
15．蛍池遺跡
16．麻田藩陣屋跡
17．南刀根山遺跡
18．御神山古墳
19．上野遺跡
20．熊野田遺跡
21．金寺山廃寺跡
22．新免宮山古墳群
23．金寺山廃寺塔刹柱礎石
24．本町遺跡
25．新免遺跡
26．箕輪遺跡
27．山ノ上遺跡
28．走井遺跡
29．岡町北遺跡
30．岡町遺跡
31．岡町南遺跡
32．桜塚古墳群
33．下原窯跡群
34．長興寺遺跡
35．梅塚古墳
36．埴輪散布地
37．原田西遺跡
38．勝部遺跡
39．勝部東遺跡
40．原田城跡
41．原田遺跡
42．曽根遺跡
43．曽根東遺跡
44．原田中町遺跡
45．原田元町遺跡
46．埴輪窯跡
47．豊島北遺跡
48．曽根南遺跡
49．城山遺跡
50．服部遺跡
51．若竹町遺跡
52．石蓮寺廃寺
53．寺内遺跡
54．利倉北遺跡
55．利倉遺跡
56．利倉南遺跡
57．利倉西遺跡
58．椎堂の前遺跡
59．服部西遺跡
60．穂積遺跡
61．穂積村圓堤
62．小曽根遺跡
63．南郷日代今西氏屋敷
64．北条遺跡
65．上津島川床遺跡
66．上津島遺跡
67．上津島南遺跡
68．穂積ポンプ場遺跡
69．鳥田遺跡
70．庄内遺跡
71．島江遺跡

第１図　遺跡分布図（1：50,000）

後期から鎌倉時代にかけて、山ノ上遺跡および小曽根遺跡・北条遺跡の北方の段丘上にある石造寺廃寺において寺院が建立される。その造営主体については不明であるが、仏教信仰が在地に浸透する土壌が成立していたことは、この時代の社会を考える上で注意されよう。

鎌倉時代末期から室町時代にかけて、集落の形態に大きな変化が現れる。中世前期の集落は耕地の中に建物群が点在し、屋敷と耕地がまだ分離していない状態にあったが、この時期から屋敷と耕地が分離し集落は複数の建物群の集合体、いわゆる集村的景観を呈するようになる。その頃、垂水西牧では在地と春日社神人との対立が激化し、南北朝期を通じて在地支配は混乱する。六車郷に「原田兄弟」が登場し、南郷目代今西氏が小曽根村に下向して方二町の屋敷を構えるのも、この時期にあたる。

戦国時代以後の集落は調査成果が乏しく状況は不明であるが、原山神社境内周辺に位置する岡町では商業地的様相をおびて展開することが文献から窺われる。また、この時期は市域の要所に城郭が出現する。刀根山城、原田城、椋橋城である。これらの城は織田信長による石山攻めの最前線となるが、原山城の調査において検出された幅18m、深さ６mもの堀は、その状況を知る上で貴重である。以後、これらの城郭は放棄されたのか、文献から姿を消す。

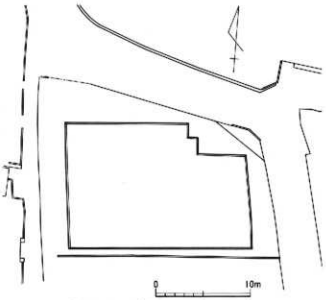
太閤検地以後幕藩体制の確立の中で、市域における村落は近世村落へ再編され、平安時代末期から続いた春日社領垂水西牧も解体する。市域の大部分は天領・諸代大名領国などに細分されるが、唯一の外様大名として麻田藩が組み込まれる。その規模は一万石で、祝正治氏から譲りけた屋敷を陣屋として幕末に至る。陣屋の全容については、今後の調査に期待されるところが大きい。

第Ⅱ章　蛍池東遺跡第９次調査の概要

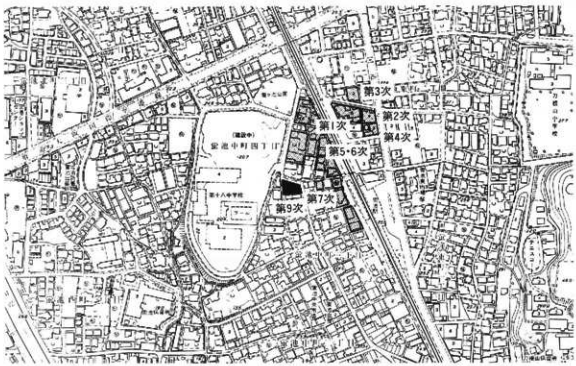
１．調査の経緯

当該地点における建築確認申請の提出にもとづき、社会教育課では、当該地点が蛍池東遺跡の範囲に含まれること、基礎工事によって遺跡が損壊を受ける可能性が高いことから、施主側に対し確認調査の指示を行った。立会の結果、表土下約20cmの地山削平面よりピット数個を確認するところとなった。

確認調査の結果、基礎工事部分全面を対象とする発掘調査の必要性を確認し、施主側の了承のもと、発掘調査を実施する運びとなった。調査は、1996年10月28日より11月29日までの、延べ１カ月を得て実施した。



第２図　調査範囲図（１：400）



第３図　調査地点の位置（１：5000）

２．調査の概要

（１）基本層序

調査区内の層序は基本的に、現地表より約10～20cmの深さに旧家屋建築時の整地土があり、その下に家屋以前の耕作土が約５cmの厚さで堆積していた。ただし調査区西端の地形傾斜部に限り奈良～平安期とみられる包含層の遺存を確認した。遺構はいずれも地山削平面で検出した。

（２）検出した遺構と遺物

検出した遺構として、掘立柱建物５棟、竪穴住居２棟、土壙墓１基のほか、ピット約68基などがある。このうち北東－南西に整然と並ぶ３棟の倉庫と見られる掘立柱建物は、古墳時代中期初頭頃に比定され、先に大阪モノレール事業地内で確認された大型倉庫とともに一連の遺構群と見られるものである。以下、主要な遺構について概要を報告する。

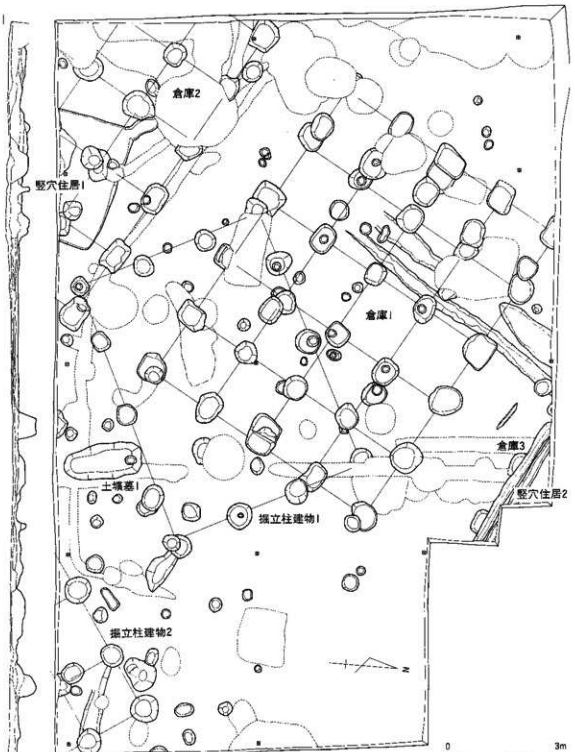
倉庫１　調査区の中央部でほぼ全体を確認しえた建物である。桁行５間（約9m）、梁行４間（約6.7m）で、柱間は桁行約1.8m、梁行1.62～1.75mを計測する。柱穴は、一辺約50～80cmの方形状を呈するものが多く、外周の柱穴が内側のものに比べるとやや大きい。深さも、内側のものが25～50cm、外側のものが45～84cmで、概ね外側のものが20～30cm程度深い。

外側の柱穴のうち、北西辺の中央、および東南辺の中央にある柱穴は、他の柱穴と規模、形状を異にする。すなわち北西辺中央の柱穴は、長径120cm、短径84cmの長方形を呈し、建物内側の約半分が浅く、階段状に掘込まれている。深さは外側が84cm、内側が60cmで、他の柱穴に比べると極端に深い。一方、東南辺中央の柱穴も同様に、長径100cm、短径80cmの長方形平面で、階段状の掘形を有する。ただし深さは北西辺中央の柱穴に比べると浅い。これら２個の柱穴は、妻側中央に対称的に配置される点から、建物全体の軸構造を支える中心的な棟持柱と推定される。

柱穴の埋土は概ね褐色粘質シルトを主体とするが、地山の黄色粘土ブロック層と交互に突固めるように埋め戻したものも存在する。またほとんどの柱穴から柱の痕跡が確認され、それによると直径30cm前後の柱が立てられていたものと想定される。ただし棟持柱と推定される北西側の柱穴からは、詳細な観察にもかかわらず柱の痕跡は確認できなかった。再利用のための抜き取りの可能性も考えられたが、埋土の乱れもとくに認められず、やや問題を残している。

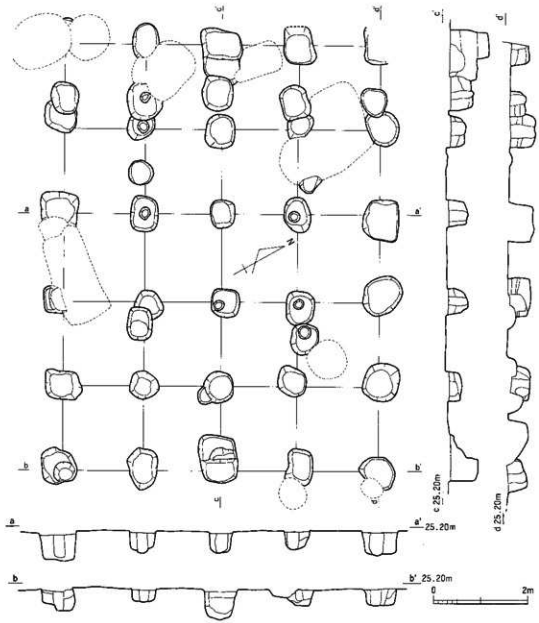
なお北西辺より２列目の柱穴列に並行して、もう一列の柱穴列が検出された。覆土の断面に見る限り、いずれも倉庫の柱穴よりも新しく掘込まれたものである。倉庫１の北西側に新しい別の建物が存在する可能性も考えられたが、これに続くとみられる他の柱穴は全く確認できなかった。またSP－９、10、21、22に接して計４個の柱穴が存在するが、その規則的な配置から倉庫１にともなう柱穴の可能性も考えられる。なお建物の方位はＮ－61°－Ｗである。

柱穴からの出土遺物は数少ない。SP－22から出土した土師器の高坏脚部１点のほか、弥生中期とみられる壺破片数点をあげるにすぎない。土師器の高坏脚部は、端部を欠失するが、中空



第４図　遺構全体図（１：100）

の脚柱部から屈曲して開く形態から、いわゆる布留式の範疇に属するものとみられる。他の器種が不明のため詳細な時期を明らかにすることは難しいが、モノレール事業地内で検出された大型倉庫と大きな隔たりはないものと推定される。



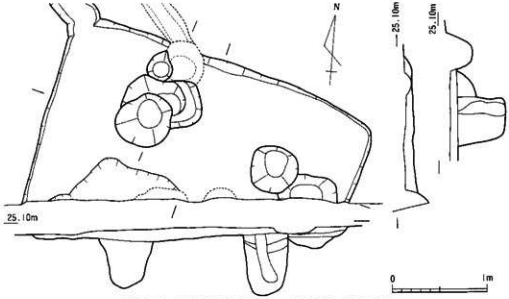
第５図　倉庫１平面・断面図（１：80）

第６図 倉庫１出土遺物(1:4)

倉庫２　倉庫１と方位を共有し、かつ柱穴ラインを揃えるように建てられた倉庫である。全体の４分の１程度しか検出していないが、柱穴の規模や柱間において倉庫１と大差が見られず、ほとんど同規模の建物と推定される。倉庫１、２の柱穴間の距離は約2.6mである。

倉庫３　竪穴住居２と重複して検出した３個の柱穴である。柱穴はいずれも倉庫１の柱穴列のほぼ延長上に位置し、かつ方位が一致すること、柱穴の規模、柱間ともに大差がないことから、おそらく倉庫１、２とともに整然と配置された倉庫の一部である可能性が高い。

竪穴住居１　調査区の南西部で、倉庫２と重複して検出された方形プランの竪穴住居である。東西3.36m、南北検出長2.12m、遺存した深さ約10cmを計測する。肩部の立ち上がりは緩やかで、



第７図　竪穴住居１平面　・断面図（１：40）

壁溝は検出されなかった。床面に直径40～60cm、深さ約50～60cmの２個の柱穴を検出した。柱痕から知られる柱の直径は約15cmである。住居の掘込み底部はやや凹凸が多く、貼床が施されている。倉庫１の柱穴は住居１の貼床の下から検出され、明らかに住居が新しいと判断される。なお住居の方位はＮ－13°25′－Ｗである。

出土遺物として、若干の須恵器片、土師器片数点がある。須恵器の型式を特定できず、詳細な時期は不明である。

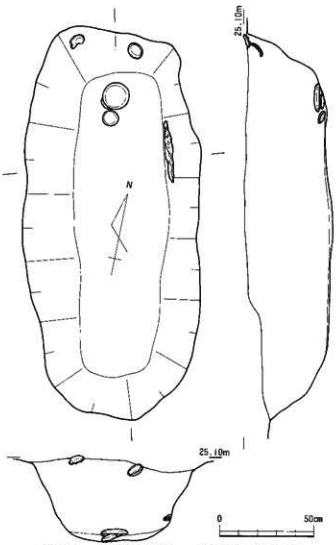
竪穴住居２　調査区の北東部で、倉庫３と重複して検出した方形プランと見られる竪穴住居である。検出長3.76m、深さ約35cmを計測する。壁溝は２本検出され、外側のものは幅28cm、深さ5cm、内側のものは幅25cm、深さ10cmで、外溝の北西端がややカーブするところからコーナー付近に相当すると考えられる。上層断面の観察から外溝が新しく、建て替えの際に拡張、もしくは若干の移動が行われたものと推定される。住居の方位はＮ－63°－Ｗである。

覆土からの出土遺物として、須恵器、土師器の破片がある。比較的残りの良い須恵器の坏蓋は、陶邑編年のTK-208型式頃に対応するものと推定される。

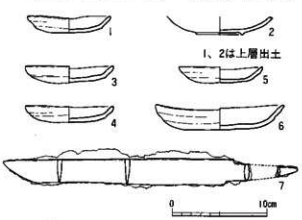
掘立柱建物１　桁行４間（7.16m）、梁行３間（5.24m）の建物である。桁行の柱間は、中央２間分が約2.2m、妻側各１間が約1.2～1.5mで妻側がやや短い。柱穴は円形状を呈し、直径56～86cm、深さ30～50cmを計測する。倉庫１の柱穴との重複関係から明らかに掘立柱建物２が新しい。建物の方位はＮ－64°30′－Ｅである。

柱穴からの出土遺物として、須恵器、土師器の破片がある。このうち須恵器の坏蓋は、立ち上がり部を欠失するが、陶邑編年のTK-43もしくはTK-209型式に対応するものと推定される。

掘立柱建物２　調査区の南東隅付近で検出した、１間×２間以上の規模を有する掘立柱建物である。柱穴はいずれも円形状を呈し、直径60～76cm、深さ46～52cmを計測する。調査区南壁にかかる柱穴が当建物に伴うものであれば、総柱の倉庫の可能性が考えられる。建物の方位は



第８図　土壙墓１平面・断面図（１：20）



第９図　土壙墓１出土遺物（１：４）

N－8°30′－Wである。

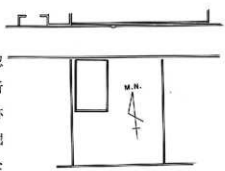
柱穴からの出土遺物として、若干の須恵器片、土師器片があり、甕破片の内面ナデ調整の特徴から奈良時代以降に比定されるものと推定される。

土壙墓１　長さ206cm、幅93cm、深さ46cmの長楕円形を呈する土坑である。遺物の出土状況並びに掘形の規模、形状から土壙墓の可能性が高い。遺物はいずれも土坑の北側に集中し、覆土上層（肩部付近）および底部の２箇所に分かれて出土した。埋葬当初に置かれたと見られる遺物として土師質皿５点、鉄刀１点がある。底部中央付近から出土した土師質の皿は、遺体の頭部付近に、また土坑東側の底部からやや浮いた位置から出土した鉄刀は、遺体の左腕部に沿って置かれたものと推定される。また土坑北端の肩部付近から出土した完形の土師質小皿等は、底部出土の土器とも時期差は認められず、埋葬直後の葬送儀礼に関連するものとも推定される。覆土は底部付近に厚さ約5cmの黄灰色、褐色粘土～シルトが堆積しているほかは、均質な褐色粘土～シルトで覆われていた。断面観察の結果、木棺が埋置されていたような痕跡は全く検出できなかった。

出土遺物として土師質の皿、瓦器椀の破片、鉄刀がある。鉄刀は長さ約31cm、刀身部幅2.8cm、茎の長さ約７cmで刃部の先端側はやや内反りの傾向を示す。土師質皿はいずれも13世紀代の特徴を示し、第７次調査地点で検出した建物とも同時期のものとみられ、該期の集落、もしくは屋敷地の一角に土壙墓が営まれたものと推定される。

第Ⅲ章　新免遺跡第44次調査

1．調査の経緯

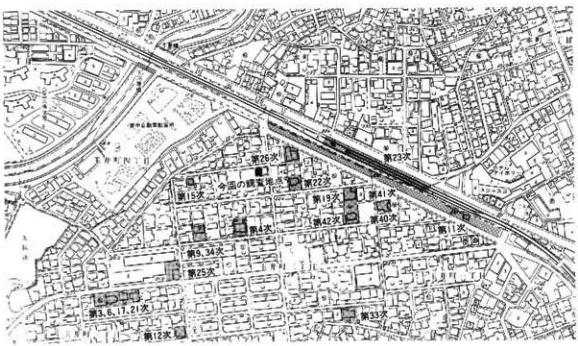


第10図　調査範囲図（1：400）

1995年７月、本町２丁目102における共同住宅の建築確認請が市に提出された。教育委員会社会教育課では、現地が新免遺跡の範囲に含まれること、建物の基礎工事によって遺跡が損壊を受ける可能性が高いことから、同年９月27日に試掘調査を実施し、地表下約30cmの段丘層上面において明確な遺構を検出するところとなった。ただ予定される工事内容のうち建物部分については基礎深度が遺構面に達しないため、建物よりも深い掘削が予定されるガレージ部分についてのみ発掘調査を実施することとなった。調査はガレージ相当部分の約11㎡を対象に、1995年10月23日から10月31日までの約１週間を要した。

2．位置と環境

新免遺跡は、通称豊中台地の北西部、標高22m前後のなだらかな低位段丘上に立地する。時代は縄文時代、弥生時代中・後期から古墳時代中・後期を経て中世の各時代に及ぶが、とくに



第11図　調査地位置図（1：5000）

中心をなすのは弥生中・後期と古墳後期である。これまでに豊中市域で確認されている弥生時代遺跡のなかでは、住居の検出数において他を大きく凌駕し、千里川を軸として結ばれる遺跡群の中核に位置づけ得ると考えられる。また弥生集落に重複して営まれた古墳後期集落からは、数多くの建物遺構のほか、溝、土坑等より焼成不良品や焼け歪みを伴う多量の須恵器が出土し、隣接する本町遺跡とともに千里川上流域に広がる須恵器窯跡群との関係が想定されている。今回の調査地点は、遺跡の北部、千里川を見下ろす段丘崖より約 100m程内側に入った比較的起伏の少ない地形上に位置する

3．調査の成果

(1) 基本層序

当遺跡は起伏の少ない段丘上という立地条件から、中世以降、耕作に伴う削平を受けやすく、それ以前に形成された遺跡の包含層や遺構面の検出深度も比較的浅い場合が少なくない。また箕面有馬電気軌道（現阪急宝塚線）の開通にともなう住宅開発の結果、昭和の初期頃より木造家屋の建ち並ぶ閑静な住宅地となって今日に至っている。ただ木造という簡素な基礎が幸いしてか、遺跡の遺存状況は全体に良好で、これまでに実施した調査の結果、非常に密度の高い遺構群が検出されている。ただ今回の調査地点では、近・現代の攪乱が段丘粘土層にまで及んでおり、包含層の遺存はほとんど認められなかった。遺構は整地層直下の段丘粘土層上面において検出したものである。

(2) 検出した遺構と遺物

検出した遺構として、土坑４基、柱穴を含むピット34基がある。ピット34基のうち、深さ30cm以上を計測するものは13基で、いずれも建物の柱穴とみられる。柱穴のうちのいくつかは直線もしくはL字状の配列をふし、建物跡の一部である可能性が考えられる。ここでは土坑のほか、建物跡の可能性の高い柱穴列を取り上げ、概要を記すこととする。

柱穴列１　北西－南東に並ぶ３個のピットである。直径20～30cm、深さ30～40cm、柱間は 1.4～1.6mを計測する。調査区の南西コーナー付近で検出した深度30cmのピットは、ちょうどこの柱穴列と直行する位置関係にあり、同一建物に所属するものと考えることも可能である。あるいはこの南西コーナーの柱穴を柱穴列２に属するものとし、建物はさらに南側に続くと考えることもできる。

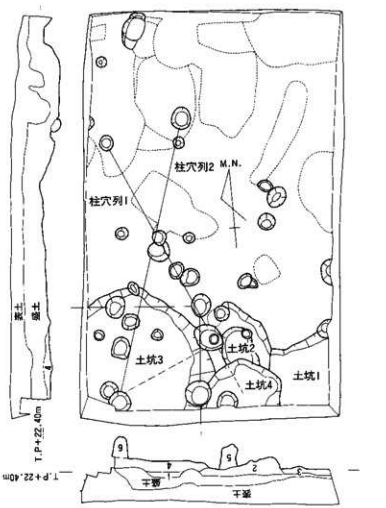
柱穴列２　柱穴列１と交差して並ぶ３個の柱穴である。直径30cm前後、深さ32～37cm、柱間は1.8～ 2.1mを計測する。柱穴の重複関係から、柱穴列１が新しい。最も北側の柱穴から短い脚台付きの鉢が出土している（第13図９）。口径13.2cm、器高 7.8cm。斜め上方に直線的に開く杯部に、底径 5.1cmの短い脚台が付く。器面は風化しているが、杯部外面に鈍い指頭調整の痕跡を残す。弥生後～終末期に属するものと推定される。

柱穴列３　南北に並ぶ２個の柱と、それと直行する位置関係にある計３個の柱穴からなる。柱穴

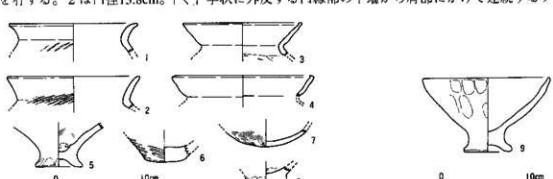
の規模は直径25～35cm、深さ20～24cmで柱間はともに1.2mで等しい。柱の配列から建物は南側に続くと推定される。北東コーナーの柱穴から須恵器の破片が出土している。

土坑1・2・4　調査区南端で土坑3とともに重複する3基の土坑ある。当初、竪穴住居の一部かともみられたが、掘形の形状から3基の土坑と判断した。いずれも一部を検出したにとどまり、全体の形状、規模、性格等は判然としない。また土坑2、4は当初、同一の遺構とみて掘り下げたため、出土遺物を区別することは困難である。

出土遺物（第13図）のうち、1が土坑1に伴うものであるほかは、土坑2、4から出土した。1は壺の口縁部で口径13.5cm。やや丸みを持って外反する口縁部を有し端部は丸くおさめる。体部上半に粗いタタキ目を残す。土坑2、4から出土したものの中で、2、6、8は弥生V様式の特徴を残し、3、4、7は布留型の特徴を有する。2は口径13.8cm。「く」字状に外反する口縁部の下端から肩部にかけて連続するタタ



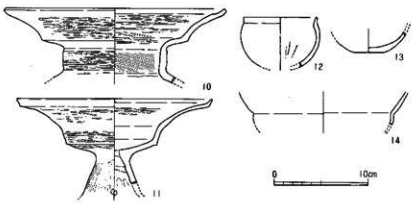
第12図　遺構平面図（1：50）



第13図　土坑1・2・4、SP－6出土遺物　（1：4）

キ目を残す。3は口径12.cm。大きく「く」字状に外反する口縁部を有し、端部は内側に小さく折り返し肥厚する。口縁部内外面はヨコナデにより調整し、体部内面は上端部を残し鋭いヘラケズリが施される。4は口径14.3cm。やや内弯気味に開く口縁部を有し、端部は内上方にわずかにつまみあげる。内外面ともにヨコナデ調整が施される。5は台付き鉢の底部で、底径5cm。体部内面に一部ハケ調整の痕跡を残す以外、丁寧なナデが施される。6は甕の底部で、底径4.5cm、外面にタタキ目を残す。7は甕の底部である。丸底の形状を呈し、外面に細かいハケ調整が施される。8は甕の底部とみられる。底径4.5cm、内面をハケ、底部外面を強い指頭調整により整える。

土坑3　検出した範囲は円形に近く、東西1.70m、南北1.65m、深さ10cm未満を計測する。覆土中より比較的残りのよい高杯、壺口縁部などが出土した（第14図）。二重口縁壺の口縁部（10）は、口径23.2cmで、ほぼ垂直に立ち上がる頸部から一旦水平に開き、再び大きく逆ハ字状に外反する。口縁端部は傾斜する狭い面をなす。口縁部の内外面、および頸部外面はともに水平方向の細かいヘラミガキ、頸部内面は斜め方向のハケ調整が施される。高杯（11）は、口径20.6cmで、ハ字状に開く中空の脚部に、有段口縁の杯部が取り付く。杯底部と口縁部との境界の段は明瞭で、外面下方に粘土がわずかに垂下する。この段から口縁部が大きく外反し、端部は斜め上方につまみあげ、やや幅広の面をなす。調整は、杯部内外面をナデののち水平方向の細かいヘラミガキ、脚部外面を縦方向のヘラミガキ、内面をナデによる。脚部には数は不明であるが透かし孔の一部が観察される。鉢（12）は、口径7.5cm、残存高5.3cm。球形の体部から、垂直方向に短く立ち上がる口縁部を有する。口縁部は強いナデ、体部外面はハケ、内面はハケのちナデにより調整する。鉢の底部と見られる破片（13）は、底径3.3cm。14は径がやや大きいが、体部の浅い丸底の鉢と思われる。丸い体部から口縁部がやや内弯気味に大きく開く。風化のため調整は不明。



第14図　土坑3出土遺物　（1：4）

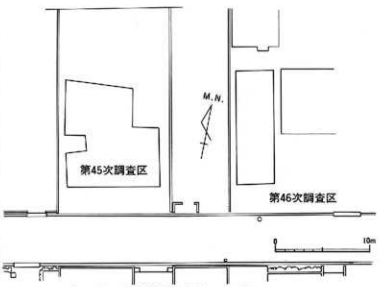
4．まとめ

調査範囲の制約から、柱穴など検出遺構の具体的な性格を明らかにすることはできなかったが、出土遺物の中には、土坑3をはじめ当集落における庄内～布留期の土器様相を考える上で、良好な資料が含まれている。

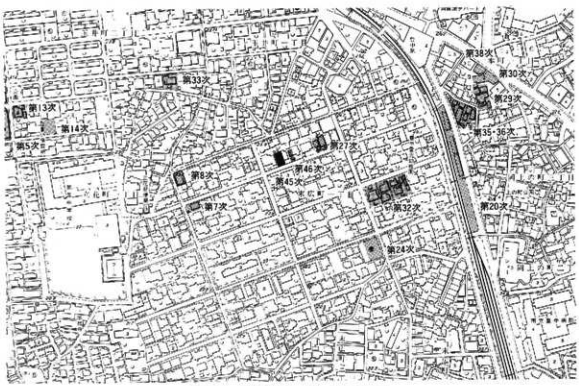
第Ⅳ章　新免遺跡第45次調査

1．調査の経緯

1995年１月に提出された建築確認申請の内容にもとづいて、教育委員会社会教育課では、現地が新免遺跡の範囲に含まれること、建物の基礎工事によって遺跡が損壊を受ける可能性が高いことから、同年３月18日に試掘調査を実施した。その結果、現地表より10～20cmの深さにおいて、地山の洪積段丘層を検出し、その直上において古墳の周濠ともみられる須恵器を含む溝状遺構等を確認するところとなった。発掘調査が必要と認められる範囲である約95㎡を対象に、1995年４月23日から５月31日までの約１カ月間を要して調査を実施した。



第15図　調査範囲図（1：400）



第16図　調査地位置図（1：5000）

2．位置と環境

新免遺跡は、通称豊中台地の北西部、標高22m前後のなだらかな低位段丘上に立地する。遺跡の時代は縄文から中・近世に及ぶが、とくに中心をなすのは弥生中・後期と古墳後期である。これまでに今回の調査地点をほぼ北限として、遺跡の南部より数基の古墳が検出されている。新免古墳群とも呼称されるこの古墳群は、集落跡と併行する６世紀初頭から中頃に及ぶ時期のもので、集落と墓域との密接な関係が想定されてきた。また、集落との関係が想定される桜井谷窯跡群とともに、墓地、居住地、生産地の三者の関係を具体的に明らかにしうる数少ない遺跡である。

3．調査の成果

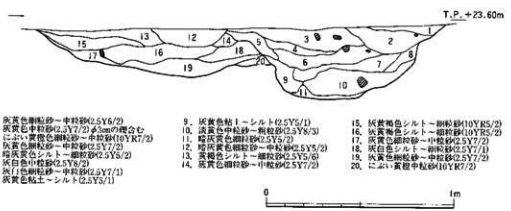
(1) 基本層序

当地点は、現地表下10～20cmの薄い表土層の下は段丘を構成する地山粘土層となる。本来存在したと思われる中、近世の耕土層、床土層は近、現代の開発により削除され、まったく残存していない。したがって当地点では、基本層序といえるほどものは存在しない。

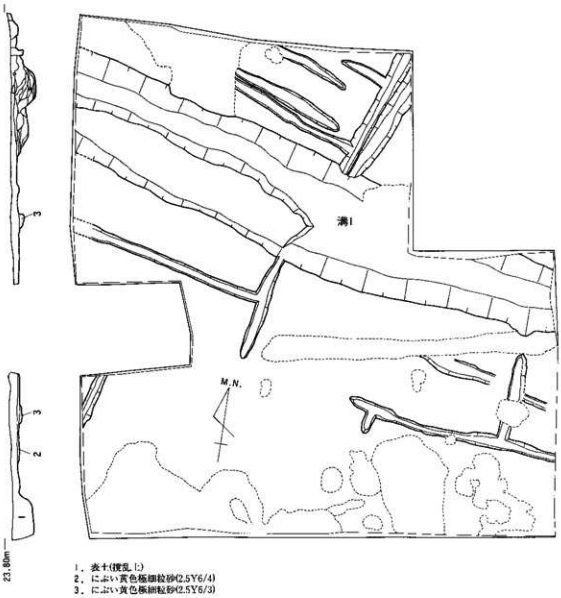
(2) 検出した遺構と遺物

検出した遺構として、水路とみられる溝１条のほか、耕作に伴う小溝12条がある。

溝１　北西－南東方向に走る検出長約11m、幅1.35～2.35m、深さ37～44cmの比較的大型の溝である。溝の掘形は東西で異なり、東半部が断面U字形の明らかに１条の溝を示す掘形をもつのに対し、西半部は北側が一段深く、南側が約15cm前後高くなっており、前後して掘り込まれた２条の溝の重複を示すものとも考えられた。溝西半部の土層の堆積状況からは、かろうじて南側の埋没後北側が新たに掘り込まれたことを示す状況が窺えたものの、第17図に示すほど実際には必ずしも明確なものではない。西半部の上段部分東端が中央付近で途切れていることや、溝の東側断面において明確な切り合いが認められないことなど、２条の重複を積極的に証明する材料は乏しい。したがって溝西半部の特異な状況は、当初からの形状を示すものと判断したい。



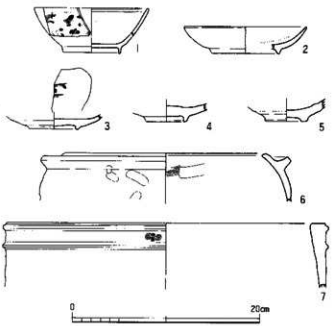
第17図　溝１土層断面図（1：20）



第18図　遺構平面図（1：80）

溝の堆積土の状況は、概ね灰白色ないし灰褐色のシルト～細粒砂を基本とするが、とくに溝東半部から西半部北側の深い部分において、中央部に断続的な細粒砂～中粒砂の堆積が厚く認められた。幾度かの強い流水作用の結果、運搬された土砂により埋没したものと推定される。なおこの砂層中より古墳時代後期の須恵器、中世の瓦器、近世の陶磁器などの破片が数多く出土した。須恵器が最も多く、いずれも転磨による摩滅が著しい。

当溝から出土した遺物として、摩滅の著しい古墳時代の須恵器の他、伊万里の椀、皿、唐津の皿、須恵質の羽釜、瓦質の火鉢などがある（第19図）。伊万里の椀（1）は、口縁内外面に2条の圏線、外面に草花文を呉須で描く。2、3、4は伊万里の皿である。2は口径13cm、器高



第19図　出土遺物（1：4）

3.8cmで、内面に呉須で文様を描くが、内容は不明。3は底径5.2cmで、見込みに鈍い呉須による草花文とみられる文様を描く。4は底径4.4cmで、見込みに幅1.8cmの釉ハギの痕がめぐる。5は唐津の皿である。底径4.6cmで内面に2か所のトチン痕を残す。須恵質の羽釜（6）は口径約20cm。丸い体部から口縁部がそのまま斜め内方にのびる。羽部は短く貧弱である。瓦質の火鉢（7）は口径約34cm。口縁部に2条の突帯を付し、その間に雲気様のスタンプ文を施す。

当溝は、わずかに混入した陶磁器の特徴から18世紀後半を中心とする近世に属するものであり、溝の形状、堆積土、周辺の状況から、おそらく段丘上の開墾に伴う農業用水路であろうと推定される。

小溝　溝1に平行ないし直行する溝で12条を検出したが、深度が浅いため重機掘削の段階で消滅してしまったものが多い。幅15～35cm、深さ5cm未満で、耕作土とみられる灰色細粒砂を覆土とする。溝1を段丘上の灌漑に伴う用水路とみれば、方位を同じくするこれら小溝は同時期の耕作痕である可能性が高い。

4．まとめ

確認調査の際に検出した溝は、古墳の周溝という当初の予想に反して、近世の農業用水路である可能性が高いことが判明した。新免遺跡の立地する段丘上は、中世以降、耕地開発が進められ、明治14年の陸軍陸地測量部による地形図にも窺われるように、近代に至るまで耕地利用が続けられた。ただ近世以後の開発を物語る具体的な遺構は、耕作による小溝や井戸などを除いて、ほとんど知られておらず、今回さらに耕地開発の実態を明らかにする資料が得られたことは成果といえよう。

第Ⅴ章　新免遺跡第46次調査

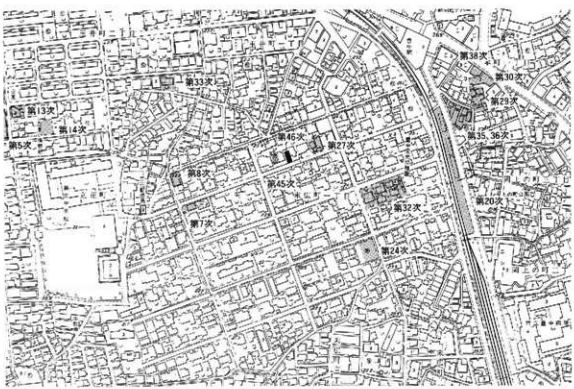
1．調査の経緯

当該調査地点は、末広町１丁目86に位置している。専用住宅建築に伴って試掘調査をおこなったところ、遺物包含層および遺構の存在を確認した。このため工事に先立って当該調査をおこなう運びとなった。当該調査は1996年４月23日～５月24日の期間で、遺物包含層および遺構が損壊を受ける47.3㎡を対象におこなった。

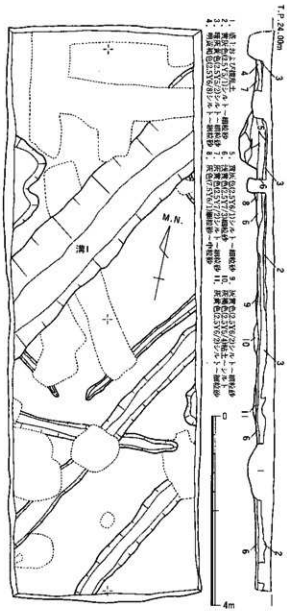
第20図　調査範囲図（1：400）

2．遺跡の概要

新免遺跡は、西側および北側を千里川に伴う河川段丘に、東側を阪急宝塚線で画されている。東西約880m、南北約550mを測り、市内でも範囲の広い遺跡として知られる。調査件数は、他の遺



第21図　調査地位置図（1：5000）



第22図　調査区全体図（1：80）

跡と比べて最も多く、かつ個人および共同住宅の建て替え、阪急宝塚線連続立体交差事業などが主な調査契機となっている。これまでの調査により、縄紋時代から近世にかけての遺構・遺物を検出しているが、特に弥生時代中期・古墳時代後期のものが多くみられる。近年、遺跡の南半で古墳群の存在が知られており、同時に集落跡からは焼け歪んだ須恵器が検出され、一帯に存在する桜井谷窯跡群との関連も指摘されている。

3．調査の成果

(1)基本層序

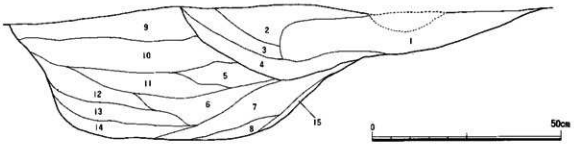
調査区における基本層序は、以下の通りである。現地標高は、T.P.+24.0m前後であり、約0.3mで遺構面に達する。少なくとも遺構面の上面まで一様に包含層はほとんどみられず、後世の削平を受けた部分が大半であったと考えられる。

(2)検出した遺構

今回の調査では47.3m²という狭さにもかかわらず、土壙3基、溝7条といった多くの遺構を検出した。遺構の多くは後世の削平を受けている。土壙は3基みられるが、いずれも深度数cm程度しか残存しておらず、その性格、年代を明らかにできるものは少なかった。溝は北東から南西にのびるものと、北から南にのびるものがある。前者が多く、これらの幾つかは同時期のものと考えられる。これらの遺構からは近世後期の陶磁器を中心に須恵器および土師器などを検出している。

今回の調査では、溝1を中心に数条の溝がみられ、このほかの遺構はほとんどみられない。全体として遺跡の性格を決定付けるような遺構は希少であった。ここではこれらの中でも、遺構の溝跡を中心にみてゆくことにする。

溝1　調査区の北側にあり、北東から南西に向けてのびるやや幅の広い溝。幅約1.4mであり、深さは現状で約35cmある。時期的には少なくとも2段階存在し、古いものが深く、新しい段階のものは浅く掘られている。新旧いずれの段階においても、それまでに形成された層が粗粒砂層によ



1．黄褐色(2.5Y5/3)粘土～細粒砂
2．にぶい黄褐色(10YR4/3)細～粗砂
3．にぶい黄褐色(10YR5/3)中～粗粒砂
4．褐色(10YR4/4)細～中粒砂
5．褐色(10YR4/6)粘土～細粒砂
6．褐色(2.5YR4/4)細粒砂
7．灰黄色(2.5Y6/2)シルト～粗粒砂
8．灰黄色(2.5Y7/2)粘土～シルト
9．にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質～細粒砂
10．灰黄褐色(10YR4/2)細～中粒砂
11．灰黄褐色(10YR5/2)シルト～細砂
12．灰黄褐色(10YR4/2)粘土～細粒砂
13．灰褐色(7.5YR4/2)粘土～細粒砂
14．暗灰黄色(2.5Y5/2)細～中粒砂
15．灰黄褐色(10YR5/2)シルト～細砂

第23図　溝１土層断面図　（1：10）

って削られており、洪水などによって幾度も撹拌されたことがわかる。溝１と同様の遺構は、近隣でおこなわれた45次調査でも検出している。いずれも粗粒砂層による撹拌を幾度も受けていること、最も新しい遺物の時期が非常に近いこと、両者の延長線が交差するとみられることなどから、これらは同一の性格をもつと考えられる。また、溝１の埋土に水流の痕跡がみられること、調査区内に平行する溝があることなどから、この溝は田畠の水利利用にともなうものと考えられ、近世以降の開墾に伴って掘削されたとみられる。遺物は18世紀後半を中心とする陶磁器が主体を占める。須恵器などの土器もあるが器壁の摩滅がみられ、後世の混入と考えられる。

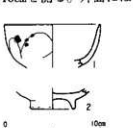
溝　溝１以外にも、幾つかの溝を検出している。内法は全体に幅20～30cm前後、深さ数cm前後のものが多い。軸方向は溝１とほぼ平行するものもみられ、これらは時期を同じくするものもあると考えられる。遺物は若干出土しているが、全く遺物が出土しないものもあり、時期を特定するには至らなかった。

(3)出土遺物

今回検出した遺物には、須恵器、土師器、近世の陶磁器などがあった。しかし、その多くが細片であり、図示できたものは以下の２点であった。また、溝1の埋土から出土した遺物の多くは、水流による撹拌によって摩滅ないしは傷がついている。

１は溝1から出土した肥前地域のものと考えられる磁器丸椀である。口径約10cmを測る。外面には草花文を描き、比較的シャープな口縁端部をもつ。外面は激しい水流による砂の撹拌によってついたと考えられる細かな傷が認められる。時期は18世紀頃と考えられる。

２は産地は特定できないが、京焼風の陶器と考えられる。表土層掘削時に検出したものである。比較的分厚い高台を有し、外面には荒いロクロ調整がみられる。時期は18世紀以降とみられる。



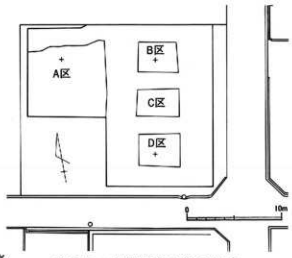
第24図　出土遺物（1：4）

4．まとめ

今回の調査では、溝跡を中心とする遺構を検出した。当該調査区で検出した溝の一部は、出土遺物などから近世後期以降に掘削されたものといいうる。その性格は、この遺構埋土にみられた粗粒砂と粘土の混じり合った状況から判断すると、田畑の水利施設に関連するものとみられる。今回の事例は、豊中市域における近世後期の土地利用を考える上で重要な教唆を与え得るものと評価することができる。今後、周辺の調査においては、こうした近世以降の遺構が検出される可能性もあるといえよう。

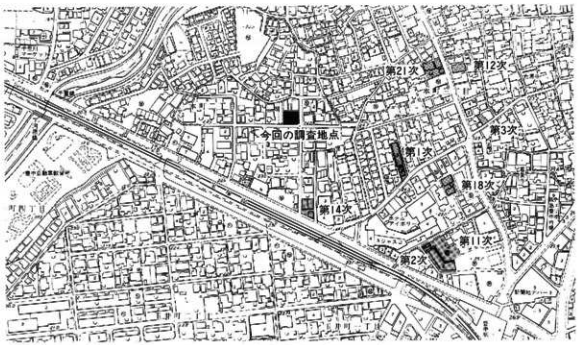
第Ⅵ章　本町遺跡第22次調査

1．調査の経緯



第25図　調査範囲図（1：400）

1995年７月、本町２丁目102における共同住宅の建築確認申請が市に提出された。これを受けて教育委員会社会教育課では、現地が本町遺跡の範囲に含まれること、予定される建物の基礎工事によって遺構が損壊される可能性が高いことから、事前の試掘調査を実施される旨申し入れ、施主側はこの点について了承された。しかし設計・施工業者間の連絡が徹底されておらず、不幸にも確認調査がなされないままに工事が着手されることとなった。1995年11月１日、たまたま現地付近を通りがかった市職員が工事中の現場に遭遇し、急遽掘削箇所の断面観察を行った。その結果、建物予定範囲のほぼ全域にわたって遺構、遺物の存在が確認され、ただちに工事の停止、ならびに現状保存の指示を行った。後日、役所内にて設計・施工の両者に対し事実確認を行うとともに、その後の対応について協議を行い、施主の了承を得て、残された部分の調査を行うことで話し合



第26図　調査地位置図（1：5000）

いがまとめられた。以上の経緯をふまえ、1995年12月23日から１月31日までの約１カ月間をもって発掘調査を実施する運びとなった。

２．位置と環境

本町遺跡は、通称豊中台地の北部、低位段丘上に立地する。時代は弥生代中期から中世の各時代に及ぶが、とくに中心をなすのは弥生後期と古墳後期、奈良・平安の各時代である。遺構は各時代とも住居遺構を中心とする集落関連遺構が主体をなしている。ただし古墳後期集落からは、溝、土坑等より焼成不良品や、焼け歪みを含む多量の須恵器が出土し、千里川上流域に広がる古墳時代窯跡群との関係が想定されている。今回の調査地点は遺跡の南西部、段丘崖より約100m程内側に入った比較的起伏の少ない地形上に位置する。

３．調査の成果

（１）基本層序

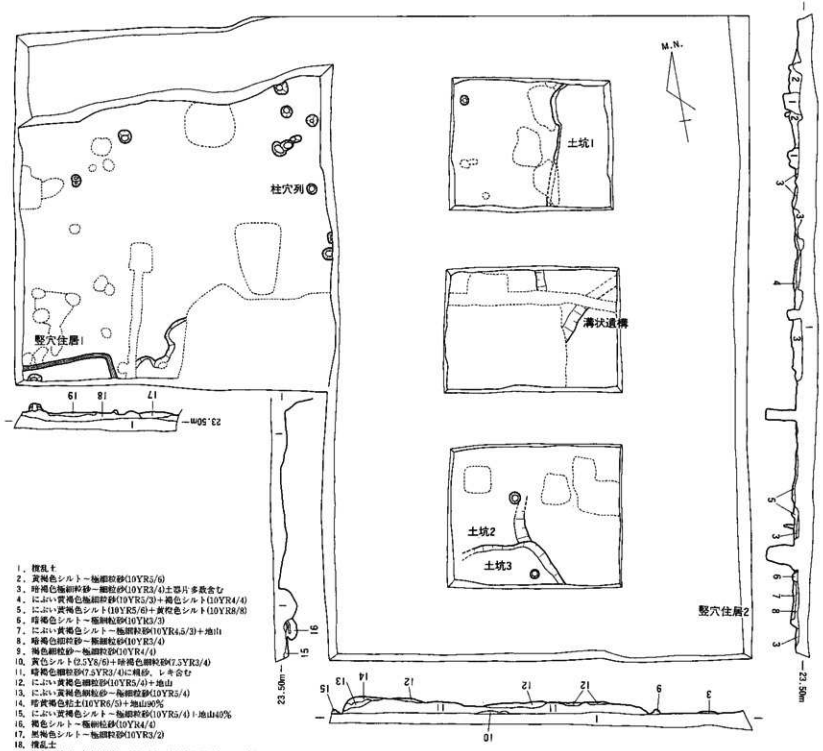
まず調査区内の地区名称について述べておく。調査区内はすでに行われた基礎工事によって大きく４か所に分割されていた。そのため地区設定にあたっては通常の杭によるグリッド法によらず、分割された各部分をＡ～Ｄ区と呼称することとした。遺物の取り上げ等は、すべてこの地区設定にもとづいている。

さて調査地点周辺は、阪急宝塚線の開通に伴う開発により、整然と区画された住宅地として今日にいたっている。もともと当遺跡は中世以来、段丘地形の比較的良好な地形環境を占めることから、耕地開発の対象とされることが多く、それ以前の集落跡等に関わる遺構、遺物包含層は大きく削平されている場合が少なくない。今回の調査地点も、地表よりマイナス40cmまでは近代以降の開発に伴う撹乱土で覆われ、調査地内の一部を除き遺物包含層はほとんど削除されていた。また竪穴住居等の遺存深度から、削平は段丘層の一部に達しているものと推定される。したがって、調査範囲の制約に加え、上記の理由から各遺構の重複関係等を層序的に把握することはほとんど不可能な状況であった。

調査の結果、Ａ～Ｄ区の各区では最終遺構面のレベルに差異が認められた。すなわちＡ、Ｂ両区では撹乱土の直下で地山の段丘層を検出したが、Ｄ区では撹乱土の下に、須恵器を含む20cm前後の厚い包含層状の堆積土が存在していた。また最終遺構面の形状から、Ｄ区を中心に複数の遺構が重複している可能性も考えられるが、残存範囲の制約により、それぞれの範囲を明示することは困難であった。

（２）検出した遺構と遺物

検出した遺構として、竪穴住居２、土坑３以上、溝状遺構１、ピット15等がある。これらは調査範囲の制約に加えて、基礎工事による分断・損壊を受けており、各遺構の規模、範囲を明確にすることが困難なものが多い。以上の制約を考慮にいれながら、以下、主要な遺構、遺物につい



第27図　遺構平面図（1：100）

て説明を加える。

竪穴住居１　A区南西部において、幅約10cm、深さ５cm未満の小規模な溝を検出した。L字状に屈曲しており、方形プランの竪穴住居にともなう壁溝の一部と推定される。北辺、東辺はいずれも調査範囲外に続いていくため、住居全体の規模は明確でない。壁溝で囲まれた範囲内には、住居内覆土、もしくは貼り床と見られる褐色～暗褐色シルト混細砂の堆積があり、ここから若干の遺物が出土している。なお住居内にある直径38cm、深さ22cmのピットは、柱痕をともなう明らかな柱穴であるが、検出位置から判断して、当住居とは直接関係のない別の建物跡にともなうものと推定される。出土遺物はいずれも細片のため、詳細な時期は不明である。

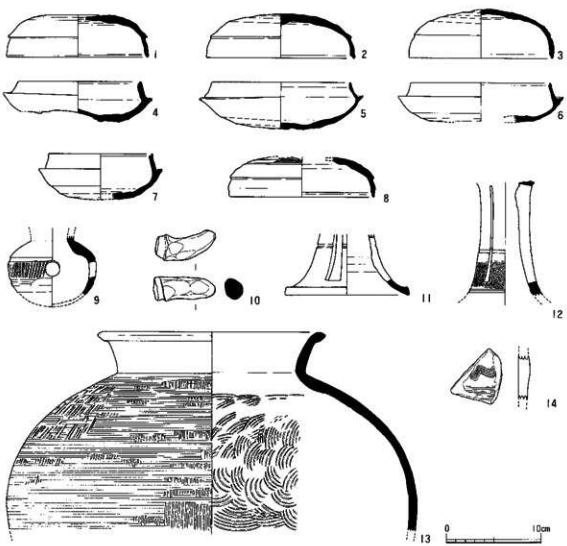
竪穴住居２　調査区東壁の南端付近において、土層観察の結果、かろうじて検出できた竪穴住居である。検出長約1.5m、深さ14cm前後で、おそらく方形プランの住居の北西コーナー付近が切断された状況を示すものと推定される。断面観察の結果、北と南に幅25cm前後の壁溝があり、その間に貼り床および覆土とみられる２層の堆積土が認められた。出土遺物はとくになく、所属時期も明確でない。

柱穴列　A区北東部において、９基のピットがやや集中して検出された。このうち４基は直径30cm前後、深さ20～35cmを計測し、一直線に並ぶことから建物跡に関連するものである可能性が高い。またその方位は竪穴住居１の方位にほぼ共通する。

その他、A区北西部、B区、D区より比較的掘形の明瞭なピットが少数ながら検出されている。住居等にともなう可能性が高いが、必ずしも明確でない。

土坑１　B区東側において検出した土坑である。西側肩部の落ちを検出したのみで、全体の規模、形状は不明である。深さは10～20cmを計測し、肩部の立ち上がりは比較的急である。覆土は概ね２層に分かれるが、このうち上層より多量の須恵器片が出土した。いずれも破片ばかりで完形を保つものはなく、とくに赤褐色の色調を呈した焼成不良品が多く含まれる点が注目された。C区の東側部分を覆う須恵器片を多量に含んだ包含層状の土層は、遺物の出土状況からB区の土坑１に続くものである可能性が高い。

出土遺物として須恵器の杯身・蓋杯・高杯・甕・瓶・甑等のほか、一点の弥生中期の壺破片がある（第28図）。蓋杯（１～３）は口径15cm前後、器高4.5～5.3cm。口縁部と体部を分ける段は比較的明瞭で、体部の約３分の２に回転ヘラケズリを施す。口縁端部内面の段は、凹線状を呈するもの、鈍い段を成すものがある。杯身（４～６）は受部径15.8～17.5cm、器高４～５cm。体部は斜め上方に緩やかに弯曲してのび、水平ないし斜め上がりぎみの受部から口縁部が斜め上方にやや外反気味に立ち上がる。口縁端部の段は６がやや細い凹線状を呈する他はさほど明瞭でない。このうち４は著しい焼け歪みを伴う。７の杯身は受部径13.2cm、器高 4.8cmで、体部や口縁端部の形状から４～６とは明らかに型式・時期を異にする。８は有蓋高杯の蓋とみられるが、つまみを欠失している。口径15.2cm。体部と口縁部を分ける稜は比較的シャープで、口縁端部内面の段は明瞭な凹線状を呈する。また体部上半には平行する２条の凹線がはしり、上部の凹線を

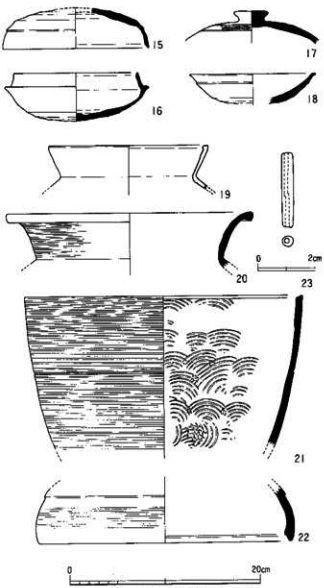


第28図　B区土坑1出土遺物（1：4）

挟んで2列の櫛描列点文が綾杉状に施される。11・12は高杯の脚部である。12は脚柱部の中位に施された凹線をまたぐように幅5mm以下の狭い3方透かしが一段だけあけられる。この脚柱部下部には櫛描波状文が密に施される。壺（9）は体部径9.4cmで、2条の凹線の間に細かい櫛描列点文を施す。10は甑の把手である。甕（13）は口径22.3cm、残存高21cmで、やや張りの強い体部から短い口縁部が開き気味に付く。口縁端部は外側にやや肥厚し、断面菱形の玉縁状をなす。体部外面は縦方向の平行タタキのち回転ハケ調整、内面には同心円の当て具痕が顕著である。14は弥生土器の細片である。壺の体部上半部の破片と見られ、櫛描による波状文と直線文が交互に施される。

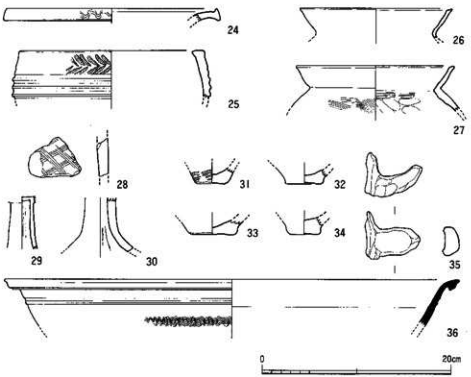
またC区東側の、土坑1の続きと見られる部分より出土した遺物についてふれておく（第29図）。須恵器では杯蓋、杯身、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、甑、器台のほか、土師器甕の口縁部がある。杯蓋（15）は口径15.4cm、器高約4.3cm。天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、口縁端部内

面の段は比較的明瞭である。杯身（16）は受部径15.2cm、器高5cm、丸い体部から受部が水平にのび、口縁がやや内傾して立ち上がる。口縁端部内面の段は鈍い。有蓋高杯の蓋（17）は天井部に2条の凹線を巡らし、その間に密な列点文を施す。頂部に逆台形状のつまみを付す。無蓋高杯の杯部（18）は浅い皿状の杯部を有し、口縁端部の形状や口縁部下に巡らされた段など、シャープな仕上がりをみせる。甕の口縁部（20）は口径25cmで、大きく外弯しながら開き、端部は玉縁状に丸く仕上げる。外面は回転ハケ調整。21は甑の体部破片である。口径27.8cm残存高16.1cmで、やや内弯気味に急角度で立ち上がる体部を持ち、中位に1条の凹線を巡らす。外面の調整は縦方向のタタキのち回転ハケ調整、内面に同心円の当て具痕を残す。把手部は欠失している。器台（22）は底径26.2cmで、丸く外方に張りながら大きく内弯する脚端部を有する。外面に1条の段を有し、回転ハケ調整を施す。



第29図　C区出土遺物（1：4）

土坑2　D区の最終遺構面ほぼ中央付近で検出した南北方向の緩線から、なだらかに西側へ下る土坑状の落ちである。北側にいくほど不明瞭となるが、最大深度約17cmを計測する。調査区西壁の断面には続かず、また南側は土坑3と重複するため全体の規模・形状は明らかでない。　土坑2に伴う遺物として、第30図25、26、31などがある。25は弥生中期後半の台付鉢とみられるもので、口径17cm、残存高10.2cm。体部下半に3条の凹線文、上半部に粗い羽状列点文が施される。26は土師器甕の口縁部である。頸部の屈曲は鈍く、口縁部が内弯ぎみに開く。口縁端部は内傾する面を成して若干肥厚する。全体に風化が著しく、細部の調整は明らかにし難い。31は弥生後期の甕底部である。外面にタタキメを残す。3点はいずれも所属時期を異にするため、明確にはし難いが、最も新しい26を遺構の時期と見做せば、古墳時代前～中期頃に比定できようか。なおこれらの土器に混じって、1点の管玉が出土した。長さ2.63cm、最大径4.3mmを計測し、径1.8mmの穴が両面から穿孔される。石材は



第30図　D区出土遺物（1：4）

緑色凝灰岩で、風化はあまり進んでいない。

土坑3　D区南端にて検出した。深さ約25cmを計測し、部分によって異なるが肩部は比較的急角度で落ち込む。検出範囲の形状は弧状を呈し、さらに南側に続いていくものと推定される。調査区南壁の断面を見ると、長さ約6.6m、深さ約40cmを計測する大規模な土坑状の落ちが認められ、肩部の形状と位置、覆土の状況から、土坑3に続くものである蓋然性が高い。全体の形状を復元すると、D区での検出部をコーナーとする隅丸方形の平面プランを想定することも可能である。また断面に認められる掘形の形状、とくに平坦な底の形状と肩部の立ち上がり方から竪穴住居の可能性も考えられる。しかし壁溝や明瞭な張り床は観察されず、その是非は明らかにし難い。遺物は細片に限られるが、須恵器を含まない点から、弥生後期～古墳中期に営まれたものと考えられる。

溝状遺構　C区東半部に続く土坑1の覆土を除去した後に、段丘層上面において検出した北東－南西方位の溝状遺構である。南東側の肩部は、直線的なラインが明瞭に観察されたので、単純に土坑1底部の起伏とすることはできない。ただし北西側の肩部については明瞭でない。この溝状遺構の延長かともみられる凹部が調査区東壁の北端部で認められるが、西壁にはこれに該当するような凹部はみられず、溝とするには根拠が乏しい。

D区出土遺物　D区は先にもふれたように、撹乱土の下に厚い包含層状の堆積があり、土坑2、3など複数の遺構が切り合う状況が観察された。第30図には土坑2を含め、D区からの出土遺物を掲げたが、概ねD区全体を覆う包含層には36などの須恵器や、28、29、31など弥生中～後期の

土器が含まれた。それに対して一部遺構埋土を含む下層には、須恵器はほとんど含まれず、弥生中～後期の遺物で占められた。

土坑２以外の包含層中から出土した遺物として、弥生土器の壺（24、28）、高杯（29、30）、底部（31～34）、土師器の甕（27）、把手（35）、須恵器の器台（36）がある。24は弥生中期の広口壺口縁部で口径21.8cm。大きく外反する口縁部より、端部が上下に短く拡張し面をなす。端面には歯数４本の擬描波状文が施される。27は土師器甕の口縁部から肩部にかけての破片である。張りの強い体部から口縁部が「く」字状に外反する。口縁端部は丸くおさめられるが、やや内傾する面をなす。調整は口縁部を強い横ナデ、肩部外面をハケ、内面の上端を横方向のハケ、それ以下をユビナデにより調整する。28は弥生中期の壺肩部と見られ、擬描による斜格子文が施される。29は弥生中～後期の高杯の脚柱部である。脚部上端径 2.4cmで、器壁は薄く、中空につくられる。杯底部は円盤充填法によるものとみられる。30は弥生後期の高杯である。下半部が大きくハ字状に開き、径４mm程度の円形の透かし孔をあける。31～34は壺、甕の底部である。35は幅に対して厚みが薄く、土師器甕の把手かと思われる。36は須恵器の器台で、口径47.8cm。丸い体部から口縁部が外反し、端部は２回段を成して肥厚する。体部上半には幅の狭い突帯を巡らし、その下方に擬描波状文を施す。

４．まとめ

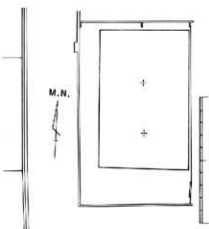
今回の調査では、不幸にも事前の基礎工事によって調査区の大半が損壊を受けていたため、１基の竪穴住居を除くと、ほとんどの遺構について形状・規模など具体的な事実を明らかにすることができなかった。しかし残されたわずかな遺構の内容から、当地点が古墳時代後期集落の一角に相当すること、また土坑１を中心に、焼成不良品を含む多量の須恵器が出土したほか、須恵器に伴って管玉が出土するなど、隣接する新免遺跡のあり方とも共通し、須恵器の流通に関わる集落という従来の見解を追認すべき事実が得られた点は成果といえる。

また、今回の調査に併行して実施した第21次調査と同様、少量ではあるが、弥生中期の土器が散見されたことで、当遺跡における弥生集落の初現が確実に中期に溯ることが判明した点は特筆されてよい。

第Ⅶ章　本町遺跡第23次調査

1．調査の経緯

調査地点は、本町３丁目73－1、76－1に所在する。被災した個人住宅の建替に伴い、試掘調査を行なったところ、良好な遺物包含層と遺構の存在が確認されたので本調査実施の運びとなった。なお、調査対象面積は建築面積と隣接地への影響を勘案して77㎡に設定された。



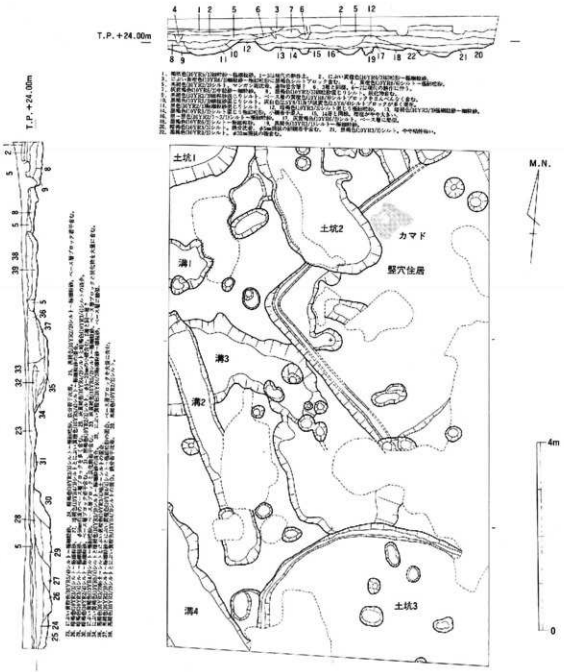
第31図　調査範囲図（1：300）

2．調査の概要

(1)基本層序

調査地周辺は洪積段丘上に位置し、洪積礫層やその間隙を埋める明黄褐色シルト層の上部が、現在の地表面直下に検出されることも少なくない。これらの堆積年代は少なくとも後期旧石器時代以前に比定され、人類の諸活動の痕跡はその上面で検出される。また、自然現象による土砂の流出や後世の耕作や開発行為によって削平を受けたため、通有の遺物包含層は遺存し難く、浅い谷状地形に当たる部分や遺跡の南端斜面において若干の包含層が検出される程度である。当該調査地点でも暗褐色系の堆積層がほぼ全面にわたって見られたが、これらはほとんどが重複して残存した遺構の埋

第32図　調査地点位置図（1：5000）



第33図　調査区平面・断面図（1：80）

土である可能性が高い。したがって当該調査区内の基本的な堆積土の構成は、現代の盛土、近世から近代にかけての耕作土が薄く堆積し、遺構埋土の暗褐色系シルト層をはさんで、ベース土の明黄褐色系シルト及び砂礫層となっている。

(2)検出した遺構

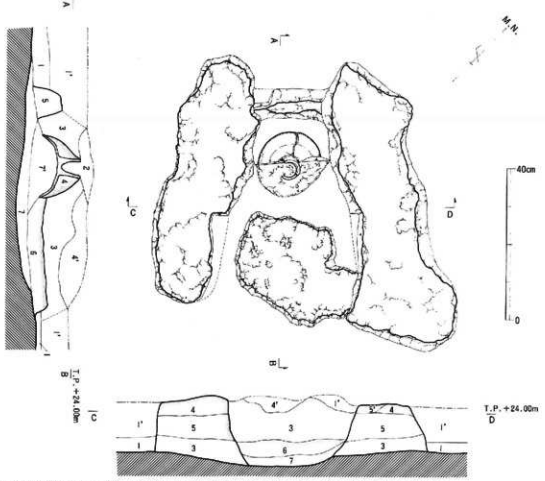
検出した遺構群は、各々暗褐色系の堆積土上面から構築されたものと推定されるが、遺構間の重複関係が把握し難く、最終的にはベース層の上面まで掘削を進めた段階で平面的なプランを確

定したものである。したがって検出した遺構の深度は上部が削平された数値を示している。また、遺構の構築時期については、土坑3（弥生？）を除くすべてが古墳後期、6世紀中葉から後葉に該当するものと考えられる。以下にこれらのうち、主要な遺構について概述していく。

竪穴住居　当該調査区において確実に竪穴住居と考えられる遺構は、1棟のみである。竪穴住居は、南東部分が削平を受けているため正確ではないが、南側に遺存していた浅い溝状の窪みを壁溝のなごりとして復元すれば、一辺が約4mで隅丸方形の平面プランを持つものと考えることができ、後述するピットを主柱穴として捉えれば一辺が約5m前後の規模を推定できる。壁溝は西側では若干遺存していたものの、削平が著しいこともあって全周には確認できなかった。床面には若干の窪みなどを埋める薄い貼床状の堆積土があり、さらにその上を暗褐色系の堆積土が覆っていた。竪穴住居に伴う須恵器などはほとんどがこの上面に平面的に分布しており、住居の廃絶に伴って同時に廃棄された可能性が高い。

竪穴住居北西辺の右隅には「つくりつけ」のカマドが検出された。カマドは辺に直交して築かれており、遺存した高さは約20cmを測る。両袖はほぼ完存し、焚き口や燃焼部にあたる内壁は被火して変質あるいは変色している。両袖ともに長さ約70cm、幅約20cmを測り、開口部の内法は幅約35cmを測る。また、大量の焼土ブロックや炭化物によって構成されていることから、数次にわたる修理や再構築がなされたことが推定される。焚き口から燃焼部への基盤（火床）面は、かなり強い熱変成を受けたようで非常に堅緻になっている。したがってこの部分については住居の貼床が変質したものか、カマド単体に付属するものであるかの判別が容易ではない。ただし、現状では断ち割りの断面観察の結果、その部分の土質が周囲から遊離していたことから、住居床面の形成とは異なる工程で設置されたものと考えておきたい。燃焼部の最奥中央には脚裾部を折り取った須恵器の高杯が伏せ置かれ、粘土で封入されていた。この粘土は表面が被火して変質しており、この状態で使用されたことを示している。さらに高杯の杯内部にも粘土を充填し、固定する際に安定させる工夫がなされていることから、支脚として利用されていた可能性が高い。高杯の真上付近を中心に土師器の長胴甕が破片になって散在しており、廃棄された時点では甕がカマド上に置かれていたままであった可能性も考えられる。また、破片は前庭部方向に展開するところから、天井部が破壊されると同時に崩落していった様子がうかがえる。カマド付近では数点の須恵器小破片を除いて、土師器甕のみが数個体分出土している。住居内出土土器のほとんどが須恵器で占められている事実とは好対照をなす。支脚の後方には、若干の空間をはさんで煙出し部のなごりであろうと考えられる粘土の立ち上がりが検出されたが、わずかに5cm程度しか残存していなかったので詳細は不明である。カマド本体と住居の壁溝想定ラインとの間隔は約15cmあるが、調査の過程では煙道部及び住居壁面への取り付きを明らかにすることはできなかった。

竪穴住居の床面では比較的深度の浅いピットが2基一組で検出されている。また、住居南側の撹乱内にもピットの底部が痕跡として検出されていて、これらを主柱穴として考えた場合、4本柱の上部構造が推定される。先述した南側壁溝を根拠とする一辺4mの復元では、カマドは住居

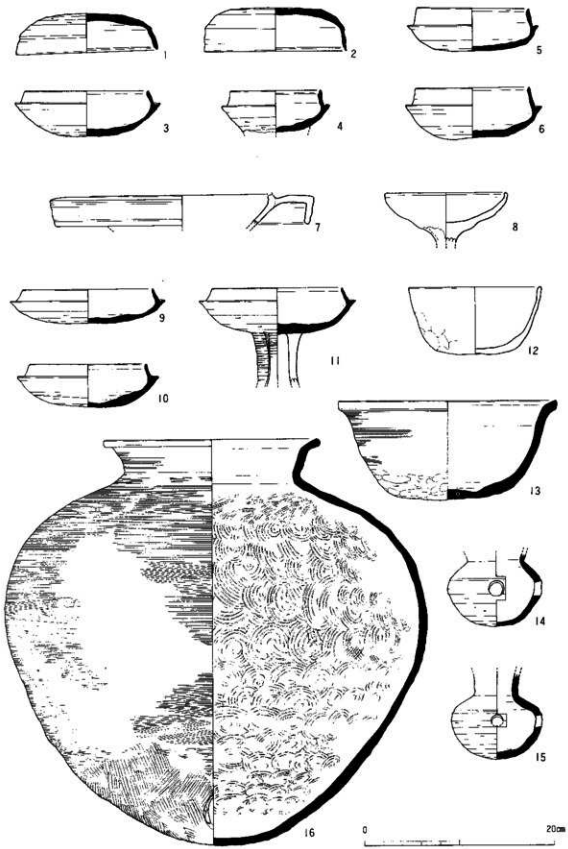


1．黒褐色(10YR3/1)シルト～細砂質。部分的に炭質土が混入する。焼化物、土器片若干含む。φ10cm前後の礫をまれに含む。
住居埋没あるいは床面整地時の廃棄か意図的に充填されたと考えられる。
1'．基本的には1層と同質。ただし、黄褐色(2.5Y5/3)砂質粘土ブロック(φ5cm前後)を若干含む。これは焼土壁が崩落されて再堆積したものと考えられる。
住居壁際の堆積層。3層との違いは非常に薄い。焼土ブロックが多量が混在形成。
2．灰褐色(7.5YR4/2)シルト～粘質粘砂。焼土粒やブロック(φ3cm以内)を若干含む。上層がとまく含む。
3．褐灰色(7.5YR4/1)シルト～粘質粘砂。黄褐色(7.5YR6/8)粘質粘砂の塊やブロック(φ3cm以内)を若干含む。
4．黄褐色(10YR5/6)～黄色(5Y8/7)砂シルト～粘質粘砂。基本層をしていて堅緻。何に充填を装置している粘土の前層は非常に堅緻。
4'．褐色(5YR7/6)砂シルト。堅緻。大小無数含む。1層はほとんどがこの層の上面に広がる。
5．黒褐色(7.5YR3/2)シルト～細砂質。黄褐色(7.5YR5/8)粘質粘砂塊やブロック(φ3cm以内)を大量に含む。
6．焼褐灰(5YR4/2)～灰白色(10YR8/1)。炭5～10mmの小炭と焼土粒(7.5YR5/8)のシルト。堅緻。火床面をなす。
7．基本的には1層と同一だが黄灰色(2.5Y6/1)。粘質土ブロックを多くなり、堅緻。いわゆるカマド袖部の整地層？
※調査の過程において、カマド袖部の構築土と住居の埋土の区別が困難であったため、一括して取り上げた。
※図中の補助線は基礎的な断面図を表示。色調やブロックなどの違いを表現するために異なる線分を示す。
また、断面図中の堆積土層下の遺構が断面に投影、一点鎖線はカマド構築面を示し、平面図中の堆積は誤って削剤してしまった部分の想定復元を示す。

第34図　カマド平面・断面図（1：10）

の北東隅に配置され、カマド右側方に空間の余地がない。さらにこの場合、主柱穴の位置はカマドの前庭部に復元するしかなく、非常に作業効率の悪い建築物になってしまうことから、4本柱で一辺5mという復元がより蓋然性が高いものと考えられる。ただし、ピットに関しては包含層の厚さを考慮しても主柱穴としては疑問の残る深度であることや、カマドを伴う住居に柱穴を持たない事例が報告されたことがあることからも、この住居の上部構造については当該地域や周辺での今後の資料増加を待って慎重に判断したい。

調査区南端部で検出された土坑3は、円形の平面プランを有し、周囲には整溝とも考えられる窪みが検出されるなど、竪穴住居の可能性がある。調査区内の円弧から復元すると直径約6.5mを



第35図　出土遺物実測図（1：4）

測る。主柱穴は明確にはできなかったが、出土遺物から弥生中期後半あるいは弥生後期前半の時期に該当する。床面と地積層の追究が不完全であったために時期の確定はできなかったが、本町遺跡において、近年になって弥生中期の遺物が若干ではあるが確認されはじめていることから、今後、該期の明確な遺構が検出される可能性があり、留意する必要があろう。

土坑　調査区内では様々な規模の土坑が10基程度検出されている。土坑１は調査区外に広がる楕円形の平面形状を持つ。底部は擂鉢状で深さ約25cmを測る。土坑２は竪穴住居と溝１に後出するもので比較的深度が浅く、広い。平面形状は不定形で両者ともに須恵器の破片が多く出土したが、既往の調査で検出された須恵器の集配・分別に係る土坑などとは若干異なる。通常の集落内における廃棄土坑と考えて大過なかろう。竪穴住居に伴わないピット群は現状では掘立柱建物として復元するに至っていないが、これらの土坑群と併存して集落を構成していたものと考えられる。

溝　溝１は北東から南西方向に検出されたもので、幅約60cm、長さ約２m、遺存した深さ約20cmを測る。溝２は溝１とほぼ同等の規模を持ち、北西から南東方向に検出されている。両者ともに土坑２や現代の撹乱に削平されて旧態を正確には留めていないが、そのプランから竪穴住居を方形に囲繞する溝としての機能を考えることができる。

(3)出土遺物

１～４は溝２出土須恵器である。４は有蓋高杯の脚部が欠落したものか、装飾に用いられたもので、口径がかなり小型である。１と３には「×」のヘラ記号が刻まれている。９～16は竪穴住居出土須恵器である。11は有蓋長脚二段透し高杯でカマドの支脚として使用されたもの。13は無文の大型鉢で、体部外面をカキメ、底部を手持ちヘラ削りによって調整している。形態的には器台の鉢部に酷似するが接合痕が全く無い。５は土坑２から、６は溝３から出土した須恵器であるが、相対的に竪穴住居出土須恵器の方が新相を示している。12はカマド付近から出土した椀、８は土坑３の埋土最上層から出土した高杯で、ともに他の須恵器と時期的には併行するものであろう。７は土坑３から出土した高杯である。

３．まとめ

今回の調査では、古墳後期（６世紀中葉～後葉）のカマドを伴う竪穴住居、集落に関係する溝やピット群を検出したことをはじめ、弥生中期（畿内第Ⅳ様式期）の遺構が周辺に存在する可能性を示唆する資料を得られた。特にカマドに関しては、既往の調査では遺存状態が良好な資料は少なく、その構造を比較的明確に知ることができた。近年の発掘調査の事例を挙げれば、大阪モノレール建設に関連した蛍池東遺跡の調査では、５世紀前半と６世紀後半の２時期の竪穴住居に付随して「つくりつけ」カマドが検出され、蛍池東遺跡第７次調査では６世紀末の竪穴住居から移動式のカマドが出土するなど、古墳時代のカマドに関する資料が蓄積されつつある。今回の調査事例を基本として、今後、古墳時代の「煮炊き」に関する変遷をより詳細にまた多角的に検討していきたい。

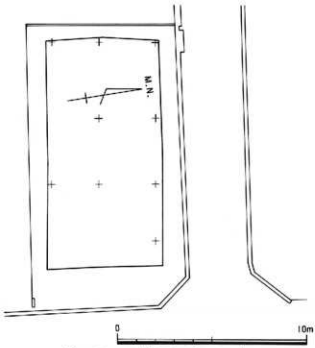
第Ⅷ章　本町遺跡第24次調査

1．調査の経緯

当該調査地点は本町２丁目51に所在し、本町遺跡の範囲内に含まれる。専用住宅建築に伴って試掘調査をおこなった結果、遺物包含層・遺構が検出されたため、工事に先立って調査をおこなうこととなった。調査期間は1996年７月15日～８月30日であり、調査面積は建築の範囲となる約72.0㎡を対象に調査をおこなった。

2．遺跡の概要

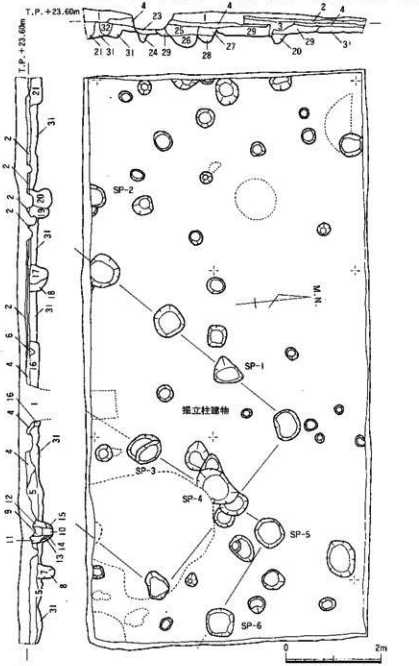
本町遺跡は、阪急豊中駅の北東にのびる支谷に沿って幅約500m、奥行900mの



第36図　調査範囲図（1：200）

第37図　調査地位置図（1：5000）

広がりを持つ集落遺跡である。遺跡は千里川の南に展開する通称豊中台地の北部に位置している。周辺一帯は現在、阪急豊中駅を中心とした商業地・住宅地が主体となっている。これまでの調査で、木町遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代まで各時代を通じて営みが看取される。中でも弥生時代後期、古墳時代後期の遺構はこの遺跡を特徴付けるものといえる。近隣の調査では、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が数多く検出されている。今回の調査では、古墳時代後期のものとみられる遺構を検出した。



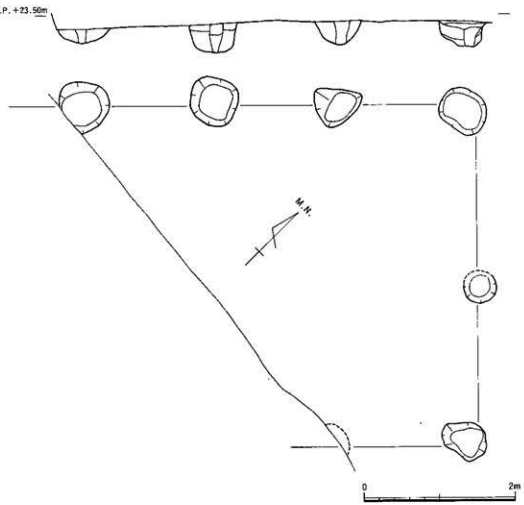
1．盛土および現耕土
2．淡黄色(2.5Y8/3)シルト～極細粒砂
3．にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂
4．にぶい黄橙色(10YR7/3)細～中粒砂
5．灰黄褐色(10YR5/3)極細～細粒砂
6．暗赤色(10YR4/1.5)極細～細粒砂
7．褐色(10YR4/4)極細～細粒砂
8．にぶい黄橙色(10YR5/4)細粒砂
9．灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
10．にぶい赤褐色(10YR4/3)極細粒砂
11．灰黄褐色(10YR4/2)極細～細粒砂
12．灰黄褐色(10YR4/2)極細～細粒砂
13．暗褐(10YR4/4)極細粒砂
14．灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
15．灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
16．黒褐色(10YR3/1)細～粗粒砂
17．暗灰色(7.5YR4/1)細粒砂(礫を含む)
18．にぶい赤褐色(10YR5/3)細粒砂
19．にぶい黄橙色(10YR4/3)中～粗粒砂
20．暗褐色(10YR3/4)極細～粗粒砂
21．褐色(7.5YR4/3)極～中粒砂
22．にぶい黄橙色(10YR4/3)極～中粒砂
23．褐色(10YR4/4)細粒砂(礫を多量に含む)
24．暗色(10YR3/3)極～粗粒砂
25．にぶい黄橙色(10YR4/3)極～粗粒砂
26．褐色(10YR4/4)極～中粒砂
27．暗褐色(10YR3/4)極～中粒砂
28．にぶい黄褐色(10YR4/3)極細～細粒砂
29．褐色(10YR4/4)極～粗粒砂
30．にぶい黄褐色(10YR4/3)極～中粒砂
31．にぶい黄橙色(10YR5/4)極～中粒砂(礫を含む)

第38図　調査区平面・断面図（1：80）

3．調査の概要

(1)基本層序

当該調査地内の堆積土はにぶい黄橙色系の細粒砂～粗粒砂が基本となり、古墳時代の包含層がにぶい黄褐色系の極細粒砂～細粒砂で構成される。遺構面のベースとなる堆積土は明黄褐色系のシルトをベースとして、砂礫を多く含んでおり、洪積層の上部が露出したものとみられる。なお、調査区の西半部では均質な明黄褐色系のシルトがベースとなっている。こうした洪積層の上部は、付近で弥生～古墳時代の生活面として認識されている。



第39図　掘立柱建物平面　・断面図（1：50）

また、地積土のうち包含層の直上にあたる第6層において焼夷弾のおもりを検出し、この層より上部でガラス片などを検出している。このことから、堆積土上部の多くが戦後になされた整地に伴うものと考えられる。

(2)検出した遺構

今回の調査では、現代以降の削平を受けていたにもかかわらず、ピット50あまりという多くの遺構を検出した。包含層および遺構の大半は6世紀の中葉前後に属するものとみられる。以下にその概要を記す。

掘立柱建物　調査区外にのびるため必ずしも明確とはいえないが、桁行3間（約5.2m）以上、梁間2間（約4.0m）の規模が想定される。柱間は桁行約1.6m、梁間約2.0mを測る。柱穴は、直径50～70cm、深さ20～40cm。建物の方位はN－44°30′－Eである。

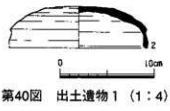
ピット　調査区内には多くのピットがみられ、これらの中には確実に柱痕を伴うものもみられた。また、SP－3・4・5・6は形状・深さともに酷似しており、L字状の並びを呈することなどから建物の一画であった可能性がある。また、調査区西南にあるSP－2では須恵器盤杯を上向きの

状態で検出している。出土遺物からSP－２は少なくとも６世紀中葉を前後する年代を与えうる。

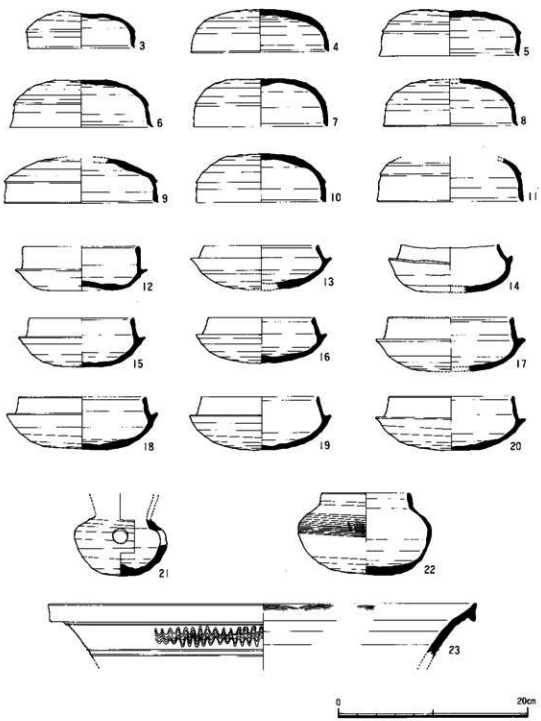
(3)出土遺物

須恵器（第40図、第41図）１・２は遺構出土の遺物である。１はSP－１から出土した杯蓋である。天井部の約３分の１に回転ヘラケズリを施し、口縁端部内面には浅い凹線が認められる。復元口縁径約13.6cm、器高4.2cmを測る。２はSP－２から出土した杯蓋で、やや肉厚の天井部に丸味をもった口縁端部を伴う。復元口縁径約14.8cm、器高約4.4cm。

３～23は包含層掘削中に出土したものである。３～20は蓋杯であり、口縁部径10.4～16.4cm程度、器高４～5.8cmを測る。３～11は杯蓋で、天井部分の約２分の１に回転ヘラケズリが施されている。３の口縁端部内面には浅い凹線が認められる。口縁部径は約11.4cmで、器高約４cmを測る。４の体部は全体に丸味を帯び、やや厚みのある口縁端部を有する。口縁部径は復元で14.7cm前後、器高約4.6cm。５は口縁端部が若干外傾気味につまみだされ、仕上りが比較的のシャープな印象を受ける。口縁径は約14.8cm、器高約4.8cm。６も同様に口縁端部がつまみだされ、「ハ」の字状に外方にのびる。全体に器壁が薄く仕上げられている。復元口縁径は約15.2cm、器高約5.2cmを測る。７の口縁端部はやや直立気味に丸味をもっておさめられ、内面には浅い凹線を伴う。復元口縁径は約14.2cm、器高約4.8cm。８の口縁端部は外方に軽くつまみだされている。復元口縁径は約14cm。９の口縁部断面形はやや角張っており、端部をゆるくつまみだす。復元口縁径は約16.4cm。10の口縁端部はほとんどつまみだされず、やや角をもっておさめられている。復元口縁径約13.8cm、器高約5.2cmを測る。11も同様に、ほとんどつまみだされない口縁端部を有する。復元口縁径約15.4cm。12～20は杯身で、体部下半の約３分の１～３分の２にかけて回転ヘラケズリが施されている。12はたちあがり高2.4cmで、端部には浅い凹線を伴う。復元口縁径約12.4cm、器高約4.8cm。13のたちあがり高は約1.6cmで、やや内傾気味である。復元口縁径は約12.2cm。14は体部下半の約３分の１にヘラケズリを施す。全体に焼け歪みが著しい。15はたちあがり高約2.2cmで受け部は若干上方につままれる。体部下半約３分の２にヘラケズリを施す。口縁径は復元すると約11.2cmを測る。16のたちあがりは若干内傾し、受部は水平にのびる。体部下半約３分の２にヘラケズリを施し、受部から体部上半にかけて強いナデを施す。復元口縁径約11.4cm、器高約4.8cmを測る。17のたちあがり高は2.6cmで、口縁端部内面には明瞭な凹線が残る。口縁径は復元で約15.4cm。18は体部下半の約２分の１にヘラケズリを施し、受部から体部上半にかけて強くひきあげられている。口縁部径は約13.6cm、器高は約5.6cmを測る。19はやや薄手のたちあがりを有し、口縁端部内面には浅い凹線がみられる。体部下半の２分の１程度にヘラケズリが施される。口縁径約12.6cm、器高約5.6cmを測る。20は体部下半の約２分の１にヘラケズリを施し、受部から体部上半にかけて強いナデを施す。21は 甕 で胴部最大径は約10cmを測る。肩部には強いナデの痕跡が残る。22は有蓋の短頸壺で、体部上半から肩部にかけてカキメ調整が見られる。カキメ調整



第40図　出土遺物１（１：４）



第41図　出土遺物２（１：４）

の後に、クシ状の工具で軽くナデ上げている。口縁部径約9.2cm、器高約8.6cm、胴部最大径14.4cmを測る。23は大型甕の口縁部で、外面にはクシによる波状文が１条みられる。波状文の直下には凹線が２条施されている。また、口縁端部内面には同心円状の当て具痕が存在し、調整後に若干ナデ消されている。口縁部径は復元で約45.2cmを測る。

4．まとめ

以上、概述してきた通り、今回の調査地点においても周辺におけるこれまでの調査と同様に貴重な資料を得ることができた。

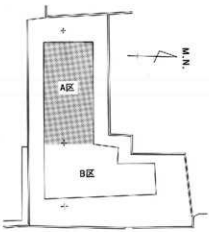
まず、掘立柱建物を中心とした集落の展開についてであるが、当該調査でも確認されたように周辺には多数のピットが検出され、掘立柱建物中心とする集落が存在することがあきらかとなった。遺構の時期は包含層・遺構出土の遺物などから古墳時代後期を中心とするものであった。また、須恵器生産に関連するものとして、焼け歪みのある須恵器を幾つか検出した。これは以前から指摘されている桜井谷窯跡群との関連を示すものといえる。千里川水系を利用した搬出経路の拠点として、周辺一帯は強く意識されていたものと考えられる。

さて、当該調査区周辺の調査では、今回検出した古墳時代後期以降の遺構・遺物が検出されている。今回の調査では古墳時代後期の包含層がみられたものの、それ以降の遺構・遺物は検出できなかった。これは近現代以降の盛土・撹乱が包含層にまで及んでいたためであり、今後資料の増加を待って周辺の時代の流れを復元する必要があろう。

第Ⅸ章　本町遺跡第25次調査

1．調査の経緯

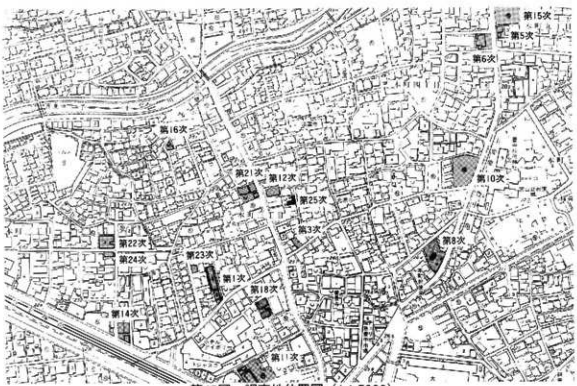
先の震災で被害を受けた専用住宅付工場を再建するにあたり試掘が行なわれ、当地に遺構が存在することが確認され、発掘調査が行なわれることとなった。敷地面積が小さいため調査区を東西に分け、西半分を先に調査し、その後西半分を排土置き場にして、東半分を調査した。1996年7月15日から調査を開始し、同年8月30日にすべての調査を完了した。



第42図　調査範囲図（1：300）

2．既往の調査

本町遺跡では本調査で25回目を迎え、これまでに弥生時代後期と古墳時代後期の集落が広がっていることが確認されている。本遺跡の南側に隣接する新免遺跡と共に、不良品を含む大量の須恵器を出土する遺構が検出される事があり、豊中市北部に広がる桜井谷窯跡群との有機的関係が指摘されている。当調査地点周辺に限れば、当調査地点のすぐ西側の第12次・21次調査が行なわ



第43図　調査地位置図（1：5000）

れており、第12次調査では7世紀初頭の掘立柱建物が、第12次調査では6世紀末頃の竪穴住居や奈良時代の大型掘立柱建物が見つかっており、当地点でも古墳時代あるいは奈良時代の住居・建物跡が検出されることが予想された。

3．調査の概要

（1）基本層序

現地表からマイナス20～30cmの深さまで現代の盛り土が堆積し、盛り土直下には須恵器・土師器を多く含む包含層（黒褐色シルト）が15～20mの厚さで存在する。その下層からは明黄褐色シルト～粘土で構成されている洪積層が認められた。遺構の大部分は包含層の上面から掘削されている。遺構の埋土は包含層の土質と極めて類似しており、平面では見分けがつきにくい状況であった。

（2）検出した遺構

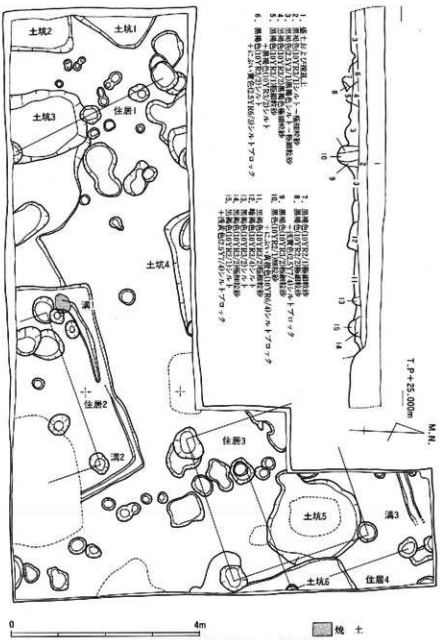
今回の調査では、竪穴住居・掘立柱建物・土坑5基にピットが50基余り検出された。明確に竪穴住居と確認できる遺構は1つだけであるが、後に述べるように少なくとも他に2棟以上の竪穴住居があったと考えられる。数多く検出されたピットのうち大部分は、深さ10cm未満の浅い遺構であり、これらは樹木の根の侵食によるものである可能性が高い。実際、浅いピットで柱穴を構成する住居は皆無で、掘立柱建物や竪穴住居を構成するすべての柱穴は深さ20cm以上を計る。以下に、主な遺構について記述する。

住居1　掘立柱建物の一辺2間分を検出した。この柱の軸は、以下に述べる竪穴住居と方位を同じくしている。このことから竪穴住居と関連する建物であることが推測される。

住居2　調査区の南部から検出された竪穴住居である。方形を呈するが、形はややイビツである住居の建て替えに伴って、2棟の切り合いがあったのかもしれない。溝1と溝2はこの住居にともなう壁溝と考えられる。住居の北西コーナーからは焼土面が検出されている。この付近から甑の破片が出土していることを考えると、この場所にカマドが敷設されていた可能性が高い。貼り床をベース面まで掘り下げたところ、1点の臼玉の出土を見た。

住居3　調査区の北部から、L字に並ぶ3つのピットを検出した。ピット間の距離は3m10～20cmを計り、これは掘立柱建物の1間の柱間としては長すぎる。また、住居1の柱間とよく似ているので、おそらく竪穴住居であると考える。さらに、この住居の北側に東西に走る溝3は、ピット列と平行しており、この住居に伴う壁溝の可能性がある。この想定が正しいとするとこの住居3は1辺約5.2mの方形の竪穴住居ということになる。

住居4　やや北側にずれて住居3と重なって存在する柱穴の並びがある。これもおそらくは、竪穴住居の柱穴であると推測する。住居3の建て替えられたものか、あるいはその逆であろう。なお、この住居の範囲内の包含層中から完形の短頸壺の蓋が出土している。おそらくこの住居にともなう遺物であろう。（第45図－4）



第44図　調査区平面　・断面図

このほかにも土坑１や土坑４はコーナーが直角を呈しており、これらが竪穴住居である可能性がないわけではない。ただ、壁溝と柱穴を検出することができなかったため、その可能性を指摘するにとどめておく。

土坑３　調査区の西側から検出された。長方形を呈する深さ20cm余の土坑である。埋土中からは須恵器・土師器片が少量出土した。

土坑５　住居３の真ん中に位置する直径約２ｍの円形の土坑である。中央を試掘坑により破壊を受けているため底までの深さは不明であるが、中央に向かって緩やかな傾斜で下っていくようである。土坑の東の肩よりやや西に下がった場所より鉄器片が出土している。おそらく鎌片

と思われる遺物である。

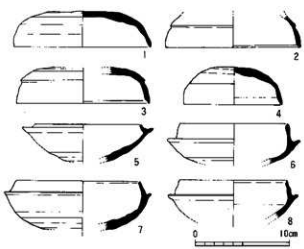
（3）出土遺物

出土遺物のほとんどは須恵器を中心とした土器類である。土器は整理箱にして2箱出土している。土器以外には、土坑5から出土した鉄器片と住居2の床面上から出土した滑石製の臼玉が1点あるのみである。包含層・遺構の順で遺物の記述を進める。

包含層出土遺物　遺構は包含層の上面から掘り込んでいるものが多く、包含層出土とした遺物の中にも、本来いずれかの遺構に属していた可能性をもつものもの含まれている。包含層からは須恵器と土師器が少なからず出土しているが、土師器については小さな破片が大部分を占めているため、図示しえるものがなかった。第45図－1～3は杯蓋である。口縁部径14.2～14.6cmを計る。口縁部に段を持たず丸くおさまるもの（1）と段を有するもの（2・3）とがある。後者は天井部と口縁部の間に稜線を持つが、前者は顕著な稜を有しない。1は、外面にきわめて粗いヘラケズリを施し、胎土も砂粒を多く含み、粗雑な感じのする土器である。1の内面にはスタンプ文が認められる。2と3は、1にくらべてケズリもナデに丁寧で砂粒も少なく緻密な胎土から作られている。

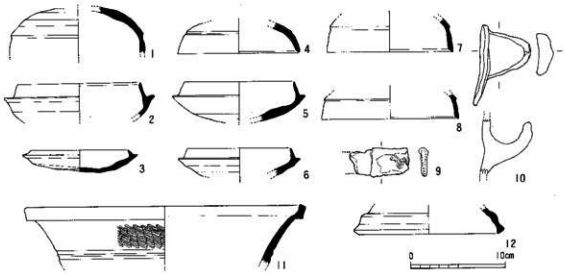
第45図－4は短頸壺の蓋と考えられる個体である。直径10.4cm・器高4cmを計る。外面は、ヘラケズリが天井部の約1/2までおよび、内面は丁寧に回転のナデ調整が施されている。

第45図－5～8は杯身である。5は口縁部径11.2cm・器高4.0cm以上で、立ち上がりが小さい個体である。外面は底部の1/3までを回転ヘラケズリが施され、残りの外面と内面はナデがなされている。6と8は共に口縁部径11.4cmを計り、器高は4.4cm以上の個体で、立ち上がりは1.6cmである。6の外面はヘラケズリが底部の1/3まで及ぶ。8は遺存している部分でヘラケズリは認められない。7は復元口縁部径13cm・器高5cm以上を計る。立ち上がりは1.2cmである。外面調整は底部の1/4～1/3まで回転ヘラケズリが及び、残りはナデが施されている。杯身の胎土は、総じて砂粒が少ないものが多い。ただ、8だけは砂粒をやや多く含み、粗雑な胎土である。



第45図　包含層出土遺物実測図

遺構出土遺物　住居2からは第46図－4～6・10が出土している。4は住居2の柱穴から出土した。杯蓋で口縁部径13.0cmを計り、天井部と口縁を境界を鈍い稜で分ける。内外面ともに丁寧なナデが施されている。砂粒をわずかに含む。5・6は杯身で、住居の埋土中からの出土である。5は口縁部径11.8cmを計る。立ち上がり高は1.4cmで、端部は段をもたず外反して鋭く終わる。外面は、底部の1/3までヘラケズリが及ぶ。砂粒を多く含み、粗雑な感じのする胎土で



第46図　遺構出土遺物実測図

ある。6は口縁部径11.0cm、立ち上がり高1.0cmを計る。外面は、破片の一部に粗いヘラケズリがみられるほか、強いナデが施され、外面の器壁の凹凸が著しい。胎土に含まれる砂粒は少ない。10は甑の把手の破片である。住居2の焼土周辺から出土しており、この住居のカマドで用いられたと考えられる。これらの土器から住居2は6世紀中葉から後葉に位置づけられよう。

土坑2からは第46図－3の杯身が出土した。口縁部径10.2cm・立ち上がり高0.7cm・器高2.3cmを計る。外面調整は、底面のごく一部にヘラケズリが行なわれるだけで、その他は粗いナデが施される。胎土は砂粒を多く含み粗雑な感じがする。底面に「－」のヘラ記号が認められる。

第46図－8・9・11は土坑5から出土した。8は口縁部径13.0cmの蓋で口縁と天井部の境界に稜をもち、口縁端部に段を有する。9は鋪による変形が著しいため利器の種類の判別が難しいが、破断面を観察したところ刃を有していることが判明し、鉄片の右端に鉄片の長軸に対し斜めに木目が入る木質が観察されたことから、鉄鎌の破片と考えられる。11は甕の口縁部である。口縁部径29cmを計る。頸に2本の沈線をめぐらし、口縁と沈線の間に波状文を施す。土坑5は住居3の中央に位置しており、土坑5は住居3に伴う遺構であって、これら土坑5の遺物も住居3に伴う可能性がある。このような想定が正しいとするならば、住居3は6世紀中葉に位置づけられる。

そのほか第46図－1・2・7・12は単独の浅いピットから出土した須恵器である。1はSP52、2はSP29、7はSP21、12はSP5から出土した。1は口縁端部を欠く杯蓋の破片である。外面は、天井部の1/2までヘラケズリが及び、その他は丁寧なナデが施される。2は杯身で口縁部径13.3cm、立ち上がり高1.6cmを計る。内外面共に丁寧なナデが施されている。7は口縁部径13.4cmを計る。天井部と口縁の境界には稜を有し、口縁端部には段を持つ。内外面とも丁寧なナデによって調整されている。12は器台の脚であろう。底部径14.4cmで内外面ともに丁寧なナデが施される。

4．まとめ

今回の調査において、竪穴住居３棟と掘立柱建物の１辺を検出した。出土遺物から竪穴住居は古墳時代後期に属することが判明した。掘立柱建物は、その柱穴からは遺物が出土しなかったため、正確な時期を決定することはできなかった。しかし、奈良時代以降の遺物が全く出土しなかったことと、隣接する第12次調査で７世紀初頭の掘立柱建物が検出されていることから、竪穴住居と同時期か、下っても飛鳥時代に属するものと考えられる。

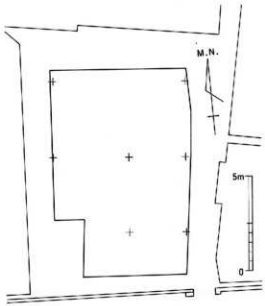
出土遺物は須恵器が中心で、桜井谷窯跡群の須恵器搬出拠点とされる集落の性格の一端を垣間見せている。土坑５から出土した鉄鎌片は、この集落の住人が須恵器生産・流通だけに関っていたのではなく、農耕にも従事していたことを示すものである。本町遺跡という集落の生業を考察するのに重要な資料となるであろう。

なお、遺構は調査区の外に広がっていることから、周辺の開発には十分な注意が必要と思われる。

第Ｘ章　岡町南遺跡第１次調査

１．調査の経緯

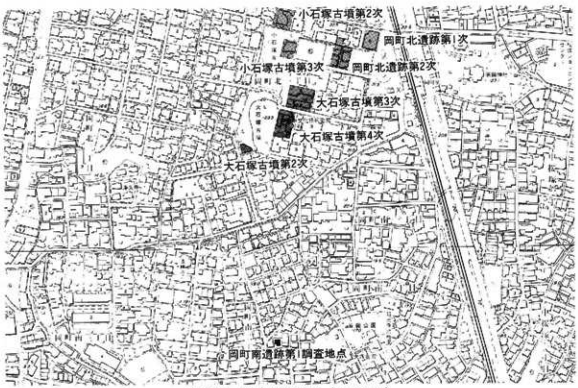
当該調査地点は、岡町南２丁目５－12に位置している。平成７年４月11日に提出された建築確認申請にもとづいて試掘調査をおこなった。その結果、現地表より0.2mの段丘層上面において顕著な遺構の存在を確認した。その後の協議で建築構造の変更予定はなく、工事において損傷・損壊をうける約65.5㎡を対象として発掘調査を実施することとなった。調査期間は1996年６月３日～６月28日である。



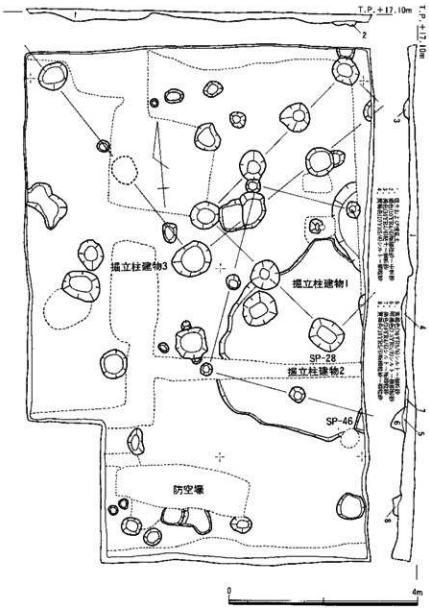
第47図　調査範囲図（1：200）

２．遺跡の概要

岡町南遺跡は千里丘陵の東端、通称豊中台地の南端付近にあり、浅い支谷により西側と南側を画された状丘陵の頂部に位置している。調査地の周辺は戦前から存在する住宅地が中心である。周辺には



第48図　調査地位置図（1：5000）



第49図　調査区平面　・断面図（1：80）

かつて40基余り存在したとされる桜塚古墳群があり、4世紀後葉から末葉の造営とされる大石塚・小石塚もこの遺跡の北側にある。また、これまでに弥生時代後期から古代までの遺構が検出された岡町北遺跡も、この遺跡の北に隣接している。岡町南遺跡はこれらの遺跡と同一の尾根上に位置しており、これまでに弥生時代後期の遺構が検出されている。岡町南遺跡の西側にある丘陵上には、山ノ上遺跡が存在する。山ノ上遺跡の南部でも、古墳時代後期の遺構および遺物が存在することが既往の調査によってわかっている。

3．調査の概要

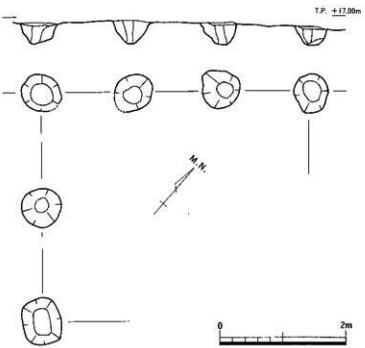
（1）基本層序

遺構は調査区のほぼ全体にわたって削平を受けていた。特に調査区の南側では後世の宅地造成などに伴って遺構の多くが損壊していた。したがって、当該調査区において基本層序といいうるものは存在しない。調査区周辺の現地標高は、T.P.+17.5mでありマイナス約20cmで遺構面に達する。表土層の上色・土質は、黄褐色砂質土～褐色砂質土を中心とするもので、これは現代までの宅地

造成に伴う盛土と考えられる。

（２）検出した遺構

当該調査区は65.5㎡という狭い面積であったにもかかわらず、柱穴を含むピット40以上、土坑２基などの多くの遺構を検出した。また戦前に掘られた防空壕と考えられる遺構も検出している。ピットは主に調査区北部を中心に存在しており、これに伴って掘立柱建物３棟余りを検出している。掘立柱建物は各々の軸方向がバラバラで、各建物の柱穴に切り合い関係をもつものがみられる。このことから、三つの掘立柱建物はともに併存せず、別々の時期に存在したと考えられる。しかしながら、後世の削平のために遺物相互の前後関係を判別することはできなかった。



第50図　掘立柱建物　平面　・断面図（１：60）

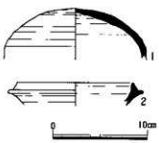
掘立柱建物１　調査区外にのびるために必ずしも正確ではないが、桁行３間（約4.2m）、梁間２間（約3.6m）の規模が想定される建物である。ピットの掘形は直径60～80cm、深さは現状で約30～35cmを測る。柱穴の形態、深度ともによく似ている。柱間は桁行1.4m、梁間1.8mを測る。この建物の軸方位はＮ－48°－Ｅである。この建物に伴うSP－28から６世紀後半に位置するとみられる須恵器を検出している。

掘立柱建物２　調査区外にのびるため正確ではないが桁行２間（約４m）、梁間１間以上の規模をもつと考えられる。柱穴の掘形は直径30cm前後を測り、深さは概ね20～30cm、柱間は桁行、梁間ともに2.0m前後である。建物の軸方位はＮ－71°－Ｗである。

掘立柱建物３　調査区外にのびるため必ずしも正確ではないが、桁行３間（約５m）、梁間２間（約５m）以上の規模をもつ建物であると想定できる。柱穴の掘形は直径約60～80cm、深さは現状で約20cmあるものが多い。柱間は桁行2.4m、梁間は約1.7mであり、掘立柱建物１と比べて間隔は不揃いである。建物の軸方位は、Ｎ－30°－Ｗである。

ピット　ピットは大小合わせて40以上存在し、直径10cm前後～約1.0m、深さ数cm程度から50cmを超えるものまである。調査区南側では、ピットの多くは削平を受けていた。後世の削平が調査区南側で顕著なことを考えると、周辺一帯には検出した数よりも多くのピットおよび掘立柱建物が存在したことが考えられる。調査区東側にあるSP－46から６世紀後半とみられる須恵器を検出している。

防空壕　調査区の南側にある、戦前のものとみられる長方形の土坑。長軸約2.8m、短軸約95cmで深さ約1.2mを測る。東側と西側の地山を階段状に掘り残し、底面は水平に削っている。側壁には板を張り付けていたらしく、底面に木片やその痕跡が残存していた。また、底には植木鉢と考えられる焼締め陶器が埋めこまれており、おそらくこの遺構が存在した時に機能した可能性が高い。土地所有者の話では、戦前この位置に防空壕が存在したということであり、この遺構がこれに相当すると考えて間違いないだろう。



第51図　出土遺物（1：4）

（3）出土遺物

今回の調査においては、土師器および須恵器などを検出している。いずれも細片であったため、図示できたのは以下の2点である。1はSP－46から出土した須恵器杯蓋で、体部上半を中心とする部分である。天井部の約2分の1にヘラケズリを施す。2はSP－28から出土した須恵器杯身で、たちあがりを中心とする部分である。やや内傾するたちあがりを持ち、受部とのさかいには浅い凹線がみられる。たちあがり高は約1.2cmで、復元口縁径約12.2cmを測る。

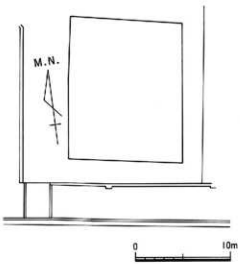
4．まとめ

今回の調査は、65.5㎡という面積の狭さにもかかわらず、3棟の掘立柱建物を含むピット40、土坑2基、防空壕1など多くの遺構を検出している。また、これまで確認されていた弥生時代の遺構はみられず、古墳時代後期を中心とする遺構がみられた。岡町南遺跡の周辺には、古墳時代前期の大石塚・小石塚古墳や存続期間が弥生時代～古代とされる岡町北遺跡がある。今回の調査で検出した遺構はこれらの古墳が造営されたあとのものといえる。このことは大石塚・小石塚古墳の造営以降に、この周辺で人々が生活していたことを証明するものといえよう。今回の調査では調査区近隣に遺構が広がる可能性が認められた。調査区一帯は丘陵と谷部の境目にあたると考えられ、明治時代の古地図や付近の試掘成果から、浅い支谷の存在が確認されている。すなわち、岡町南遺跡のある丘陵では端部付近まで土地利用を行ったところがあったと考えられ、今後周辺を調査する際には、こうした点に留意する必要があるといえるだろう。

第XI章　穂積遺跡第17次調査

1．調査の経緯

当該調査地点は、服部西町２丁目に所在する。1995年12月14日に提出された埋蔵文化財発掘の届出にもとづいて試掘調査をおこなった。その結果、現地表よりマイナス2.2mの沖積層上位面において顕著な遺構の存在を確認した。その後の協議で、建物構造を変更する予定はなく、基礎工事で損傷あるいは損壊を受ける約130㎡を対象として発掘調査を実 施することとなった。調査期間は1996年２月28日～３月29日である。

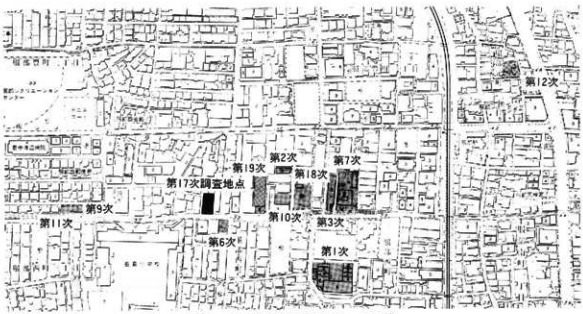


第52図　調査範囲図（1：400）

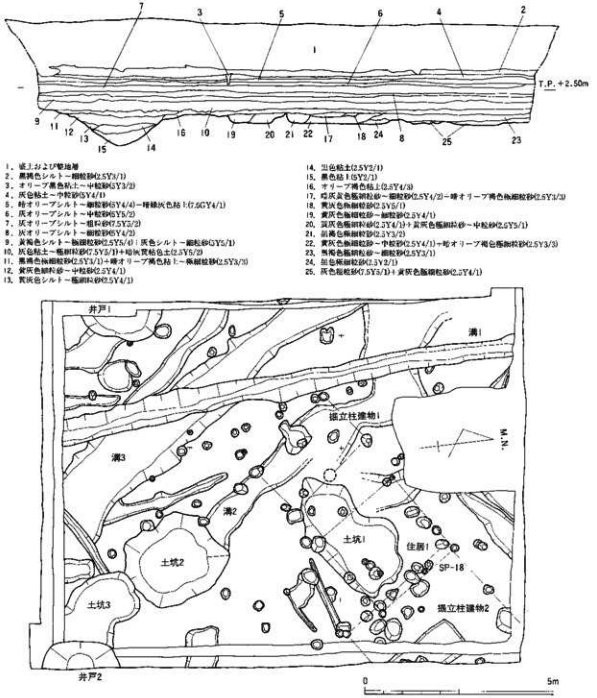
2．遺跡の概要

調査地点周辺は、阪急電車の開通によって拓かれた住宅地・商業地である。地理的には猪名川の下流域に広がる沖積層上に位置している。現地表の標高は約4.2m前後であり、周辺の試掘および発掘調査の状況などから、かつては猪名川の下流域氾濫原として、洪水などの災害を度々受けていたものと考えられている。

穂積遺跡は阪急電車宝塚線、服部駅の西側を中心に、東西約１㎞、南北約700mにわたって広がる集落遺跡である。かつて「穂積式」と呼ばれ、畿内第Ⅴ様式の指標にもなった弥生時代後期に



第53図　調査地位置図（1：5000）



1．盛土および整地層
2．黒褐色シルト～細粒砂(2.5Y3/1)
3．オリーブ黒色粘土～中粒砂(5Y3/2)
4．灰色粘土～中粒砂(5Y4/1)
5．暗オリーブシルト～細粒砂(5Y4/4)～暗緑灰色粘土(7.5GY4/1)
6．灰オリーブシルト～中粒砂(5Y5/2)
7．灰オリーブシルト～粗粒砂(7.5Y5/2/2)
8．灰オリーブシルト～細粒砂(5Y4/2)
9．黄褐色シルト～極細粒砂(2.5Y5/4)＋灰色シルト～細粒砂(5Y5/1)
10．灰色粘土～極細粒砂(7.5Y5/1)＋暗灰黄粘色土(2.5Y5/2)
11．黒褐色極細粒砂(2.5Y3/1)＋暗オリーブ褐色粘土～極細粒砂(2.5Y3/3)
12．灰黄色細粒砂～中粒砂(2.5Y4/1)
13．黄灰色シルト～極細粒砂(2.5Y4/1)
14．当色粘土(2.5Y2/1)
15．黒色粘土(5Y2/1)
16．オリーブ褐色粘土(2.5Y4/3)
17．暗灰黄色極細粒砂～細粒砂(2.5Y4/2)～暗オリーブ褐色極細粒砂(2.5Y3/3)
18．黄灰色極細粒砂(2.5Y5/1)
19．褐灰色極細粒砂～細粒砂(2.5Y4/1)
20．黄灰色極細粒砂(2.5Y4/1)＋黄灰色極細粒砂～中粒砂(2.5Y5/1)
21．黒褐色極細粒砂(2.5Y3/2)
22．褐灰色極細粒砂～中粒砂(2.5Y4/1)＋暗オリーブ褐色極細粒砂(2.5Y3/3)
23．黒褐色極細粒砂～細粒砂(2.5Y3/1)
24．当色極細粒砂(2.5Y2/1)
25．灰色粗粒砂(7.5Y5/1)＋黄灰色極細粒砂(2.5Y4/1)

第54図　調査区平面　・断面図（1：100）

おける…群の上器は、この遺跡の資料からつけられている。また、これまでの調査成果によって、遺跡の範囲は阪急線の東側にも広がりを持つことがあきらかとなっている。同時にその時期については、縄紋時代～江戸時代にまたがる複合遺跡とされている。

また、1992年度に行われた第14次調査では、縄紋時代における大阪湾の海進・海退の状況を知

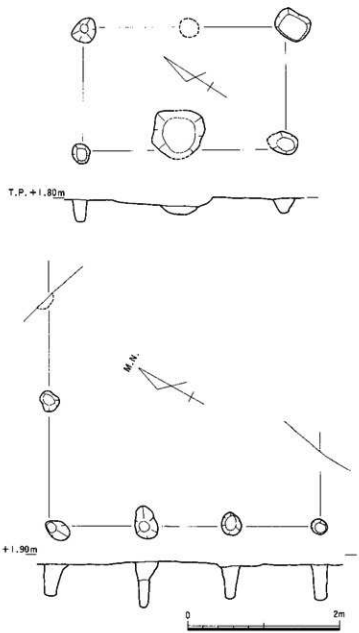
る上においての貴重な資料が得られている。遺跡の学術的重要性、および市民の関心からいっても、耳目を集める遺跡といえるだろう。

1996年度に行なわれた第18次調査では、3連の銅鐸未成品が検出されている。1個所から出土した量としては、国内でも最も多いものである。このことから穂積遺跡が、こうした製品を生産する場であったか、集積の場であった可能性が考えられている。

3．調査の概要

（1）基本層序

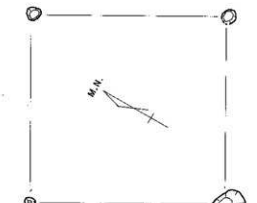
当該調査区における堆積土は、現地表標高T.P.+4.2m前後を測り、ここからマイナス約1.2mで旧耕土に達する。旧耕土から包含層までは約8層あり、いずれも水平に堆積する。これらは中世以降の耕土あるいは洪水層と考えられ、灰オリーブ色～灰色シルト質粘土を中心に構成される。包含層は黒褐色極細粒砂をベースとして暗オリーブ褐色粘土～細粒砂をやや含む。遺構面は黄褐色～青灰色シルトを中心に中粒砂、粗粒砂を多く含み、遺構面のベースとなる堆積土は暗オリーブ褐色粗粒砂を中心にシルトを若干含んでいる。



第55図　掘立柱建物1・2平面　・断面図（1：50）

（2）検出した遺構

今回の調査ではピットが80あまり、土坑3基、溝9条、井戸2基など多くの遺構を検出している。これらの検出遺構数の中には人為的に構築された遺構ではないものも若干含まれている可能性がある。ピットは調査区北東部を中心として大小80あまりが存在している。土坑は3基検出した。これらの土坑には調査区中央付近にある土坑1と、南端部付近に存在する土坑2・3がある。



第56図　住居1平面・断面図（1：50）

このうち土坑2からは石鏃を検出している。井戸は調査区の南端部で2基検出している。これらは西壁に接する井戸1と東壁に接する井戸2が存在する。溝は大小さまざまであるが、ほぼ南北にのびる溝1と北西から南東にのびる溝2・3を中心に構成される。これらの溝は掘立柱建物と軸をあわせているものもみられ、意図的な構築をおこなっている様子も見受けられる。

掘立柱建物1　調査区内で検出した範囲を正確な規模と想定できるならば、桁行2間（約2.7m）、梁間1間（約1.6m）を計測する。柱間は桁行および1.4mを計測する。柱穴の規模は直径約30～40cm程度、深さ12～30cmを測る。建物の方位はN－33°－Wである。

掘立柱建物2　調査区外にのびるため正確ではないが、北西から南東に3間（約3.6m）、南西から北東に2間以上（約3.1m以上）の規模が想定される。柱間は桁行約1.2m、梁間1.35～1.7mを測る。柱穴規模は直径20～30cm、深度45～65cmを計測する。建物方位はN－29°－Wである。

住居1　住居1は、掘立柱建物2に隣接しており、一辺約2.5mの建物と考えられる。柱穴の規模は直径10～45cmとややばらつきがあり、深度20～25cmを測る。建物の方位は掘立柱建物2とほぼ同じN－29°－Wである。掘立柱建物2との重複関係はこちらの方が新しい。

ピット　ピットは大小80あまり存在しているが、これらは大きく2つの群に分類することができる。一つは掘形が深く、その径も比較的小さい一群である。別の一群は浅いが全体に大きめの掘形を掘るものである。これらは時期差か、あるいは建物の性格による差異であるか明確にできなかった。

土坑1　調査区の中央付近に存在する楕円形の土坑である。長軸約3.0m、幅1.5m、深さ30cmを計る。この土坑からは、高杯、甕などの弥生土器が廃棄された状態で検出されている。

土坑2　土坑2は、調査区のやや南東寄りに位置するもので、平面形態は若干角張った円形を呈する。直径約2.5m前後、深さ40cmを計る。この土坑には多数の土器が廃棄され、このうち上部から比較的まとまった量の遺物を得た。この土坑の北側で、サヌカイト素材の石鏃を検出している。

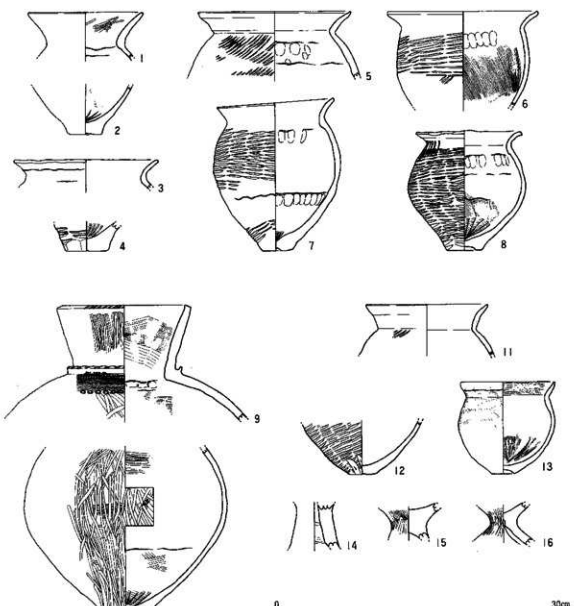
土坑3　この土坑は土坑2に隣接し、重複関係ではこちらのほうが新しいと考えられている。調査区の南端部に位置している。土器は高杯、壺などが検出されたが、出土量は比較的少ない。

溝1　調査区の北から南にむけて、ほぼ直線的にのびている溝である。幅約0.3m前後を計り、中軸はN－2°－Eである。重複関係から考えても、この遺構が最も新しいものと考えられる。断面形態はほぼ逆台形を呈する。この溝は何度も掘削されたらしく、一部壊状となっているところ

も存在する。掘削がどの程度おこなわれたかは、明確にできなかった。

溝2・3　溝2・3は北西から南東方向にのびるもので深さは比較的浅く、断面形態も明確にしがたい。遺構検出時点ではないが溝2の上層にあたる部分に土器がまとまって投棄されていた。包含層の遺物出土状況などから考えると、これらの土器は溝2の埋土上層に位置する可能性が高い。このことから、これらの土器群を溝2に伴う遺物として扱っている。溝3は3本の溝があわさるもので幅約0.8m、中軸の方位はN—26°—Wである。

井戸1　調査区の西端部、南よりに位置する遺構で、直径は2.0m前後を測り、深度は約90cmである。平面形態は楕円形であり、底部は丸い。埋土は5層に分けられ、遺物は遺構上部からまとま



第57図　出土遺物1（1：4）

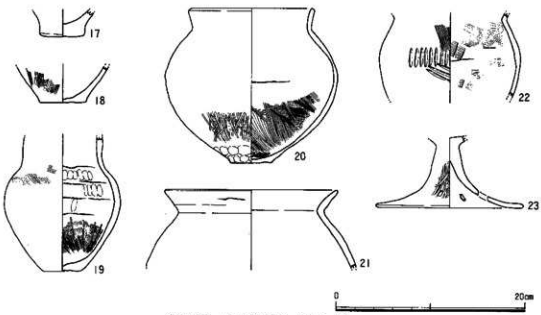
って出土している。

井戸2　この井戸は土坑3に隣接するもので、調査区の南端部、東壁に接する形で存在する。直径2.0m前後、深度1.35mを計る。断面形態は角丸の逆台形であり、埋土は11層に分かれる。遺物はその多くが遺構上位面からまとまって出土している。

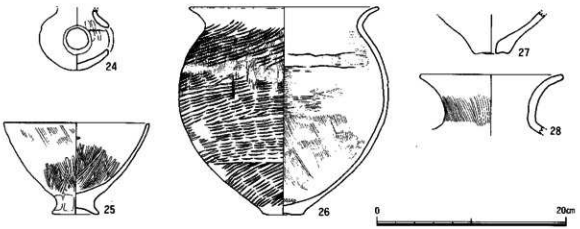
（3）出土遺物

1～8は井戸1から出土したものである。1は壺の口縁部であり、口縁部内面にミガキを施す。復元口縁部径約12cmを測る。2は壺の底部と考えられるもので、底部径は約3.6cmを測る。3は甕の口縁部で、成形時の接合痕が明瞭に残る。口縁部径は復元で約15.2cm。4は甕の底部で、内面には炭化物の付着が著しい。底部径約4cmを測る。5は甕の口縁部から体部上半にかけての部分で、内面には接合痕およびこれに伴う指頭圧痕が明瞭に残る。口縁部径は復元で約16cmである。6は甕の体部を中心とした部分である。体部内面にやや緻密な縦方向のハケ調整を施す。復元口縁部径は約15.9cmを測る。7は甕で、内外面ともに接合痕が強く残る。口縁部径12.4cm、底部径約3.7cmを測り、器高は約16cmである。8はやや小型の甕で、外面には密なタタキを施し、内面底部にもハケを施す。胎土は暗褐色を呈し、いわゆる生駒西麓の土器と考えられる。口縁部は指圧によって変形している部分もみられ、頸部から体部上半にかけては、タタキを施したのちにヘラ状の工具でなでつけている。口縁部径約10.9cm、底部径約3.7cmを測り、器高12.5cmである。

9～16は井戸2から出土した土器である。9は壺の口縁部から肩部までの部分である。口縁部外面を緻密なミガキ調整で覆い、内面はハケが施される。頸部には突帯を設け、頸部から体部上半にかけて竹管文、櫛状工具による波状文などを施す。口縁部径は復元で約13cmを測る。10は甕で外面のタタキ技法・ハケをミガキ調整によって消している。また胴部中央には、刻目を押しつ



第58図　出土遺物2（1：4）



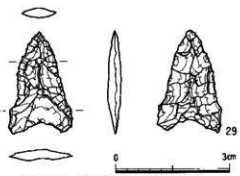
第59図　出土遺物３（１：４）

けた痕跡が明瞭に残る。いずれも復元であるが、底部径約5.3cm、胴部最大径21.7cmを測る。11は甕の口縁部から肩部にかけてで、復元口縁部径約12.8cmを測る。12は甕の底部で、外面にやや密なタタキを施し、底部の一部を板状の工具で面取りしている。13は小型の甕であり、体部上半の外面や内面口縁部、内面底部などにハケ調整を施している。復元口縁部径約9.7cm、底部径約2.4cmで、器高は約9.7cmを測る。14は高杯の脚部で内面にはケズリ手法の痕跡が残る。15・16はいずれも高杯の基部で、外面にはやや密なミガキ調整が施される。

17～23は溝２の埋土上層に位置すると考えられる土器である。17・18は壺の底部であり、底部径はいずれも約4.8cmを計測する。19は壺で口縁端部を欠失しているが、器高は現状とほとんど変わらないものと考えられる。体部内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。外面の調整は風化しており、はっきりしない。復元底部径約3.8cm、胴部最大径約12.4cmを計測する。20は壺である。体部上半の部分は、風化が進んで調整が明確ではない。体部下半外面にはやや密なケズリ手法を施し、内面にはハケがみられる。復元口縁部径約12.8cm、底部径約4.4cmで器高約16.3cmを計測する。21は甕の口縁部から体部上半にかけての部分である。復元口縁部径約18cmを測る。22は甕の胴部で、体部中央に縦方向のタタキ技法が施されている。復元最大胴部径は約15.1cmである。23は高杯の脚部で外面はミガキ調整が施され、円形スカシが五方向に穿孔される。底部径は復元で約15.7cm。

24・25はSP－18から出土した遺物である。24は壺形のミニチュア土器と考えられるものである。外側から直径2.5cmの穴をあけている。胴部最大径は約7.8cmを測る。25は高杯で内外面にやや密なミガキ調整をおこなう。復元口縁部径約15.3cm、底部径4.5cmで、器高は9.6cmを測る。

26は井戸２付近の包含層中から出土した甕である。外面をタタキ技法を施したのち、体部上半にハケを



第60図　出土遺物４（１：１）

施す。内面にも一様にハケが施される。口縁部径は復元で約20.2cm、底部径約4.4cmで器高は約22.8cmを測る。

27は溝1から出土した壺の底部である。底部の内側から穿孔がなされる。底部径は約3.8cmを計測する。

28・29は土坑2から出土した遺物である。28は壺の口縁部で、外面にはハケ調整が一様に施される。口縁径は復元で14.6cmを測る。29はサヌカイト素材の石鏃で、長軸の長さは約2.5cm、最大幅約1.6cmを測る。厚さは最も厚いところで3.5mmである。

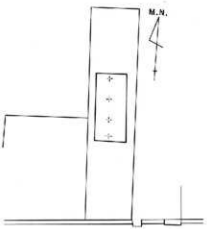
4．まとめ

以上の点からいくつかの所見を得るに至ったので、それらをまとめて結びとする。今回の調査では、掘立柱建物3棟およびこれにともなう溝跡、土坑・井戸などを検出した。この調査で検出した遺構は、いずれも当地の地形に影響を受けている。調査区西部に中心がある溝は、排水や区画という役割を担ったと考えられ、何度かの掘削がなされる。掘立柱建物はこの溝に並行して建設されており、時期的な同一性を窺うことができる。井戸や土坑からは、土器が多量に検出されたものも存在し、こうした建物に居住した人々の廃棄の痕跡となったものと考えられる。これらの遺構の時期は土器の型式から、概ね弥生時代後期～終末期と考えられよう。

第Ⅻ章　利倉南遺跡第３次調査の概要

１．調査の経緯

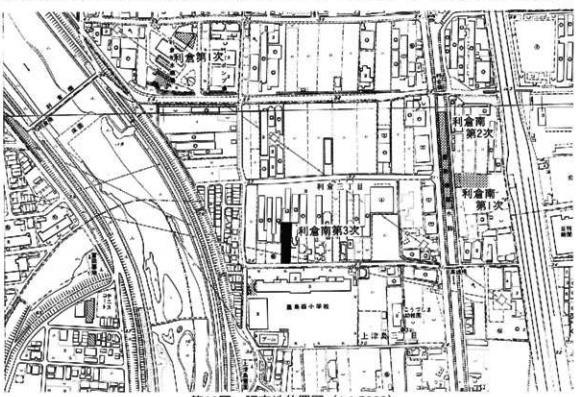
震災者用賃貸共同住宅建設に伴って試掘調査が行なわれ、その結果、当地に遺構が存在することが確認されたため発掘調査が行なわれることとなった。試掘調査で遺構・遺物が多く認められた建築範囲の北半に調査区を設定した。当調査地点の地番は豊中市利倉５丁目103の１で、猪名川河川敷の東に位置する。本調査は1996年10月３日から調査を開始し、同年11月29日にすべての調査を完了した。



第61図　調査範囲図

２．既往の調査

利倉南遺跡はこれまでに２度の調査が行われている。いずれの調査でも古墳時代後期の小方墳が検出されている。これらの調査は利倉南遺跡の東半で行なわれ、この付近を中心として古墳時代後期の墓域が広がっていることがわかる。いっぽう、利倉南遺跡の南側に隣接する上津島川床遺跡では、弥生時代後期の焼失住居が検出されている。このことから、弥生時代後期の集落が当



第62図　調査地位置図（1：5000）

地にも広がっている可能性が予想されていた。

なお、今回の報告は調査成果の整理途中の段階のものであるため、整理作業の結果如何では報告の内容が変動する場合もあるので、その点をあらかじめ断っておきたい。

３．調査の概要

（１）基本層序

現地表の１m余り下までは現代の盛土・耕作土とその床土が堆積している。さらにその下部に灰色の粘土層が10cm堆積し、その下から平安時代の黄褐色から構成される遺構面(第１面）が広がる。さらに、その下25cmから古墳時代前期の遺構面（第２面）が、また、その下30～40cmで弥生時代終末期の遺構面（第３面）が広がっていた。第２面のベースとなる土は黄灰色で、これは弥生時代後期から古墳時代前期の土師器をはじめとする土器を多く含む。第３面のベース土は黄褐色のシルトから構成されている。

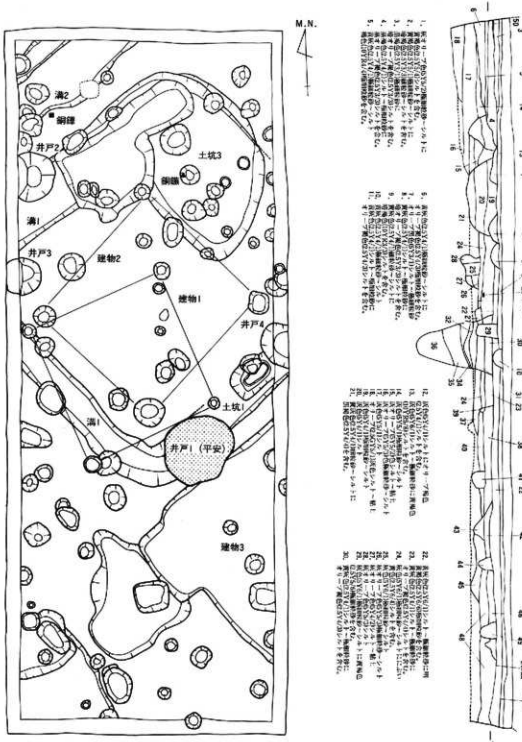
（２）検出した遺構

上に記したとおり、遺構面は３面存在したと考えられる。このうち最上層は平安時代後半の生活面である。ここでは溝・ピット・井戸などの遺構を検出した。ピットは柱痕を伴うものがいくつか認められ、掘立柱建物が当地に存在することが明らかであるが、明確な柱穴の並びを確認することはできなかった。調査区の中央から検出された井戸１は遺存状況が良好で、その構造が良くわかる資料である。井戸は径220cm・深さ280cmの土坑をうがち、曲げ物を３段積んだ後にその直上に方形の井戸枠を置く（第63図）。井戸の内部からは回転台土師器や木製の櫛などが出土している（第64図）。

第65図は弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構平面図である。遺構は第２面と第３面に分けて検出したが、第２面に属する遺構も部分的に第３面で検出したので、同一の平面図に記した。第２・第３面からは建物３棟・井戸３基・溝状遺構・土坑などが検出されている。建物１と２はともに１間×１間で柱間は３mを計る。掘立柱建物としては柱間が広いので竪穴住居の柱穴の可能性が高い。建物３も方形の竪穴住居と考えられる土坑で、一辺4.5メートルを計る。

第63図　井戸１検出状況

第64図　井戸内土器出土状況



31. 黄浜色(2.5Y5/3)シルト～極細粒砂にオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトを含む。
32. 浜オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂～シルト
33. 浜オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂～シルト
34. 浜色(10Y5/1)シルト～粘土
35. 緑浜色(7.5GY5/1)シルト
36. オリーブ浜色(5GY6/1)細粒砂に灰オリーブ浜色(5GY6/1)粘土を含む。
37. 黄浜色(2.5Y6/1)シルト～極細粒砂
38. 浜色(5Y4/1)極細粒砂～シルトにオリーブ色(5Y5/6)極細粒砂～シルト含む。
39. 浜色(5Y4/1)シルト～極細粒砂に黄褐色(2.5Y5/6)極細粒砂含む。
40. 黄褐色(2.5Y5/3)シルト～粘土
41. 浜褐色(2.5Y4/1)極細粒砂～シルトに明黄褐色(2.5Y6/6)シルト含む。
42. 浜色(5Y6/2)シルト～極細粒砂に浜黄色(5Y7/3)シルトを含む。
43. 浜色(5Y4/1)極細粒砂～シルトに黄色(5Y7/6)シルトを含む。
44. 黄浜色(2.5Y5/3)シルト～極細粒砂
45. 浜オリーブ色(2.5Y6/2)シルト～粘土に浜オリーブ色(5Y5/2)粘土を含む。
46. 浜色(5Y4/1)極細粒砂～シルトにオリーブ色(5Y5/6)極細粒砂～シルト含む。
47. 浜色(5Y4/1)極細粒砂
48. 浜オリーブ色(5Y5/3)シルト～粘土に浜色(5Y5/1)シルトを含む。
49. 浜色(5Y4/1)極細砂～シルトにオリーブ色(5Y5/1)シルト粒が混入。
50. 黄浜色(2.5Y5/3)シルト～極細粒砂

第65図　第２面・第３面平面　・断面図（1：80）

第66図　土坑１

溝１は幅60～90cm・深さ20cmの溝で、一辺6.4m余りの方形を呈している。この溝の性格は明らかにできなかったが、方形周溝墓の可能性が考えられる。その根拠としては土坑１の存在がある。土坑１は長さ100cm余・幅64cmの長方形の土坑である。土坑底の壁ぎわに幅15cmの溝がめぐり、中央に長さ65cm・幅30cmの高まりを残す。こうした形態から土坑１は木棺墓の可能性が考えられよう。この土坑１は溝１の南辺の中央に位置しており、土坑１が木棺墓と認められるならば、土坑は方形周溝墓の溝内埋葬として把握できるので溝１が方形周溝墓である可能性が高くなる。ただし、溝１からは布留式の古段階に属する土器が出土しており、溝１を壊して存在する井戸からも布留式土器が出土しているので、方形周溝墓と集落が近接した時期に存在したことになり、やや不自然である。もう一つの可能性として、住居を囲む溝の可能性が考えられる。穂積遺跡や小曽根遺跡では、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての周囲を溝で囲まれた住居が幾棟も検出されている。今回の調査でも溝１で囲まれた方形区画内からピットが多数検出されているので、その可能性を捨て去ることはできない。溝１の性格については今後の課題としておきたい。

なお、特筆すべき遺物として小形倭鏡・銅鏃・銅鐸破片がある。小形倭鏡は調査区東壁から土層精査時に出土したものである。断面図第23層すなわち遺構第２面の基盤層からの出土である。銅鏃はピットの壁から出土した。また、銅鐸片は第３面の遺構精査時に遺構面直上から出土した。銅鐸片が出土した周辺を詳細に精査したが、埋納坑などの遺構は認められなかった。

（３）出土遺物

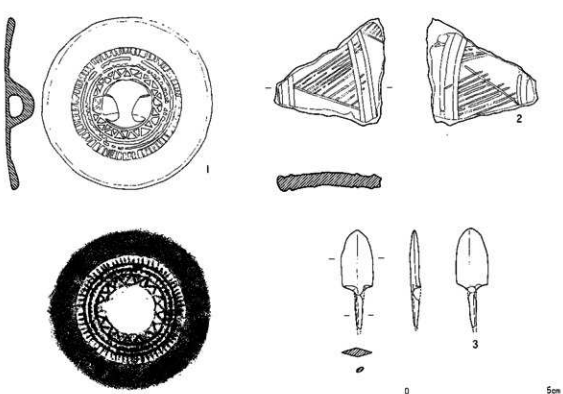
出土遺物は土師器・須恵器および弥生土器などを中心に整理箱25箱分の出土をみた。現状では遺物のほとんどは整理途中であるので、その詳細な報告は正式な報告書刊行時に譲ることとし、今回は３点の青銅器片を中心に記述をすすめる。

小形倭鏡（第67図－１）　遺存状況は良好である。全面が錆びて光沢を持つ青灰色（5BG7/1）を呈している。検出時に欠けた縁部からは地金がみえており、その部分は褐色（7.5YR4/6）を呈し、スズ分の含有率が高くなかったことをうかがわせる。直径6.0cm・縁厚2.3cmを計り、2㎜程度の反りを持つ凸面鏡である。中央に直径1.7cm・高さ1.0cmの半球形の鈕を有する。鈕孔は幅0.8cm・高さ0.5cmの隅丸の方形状を呈する。鈕の周囲には、２本の圏線で区画された幅0.4cmの空間に鋸歯文が施されている。鋸歯文は浮き彫りによって表現されることが一般的であるが、本例では線によって描かれており、この鏡を特徴づける要素である。図を時計にみたてた９時方向の鈕孔に接する圏線と鋸歯文は圧迫をうけたようにかすれており、きわめて不鮮明である。鈕孔を形づくる中子の痕跡であると考えられる。鋸歯文の外側には鋸歯文がめぐらされ、櫛歯文は２

本の圏線によって区切られるため、３つに分断されている。重量は30.8gである。この鏡が出土した層からは布留式土器が出土しており、鏡は当該時期に属するものと考えられる。

銅鐸片（第67図－２）長さ４cm弱の鈕の破片である。きわめて緩やかであるものの界線が湾曲しているので、頂部から側辺に移る外縁文様帯の一部ではないかと想像される。文様は外から順に鋸歯文・２条の界線・鋸歯文・２条の界線が認められる。観察できる鋸歯文はすべてR鋸歯文である。外縁文様帯が２つあることと、外縁第１文様帯と第２文様帯を分ける界線が２条の細線であることから、突線鈕３式あるいは２式に属する可能性が高い[11]。この破片には歪みが認められ、意図的な破砕を受けた可能性を持つ。銅鐸片は先に述べたとおり、第３面のベース向上から出土したものである。第３面を覆う包含層には庄内から布留段階の土器が出土している。銅鐸が出土したすぐ北の溝２からは庄内甕が出土している。このことから、銅鐸片は庄内段階のある時期にこの場所にもたらされたものと考えられる。

ところで、本調査地点から北西に300mのところにある利倉遺跡で、突線鈕式３～５式に属する飾り耳が出土している[12]。この破片は流路の堆土上層から出土したもので、利倉遺跡周辺から流されてきたものとされている。本調査出土の銅鐸破片と同一個体である可能性も捨てきれないが、両者の色調が大きく異なるので、それぞれ別個の銅鐸の破片であると現在のところ考えている。しかし、河川や丘陵のような地形的に妨げるものがない近接した場所に、銅鐸を所有するような有力な集落が２つも併存するとは考えにくい。２つの銅鐸片が別個体とするならば、これ



第67図　青銅製品遺物実測図

らの銅鐸は同一の集落が有していた可能性があろう。

銅鏃（第67図－３）茎部の端が若干欠けており、茎部が折れた状態で出土したもののほぼ原形を留めている。全長は3.5cmで、鏃身長は2.1cm・最大幅1.1cmを計る。重量は2.5gである。鋳あがりは悪く、表面にはスポンジのように小さな穴が無数にあいている。両面ともに縦の鏑が認められるが、明瞭でなく鏃身の中央からややズレたところに存在する。鏃身の断面形は菱形を呈する[3]。

４．まとめ

以上の調査成果をまとめるならば以下のようになる。

①平安時代後期の集落の存在を確認した。特に井戸１は井戸枠が良好に遺存しており、中から出土した土器や櫛とともに当時の生活を復元するのに貴重な資料である。

②弥生時代後期後半から古墳時代前期の集落の存在を確認し、大量の土器資料を得た。

③溝１は方形周溝墓の可能性がある。井戸などによって部分的に壊されているものの布留式土器が出土しているので、古墳時代の集落が作られる直前の遺構である。もし、方形周溝墓ということが認められるのであれば、墓を破壊して集落を築いているということになる。溝１の性格究明は資料整理を進めていくうえで重要な課題となった。

④銅鏡と銅鏃そして銅鐸片が出土した。利倉南遺跡の集落が存続した弥生時代後期後半から古墳時代前期という時期は、青銅器を用いたマツリが変質する時期である。今回出土した青銅製品は、そうしたマツリの変化を追及するうえで重要な資料といえよう。

⑤利倉遺跡出土の銅鐸片と当調査出土の銅鐸片が別個体であると認められるのならば、利倉周辺には２個体あるいはそれ以上の銅鐸が存在したことになり、弥生時代後期後半以前にはそれらの銅鐸を所有する大きな拠点集落が広がっていた可能性が浮上する。

⑥また、銅鐸片は歪みが認められ、意図的に破砕された可能性を有するものである。これらは、銅鐸祭祀の終焉を考えるうえで貴重な資料といえる。

以上のように、注目すべき遺構と遺物が検出された。遺構は周囲にも広がっていることは明らかであるので、周辺の開発には注意を要する。

註

（1）佐原　眞1960「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系』第２巻　平凡社。
　　難波洋三「銅鐸」『道具と技術』弥生文化の研究　第６巻　雄山閣出版。

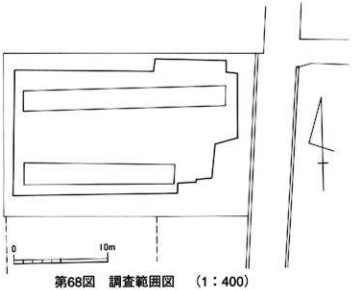
（2）鳥出義明ほか1976『利倉遺跡』利倉遺跡発掘調査団。
　　銅鐸博物館（野洲町立歴史民俗資料館）編1996『銅鐸』―理納と終焉を考える―。

（3）青銅製品に関しては都出比呂志・福永伸哉・高田健一の各氏より御指導・御助言を賜りました。記して感謝致します。

第Ⅷ章　小曽根遺跡第21次調査の概要

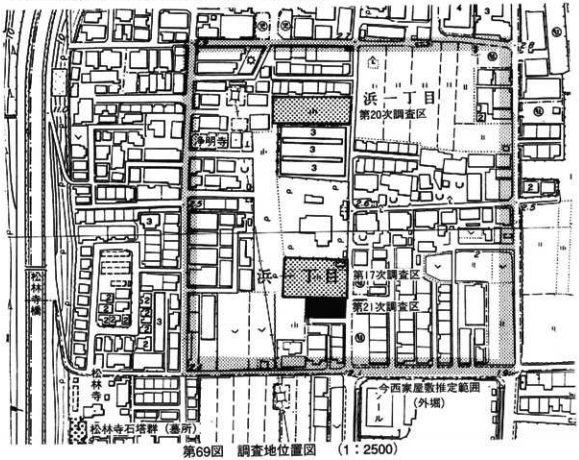
1．調査の経緯

当調査地は、豊中市浜１丁目403-1、404-1に所在し、小曽根遺跡のなかでも春日社領垂水西牧の南郷目代であった今西家の屋敷本宅の南側に隣接している。



第68図　調査範囲図　（1：400）

平成７（1995）年12月８日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて試掘調査をおこなったところ、現地表面より地下80cmのところで今西家屋敷と関連が考えられる遺構を検出した。同敷地には、阪神淡路大震災により全壊した共同住宅の建て替えに伴い、杭地業を伴う鉄骨造３階建て共同住宅の建設が計画されており、協議を行った結果、建物基礎の範囲にあたる285㎡について平成８(1996)年4月24日から6月28日の日程で本調査を行うこととなった。



第69図　調査地位置図　（1：2500）

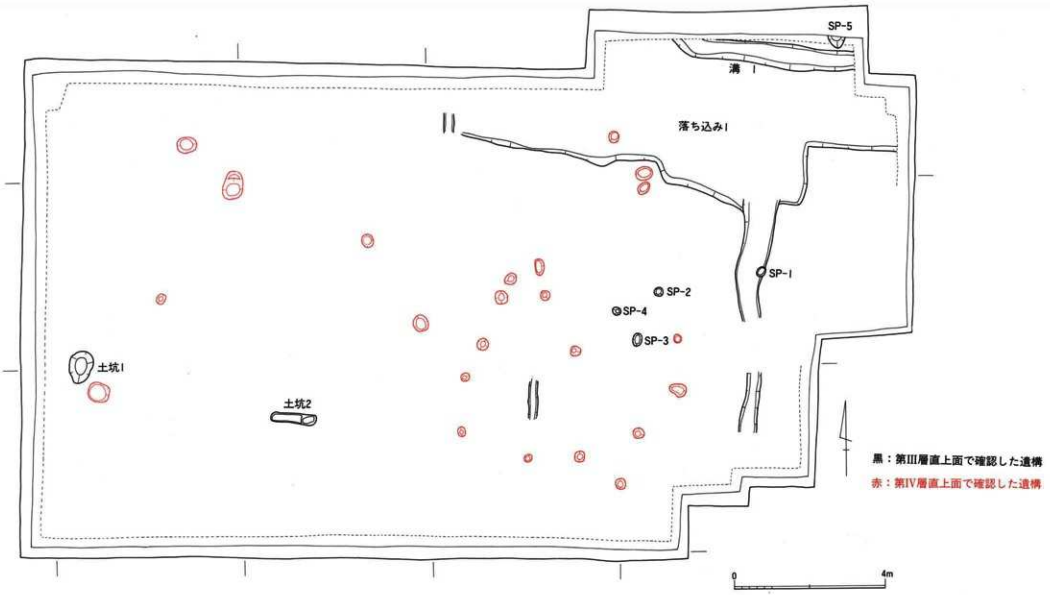
2．調査区周辺の環境と既往の調査

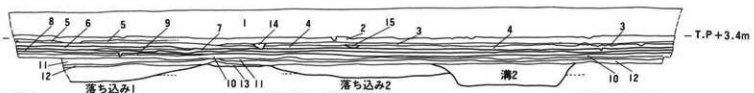
小曽根遺跡は、豊中市南端を流れる神崎川と遺跡の東西を流れる天竺川、高川といった大小の河川の沖積作用によって形成された微高地と豊中台地から派生する緩やかな扇状地上に立地する。遺跡の標高（現地表）は北部で6.2m、南部で2.0mと約４mもの高低差があり、平野部の遺跡としては起伏に富む。また、遺跡南西の低地上に形成した微高地には、方二町の規模を有する方形居館と推定される今西家屋敷が位置する。

小曽根遺跡および今西家屋敷では、これまで20次に及ぶ調査が行われ、主に弥生時代と平安時代から室町時代にかけての集落、そして中近世の方形居館である今西家屋敷の一部が確認されている。なお、平安時代から室町時代の集落は垂水西牧榎坂郷小曽根村に比定され、今西氏は領主春日社より当地へ下向した日代として知られている。今西氏が保管する古文書（『今西家文書』）は、室町時代以降の当該地域の政治的状況をつぶさに語るとともに、平安時代末期から江戸時代かけて小曽根村の様相、村落景観を知る上で欠かせない史料となっている。

ところで当該調査区は今西家屋敷本宅部分の南側に隣接し、屋敷関連遺構の検出が予想された。ここでは今西家および小曽根遺跡を中心とした垂水西牧榎坂郷の概要について述べることとする。垂水西牧榎坂郷は、小曽根・穂積・垂水・榎坂の４村からなるが、時代が下るとともに藏人・服部・熊野田などの新しい村落が出現し、その数は次第に増加する。文献によれば、すでに11世紀前半代には摂関家領として荘園化し、12世紀末（1183年）に春日社へ寄進され、これ以降中世を通じて春日社領として継続し、近世には幕府天領下に組み込まれ近世村落に再編されることが知られている。小曽根遺跡中部付近の第７・13・15次調査では、11世紀前半の遺構とともに11世紀後半から12世紀前半の建物群（屋敷地）を確認し、また穂積遺跡における調査でも11世紀前半、11世紀後半から12世紀の遺構群を確認していることから、摂関家領段階で『垂水西御牧榎坂郷田帳取帳』にみる村落単位が成立していたものと考えられる。12世紀後半から13世紀にかけての村落関連遺構は遺跡の広い範囲で認められ、村落域が拡大したものと想定される。14世紀後半以降の村落関連遺構は第10・13・15次調査などで確認されているが、この段階では田畠と宅地が明確に分離し、村落は次第にまとまりをもつ傾向が認められるようになる。16世紀以降の村落については、いずれの調査地でも確認されていないため、その状況は不明である。

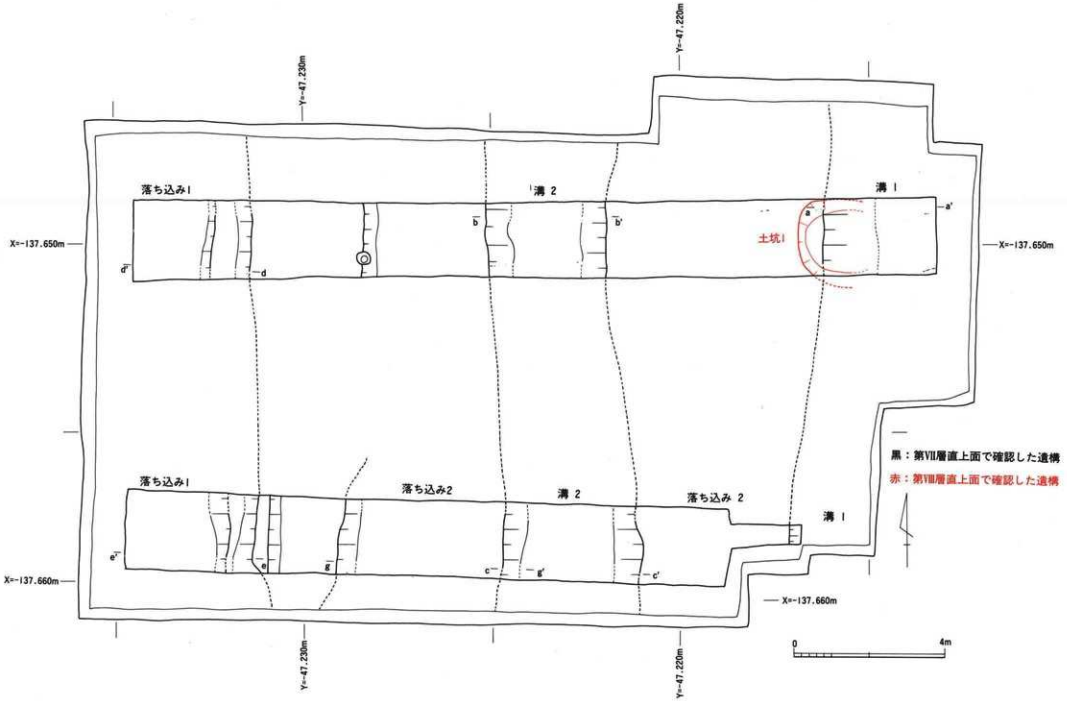
一方、春日社より今西氏が目代として下向した時期については、文保元年（1317年）の『南郷方惣帳』制作前後の時期など諸説あり明確にはされていない。ただ、14世紀中頃の文献では名主層との連携が認められることから、遅くともこの時期には当地に屋敷を構え、直務支配を確立していたものと考えられる。小曽根入部の後は、春日社と名主との関係調整に尽力し、戦国時代には衰退する春日社にかわり、婚姻などの方法により国人層との関係を強化し、春日社領の維持に努めた。春日社領は近世村落への再編の中で消滅するが、今西氏はその後も当地で生活を営み現在に至る。なお、屋敷については近世の絵図から、内外二重の堀を巡らす方二町規模の居館と推





1．整地土
2．耕土
3．青灰色シルト～中粒砂(5B5.5/1)
4．耕土
5．暗青灰色シルト～細粒砂(5B3.5/1)
6．暗青灰色極細～中粒砂(10BG4.5/1)
7．青灰色細～粗粒砂(10BG5.5/1)＋灰色粘土(N5/)
8．青灰色細～粗粒砂(10BG6/1)
9．青灰色シルト～中粒砂(10BG5.5/1)＋青灰色粘土(10BG6/1)
10．青灰色シルト～中粒砂(10BG5.5/1)
11．青灰色シルト(5B6/1)
12．青灰色細粒砂(5B5/1)
13．青灰色中～粗粒砂(10BG5/1)＋灰色シルト(N5/)
14．青灰色細粒砂(5BG5/1)
15．浅黄色中～粗砂(2.5Y7/4)

第71図　第Ⅲ・Ⅳ層上面平面・断面図　(1：100)



第72図　第Ⅶ・Ⅷ層上面平面図　（1：100）

定され、現在の屋敷本宅は、元禄もしくは宝永年間の焼失後のもので近世民家としても貴重である。今西家屋敷については、今回の調査を含め、17次・20次の３回の調査と多数の立会調査が行われている。このうち、17次調査では、14世紀代の柱穴群や16世紀後半の溝、幅10mの規模を有する18世紀の内堀など多数の屋敷関連遺構を検出し、また下層から13世紀末頃の湿地性堆積層を検出したことにより、現屋敷地が14世紀代の成立したものと予想し得るに至った。また、ほぼ同じころ行われた立会調査（『豊中市埋蔵文化財年報VOL.2 1991&2』「Ⅰ．付　試掘調査一覧」1992年度　No.124）では15世紀以前に掘削されたものと考えられる外堀の一部を確認した。これらの調査成果より、今西家屋敷が14世紀代に方二町規模の居館として成立し、江戸時代以降も居館としての様相を保っていたことが想定できるようになった。

以上、垂水西牧および今西家屋敷に関する調査事例は少なく、その概要は明確とは言えない。しかし、豊富な文献やその研究成果との比較検討できる全国で数少ない荘園遺跡であり、今後の調査の進展によっては、畿内における中世村落の様相を明らかにする上で有益な知見をもたらすことになろう。

3．調査の概要

（1）基本層序

当該調査区の基本層序は大まか10層に類別でき、第70図に示す今西家屋敷周辺の各調査地で確認した基本層序との対応関係が想定できる。既往の調査では、第Ⅲ～Ⅴ層直上面で遺構を検出しているが、当該調査区では第Ⅲ・Ⅳ層および第Ⅶ・Ⅷ層直上面から遺構を検出した。

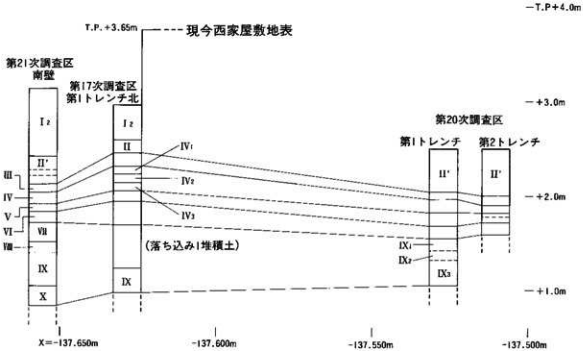
以下、各七層の概要について記す。

第Ⅰ層　近世・近現代の整地層である。整地の時期からⅠ１層とⅠ２層に区別できる。Ⅰ１層は、現在の今西家屋敷本宅部分（18世紀初頭に建築）を範囲とする近世の整地土である。Ⅰ２層は、近現代の宅地造成に伴う整地層で、当該調査区の整地層もこれに該当する。

第Ⅱ層　近現代の耕土層（Ⅱ層）もしくは腐植土層（Ⅱ´層）である。Ⅱ´層は、今西家屋敷の北部及び西部の範囲にかけて確認され、現在も堆積が進行している。当該調査区では、Ⅱ層を確認したが、同層内に層厚３～５cmの青灰色中粒砂からなる間層を挟むことから、Ⅱ１層とⅡ２層に区分できる。

第Ⅲ～Ⅴ層　上に青灰色中粒砂からなる水成層である。各層の上面から遺構を検出している。検出した遺構の時期から、第Ⅲ層は18世紀以前、第Ⅳ層は16世紀後半、第Ⅴ層は14世紀後半以降に堆積した可能性が考えられる。なお、第17次調査区第３トレンチ北部では、第Ⅳ層対応部分がさらに３層に細分できる。

第Ⅵ層　上に灰オリーブ色・青灰色シルトからなる耕土層で、すべての調査区で検出している。同層直上面には、哺乳類・鳥類などの動物および人間の足跡痕、また畦畔を検出している。また、同層には、明青灰色細～中粒砂等からなる間層を挟むところもあり、部分的にⅥ１・Ⅵ２層に細



第70図　今西家屋敷周辺の基本層序模式図

分できる。なお、同層から出土した遺物は細片が多く、時期などの詳細は明確ではないが、遺物中にへそ皿を含まないことから14世紀前半頃までの堆積が想定できる。

第Ⅶ・Ⅷ層　当該調査区で検出した、主に灰白色粗粒砂からなる水成層である。各層の直上面において遺構を検出している。これら遺構の状況から同層が、著しい削平を受けた可能性がある。各層直上で検出した遺構から出土した遺物が少ないため堆積時期は特定できないが、第Ⅶ層が12世紀後半～13世紀中頃、第Ⅷ層が12世紀前半以前と考えられる。

第Ⅸ層　主に灰色粘土（シルト）からなる。同層直上面に、動物・人の足跡痕を確認していることから、耕作面を有する可能性がある。20次調査区では同層上に黒オリーブ色粘土からなるⅨ´1層・Ⅺ´2層が存在する。なお、同層は部分的に確認しただけで、堆積時期などの詳細は不明である。

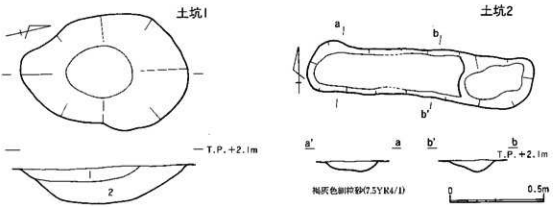
第Ⅹ層　灰色シルトからなる水成層である。部分的に青灰色細～粗粒砂の層状ブロックを含む。詳細は、第Ⅸ層同様に不明である。

（2）検出した遺構

当該調査区では、先に述べた第Ⅲ・Ⅳ層及び第Ⅶ・Ⅷ層で遺構を検出している。以下、各遺構面で検出した遺構について概要を記す。

第Ⅲ層直上面

同層上面からは、溝・土坑・ピットなどを検出している。以下、主たる遺構の概要について述べる。



第73図　土坑平面・断面図　(1：20)

溝　1　調査区北東部で検出した、東西に伸びる溝である。幅50cm・深さ15cmをはかる。埋土は第Ⅱ層と類似するオリーブ黒色細粒砂であるが、第Ⅱ層からの掘込みは認められなかった。第17次調査で検出した江戸時代後期の内堀が埋没した後に掘削された遺構で、周辺の耕作に関連するものと考えられる。埋土から19世紀以降の陶磁器細片が出土している。

土坑1　調査区西部で検出した平面楕円形の土坑である。長軸0.8m、短軸0.65m、深さ20cmをはかる。埋土は2層からなるが、上下層ともに灰色中粒砂を主体とする。土層断面に柱痕などは見られず、周辺に関連する遺構もないことから性格は不明である。埋土中から土師器細片が出土している。

土坑2　調査区南西部で検出した溝状の土坑である。長軸1.2m、短軸0.25m、深さ5cmをはかり略東西を主軸とする。埋土は、第Ⅱ層と類似する褐灰色細粒砂からなる。遺物等は出土しなかったが、埋土などから土坑1などと同じ時期の遺構と考えられる。

ＳＰ－１～５　調査区東側一帯で検出している。その分布はまばらで、各々のピットの深さも2cm前後と浅くまた柱痕もなく、掘立柱建物となる可能性は乏しいものと考えられる。埋土はいずれも第Ⅱ層と類似する褐灰色細粒砂からなり、礎石の痕跡または耕作時の何等かの行為に伴う遺構と考えられる。

落ち込み　調査区北東部に広がる深さ3～5cm程度の浅い落ち込みである。埋土は青灰色粗粒砂からなる。落ち込みの北方は、堀2南東コーナー部にあたるものと推定されることから、堀2との関連も考えられる。19世紀以降の土器・陶磁器がわずかに出土している。

これらの遺構をみると、第Ⅱ層に類似する埋土を有するものとそれ以外のものの2種に分けられる。このうち、前者の埋土を有する遺構は、第Ⅲ層直上が耕作に伴う撹拌をうけたあとに掘り込まれているのに対し、後者は撹拌以前に掘り込まれており、時期差をみとめることができる。

第Ⅳ層直上面

調査区全域で大小のピットを検出している。ピットは東部に集中し、建物が存在した可能性も

考えられるが、ピットの配置から建物は復元できなかった。なお、これらのピットの埋土は、主に灰色粗粒砂の単一層からなり、柱痕を有するものは認められなかった。礎石の痕跡または耕作にともなう遺構と考えられる。

第Ⅶ層直上面

第Ⅶ層は、第Ⅲ・Ⅳ層の調査を終えた後、下層の堆積状況を確認するために行った試掘調査にて偶然検出した。遺構の有無を確認するため、調査区内に２本のトレンチを設定し、掘削した結果、溝３条と落ち込み２か所を検出した。

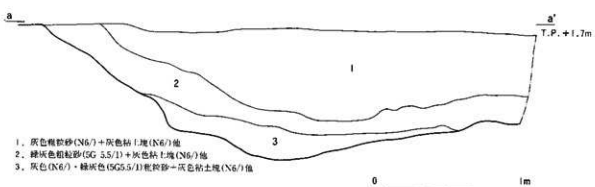
溝　1　調査区東部にて検出した南北に伸びる溝である。溝の東半分は、調査区外にあるためその規模は明確にはできないが、検出部分で幅3.3m、深さ0.9mをはかる。溝内の埋土は、緑灰色及び灰色シルト等の大小の塊状ブロックを多量に含む灰色粗粒砂からなり、明確な自然堆積層はみとめられなかった。埋土の状況からみて、開削後の短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。よって、溝１が水利を目的に長期利用された可能性は乏しく、別途の目的が考えられる。

なお、溝１上層には埋め戻し後に流入した堆積土が認められないことなどから、第Ⅶ層上面が溝１の埋没後に削平を受けた可能性がある。また、埋土から尾上編年Ⅲ－３期以降の和泉型瓦器椀の破片が出土している。

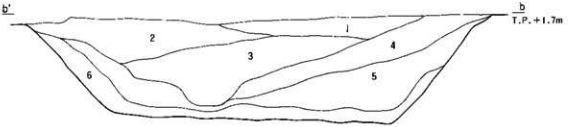
溝　2　調査区中央にて検出した南北に伸びる溝である。溝の幅は北側で3.1m、南側で3.6 m、深さは0.65mをはかる。溝の断面形は逆台形状を呈し、溝１とは形状が異なる。溝内の埋土は、灰色シルト等の大小の塊状ブロックを多量に含む青灰色粗粒砂が、また基底部にはわずかに灰色シルトからなる自然堆積土がわずかに認められる。基底部の堆積土の状況から、溝内に流水があった可能性は乏しく、溝１と同様に長期にわたる水利利用を目的とした溝とは考えにくく、別途の目的が考えられる。

なお、溝２から遺物は出土していないため、詳細な時期については不明であるが、溝１とあまり隔たりのない時期に開削されたもの考えられる。

落ち込み１　調査区西側で検出した落ち込みである。第17次調査区第３トレンチにおいても、落ち込み１内の堆積土と同様の堆積層を確認しており、落ち込み１が北方へ広がる可能性は高い

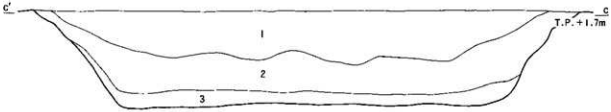


第74図　溝１断面図（1：25）



第1トレンチ北壁

1．浅黄色細～粗粒砂(2.5Y7/4)＋灰色粘土塊(N5.5/)他
2．緑灰色中～粗粒砂(5Y5/1)＋灰色粘土塊(5Y5/1)他
3．緑灰色中～粗粒砂(7.5GY7/1)＋灰色粘土塊(N5/)他
4．3と同じ、粘土塊の比率20%
5．灰色細～粗粒砂(N6/)＋青灰色シルト・粘土塊(10BG5.5/1)他
6．灰色細～粗粒砂(N6/)＋灰色粘土塊(N6/)他



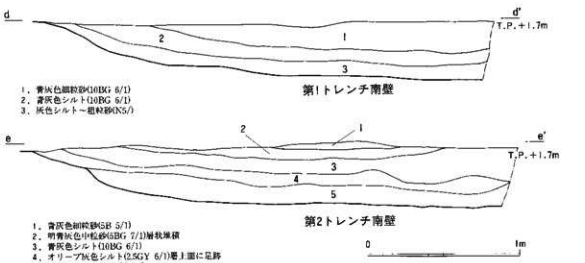
第2トレンチ南壁

1．青灰色粗粒砂(10BG6/1)＋灰色シルト・粘土塊(N6/)他
2．1と同じ　粘土塊の比率80%
3．灰色シルト～細粒砂(N6/)

第75図　溝２断面図　（1：25）

ものと考えられる。

検出部分における落ち込み１の深さは0.4mで、基底面は平坦である。落ち込みの東肩に沿って、幅20～30cmの畦畔が設けられている。なお、畦畔は、第Ⅶ層を５cmほど盛り上して成形してい



第76図　落ち込み１断面図　（1：25）

第77図　落ち込み2断面図　(1：25)

るが、その際に第Ⅶ層上面で一定の整地作業が行われた可能性がある。

落ち込み1の埋土は第Ⅵ層と類似し、層境も明瞭ではないことから、第Ⅵ層の堆積が落ち込みの堆積終了後、間もなくして始まった可能性が考えられる。なお、落ち込み1埋土からは、瓦器細片が出土しただけであるが、第17次調査において当該層より瓦器椀（和泉型Ⅳ型式）が出土していることから、13世紀末以降に堆積したものと考えられる。

落ち込み2　調査区南東部（第2トレンチ）で検出した深さ0.35mの落ち込みである。落ち込みの南部は調査範囲外にあるため、その範囲は明確でない。埋土は、青灰色細粒砂を主体に、間層に灰色中粒砂を挟む。埋土からは、土師器皿の細片が少量出土したものの、時期などの詳細は不明である。なお、溝1・2は、この落ち込みの堆積土上面から掘り込まれていることから、第Ⅶ層上面では、落ち込み2がもっとも古い遺構といえる。

なお、第Ⅶ層上面におけるこれらの遺構は、切り合いや層位関係から落ち込み2の埋没後に溝1・2の掘削・埋め戻しが、そして第Ⅶ層が削平された後に落ち込み1の堆積が行われ、これと前後して第Ⅵ層の堆積へと移行するものと想定できる。しかし、これらの遺構から出土した遺物は少なく、その時期関係の詳細は明確にできない。ただ、溝1から出土した尾上編年Ⅲ型式3段階以降と考えられる和泉型瓦器椀の破片および第17次調査において検出した落ち込み1対応層から出土した和泉型Ⅵ型式の瓦器椀から、第Ⅶ面の遺構が遅くとも13世紀後半から14世紀初頭にかけて作られた可能性がある。

第Ⅶ層直上面

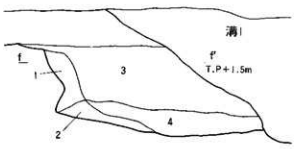
第1トレンチにて、その一部を検出した。よって、全体的な状況は明確ではなく、また検出した遺構も土坑1基に限られる。

土坑1　直径1.8m以上、深さ0.9mの円形の土坑である。断面形は袋状を呈し、土坑下部はえぐり込まれる。えぐり込まれた部分には上層部の崩落が認められる。埋土のほとんどは第Ⅶ層以下の土層を母材とするシルト・粘土ブロックと青灰色

粗粒砂からなり、一見して土取り穴の様相を示す。しかし、密集するような状況を周囲からは想定しにくい。遺構の時期については、出土したⅡ型式3段階の和泉型瓦器椀から、12世紀中頃となる可能性が残されているが、現段階では特定しにくい。

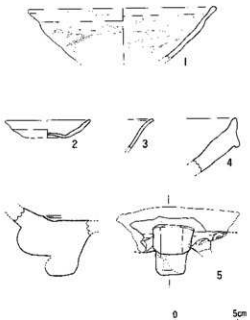
（3）出土遺物

出土した遺物の時期は、中世から近世に及ぶが、細片が多く、図化できるものは少なかった。



第78図　土坑1断面図　（1：20）

以下、遺構および包含層中から出土した遺物について概要を述べる。なお、1は、第Ⅷ層上面で検出した土坑1から、2～5は、第Ⅴ層から出土した。



第79図　出土遺物　（1：3）

1は、瓦器椀である。残存する体部の内外面には、粗いヘラミガキを施す。外面上半部は並行ミガキであるが、下半部には形骸化した分裂ミガキが認められる。口径は推定15cmである。和泉型Ⅱ型式3段階に相当する。2は、へそ皿で、口縁は推定復元で6.8cmをはかるが、口縁は不整円であるため明確ではない。体部外面上半から内面にはナデが、外面下半からは成形時の押圧が認められる。内面では、底部と体部の境界に3mm程度の幅で強いナデが施されている。底部は、外面からの押圧によりなだらかに隆起している。3は、白磁椀の口縁である。端部から内面に、幅4.5mm程度の釉剥ぎが認められる。器壁の厚さは、2.5mmと薄い。4は、備前焼き擂鉢の口縁である。端部の上下端がやや突出している。間壁編年Ⅵ期中頃のものと考えられる。5は、瓦質土器の脚部である。輪花形の火鉢などの器形となる可能性が高い。体部外面にはヘラミガキが、内面にはハケ状工具によるナデが施されている。脚部は、ヘラ状工具で成形している。

上記2～5は、15世紀段階の所産と考えられる。

4．まとめ

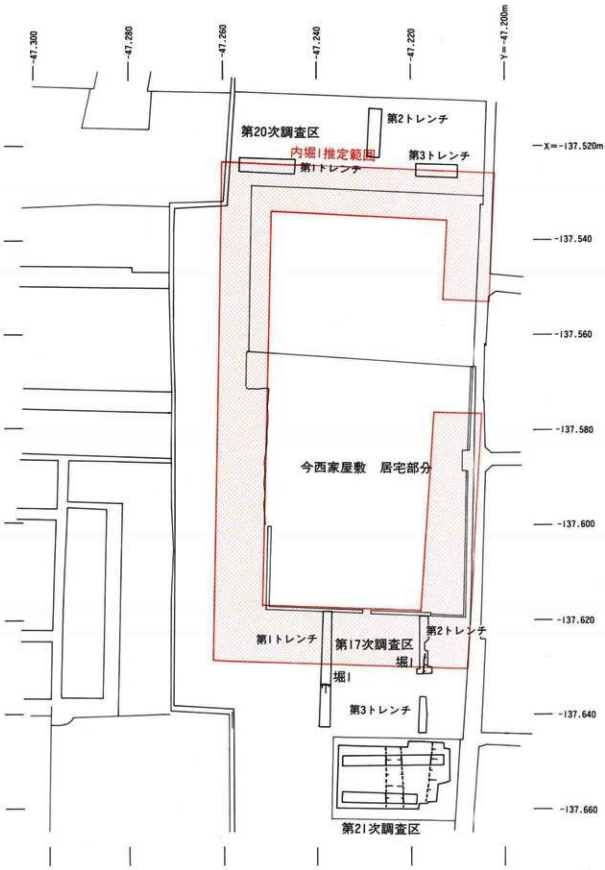
今回の調査では、近世の今西家屋敷に関連する明確な遺構は確認されず、当該調査区が遅くとも14世紀前後から耕地として利用されていた可能性が高いことが判明した。このことは、近世の今西家屋敷とその周辺の景観をより具体化していく上で重要な成果と言える。また、過去の調査

では知られていなかった第Ⅶ・Ⅷ層の存在が確認され、その直上面で溝１・２などを検出したことは、当該調査区周辺の土地利用状況の変遷を考える上で大きな成果となった。ここでは、溝１・２の性格を検討し、今西家屋敷との関連について考えることにしたい。

第Ⅶ面の時期は確定できないものの、ほぼ12世紀後半～13世紀中頃の堆積が予想される。その直上面で検出した溝１・２は、埋土の堆積状況に長期に及ぶ滞水や流水の痕跡は認められず、水田耕作にともなう水路もしくは地割り溝となる可能性は乏しいものと判断できる。また、溝の規模からみて、掘削には村落内の共同作業が必要と考えられ、一般的な宅地に伴う区画溝とは明確に区別できる。残る一般的な用途として考えられるのは、村落もしくは屋館の周囲に巡る区画溝ということになる。前者の例としては、京都市久我東町遺跡第３次調査の環濠（第２次調査ＳＤ－６８）《（財）京都市埋蔵文化財研究所　『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』》など、また後者の例としては長原遺跡SD210およびSD211・212《（財）大阪文化財センター『長原』1978》などが挙げられる。いずれの例も、溝から内側の部分が明らかとなって性格が判明したもので、溝の形状や規模に著しい相違は認められない。また、いずれの性格の溝にしても、溝１・２の時期にはすでに出現しており、時期から性格を決定することも困難である。よって、現段階で溝１・２の性格について一定の結論を提起するにはいたらないが、予想の範囲で現在の今西家屋敷に先行する方形居館などにともなう区画溝となる可能性があることは、特に留意しておきたい。

ついで溝１・２と今西家屋敷の関連であるが、これらの溝を検出した第Ⅶ層直上面は、その後の第Ⅵ層の堆積による耕地化で埋没することから、現段階で確定している今西家屋敷に関連する遺構面との間に、一定の断絶が認められる。また、文献史における成果を見る限り、今西家屋敷の成立を14世紀以前に遡らせるだけの有力な史料は今一つとぼしい。強いて14世紀以前に遡らせるとするならば、垂水西牧が摂関家から春日社に寄進された寿永二年（1183年）から、垂水西御牧榎坂郷田畠取帳が注進される文治四年（1188年）の時期に可能性が見出だされるが、今回の調査では当該期の遺物は出土していない。よって、今回の調査成果を見る限り今西家屋敷と溝１、２に関連性をもとめ、今西家屋敷の成立を14世紀中頃以前とするだけの根拠は見出だしにくい。

以上より、14世紀後半頃から今西家屋敷の位置がほとんど変わらないことが明らかになった。ただ、本宅部分の位置関係にはやや不自然さが認められ、敷地の範囲に大きな変動があった可能性がある。『豊中市史』により復元された17世紀末まで遡り得る屋敷図および周辺の測量調査の成果から算出した屋敷本宅の規模（内堀外側）は、東西約54m前後（南辺）、南北105ｍ未満と推定され、さらに内堀を除く居住範囲は、推定で東西34m（南辺）、南北83mになる。この範囲には末社も含んでいることから、居住範囲がさらに狭まることは明白である。ところで、14～16世紀の郡・郷規模の領主居館や城館などの居宅部分をみると、少なくとも方形の場合では一辺40～50m程度、面積にして2,000㎡程度は確保している。近世段階の今西家屋敷の規模を中世の居



第80図　今西家屋敷内堀推定範囲図　（1：800）※江戸時代後期

館と比較した場合、その差はあまりに大きい。また、居宅と末社が隣接しているという事情があるものの、本宅部分の東西長が南北長の１／２程度で南北に細長い形状というのも、中世の居館では例を見ない。また、第17次調査第２トレンチでは堀の切り合いを検出しており、堀の付け替えを想定している。これらの状況から、本宅敷地の範囲に大きな変動があったことを想定したい。この変動の時期については、いまのところ18世紀初頭以前と言えるだけで、他に具体的な時期を考える手がかりはないが、本来の範囲は『豊中市史』による政所（跡）の推定位置をもとに、南北の内堀外側の推定長を東西長にあてはめ、一辺105m未満の方形区画（内堀外側）となる可能性を想定しておきたい。ただ、第17次調査では戦国期段階の内堀は確認されていないため、近世のように巨大な内堀をめぐらしていた可能性は乏しいものと考えられる。

以上、第21次調査の概要報告を行ったが、第Ⅶ層上面における溝１・２の検出は今西家屋敷の成立時期とも関連する新たな問題を提起するものとなった。畿内における中世村落のモデルである垂水西牧と今西氏について、その変遷を明らかにすることは極めて重要である。さらに、（現）今西家屋敷は中世的景観を残す近世民家として貴重な存在であり、その重要性は日々増しているといって過言ではあるまい。

よって、今後とも当該地域における文化財の保護および調査には、より慎重を期す必要があろう。

第XIV章　試掘調査の概要

1．原田遺跡西方

調査の経緯　原田元町３丁目87－2他において市営被災者用共同住宅の建設に先立ち、平成８年３月18日に試掘調査をおこなうこととなった。

調査の方法・所見　敷地内の既存建物を避けて、重機により2カ所の試掘坑を掘削し、遺構の有無を確認することとした。

この結果、現行地表より地下190cm前後にて洪積礫層を確認したが、遺構及び遺物包含層はなく建設工事を着手することとなった。

2．本町遺跡

調査の経緯　本町３丁目60において被災した専用住宅の建て替えに先立ち、平成８年３月26日に試掘調査をおこなうこととなった。

調査の方法・所見　敷地中央付近にて、重機により試掘坑を掘削し、遺構の有無を確認することとした。

この結果、現行地表より地下15cm前後にて遺物包含層を、また20cmのところで洪積層を確認した。洪積層の上面において遺構を検出したが、建物の基礎に伴う掘削は現行地表から地下10cmのところにおさまり、遺構及び遺物包含層を損壊する恐れはないことから、建設工事を着手することとなった。

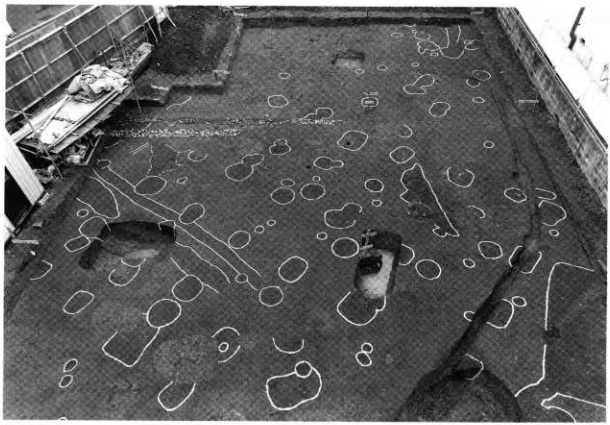
3．待兼山遺跡

調査の経緯　刀根山元町89において専用住宅の建設に先立ち、平成８年３月29日に試掘調査をおこなうこととなった。

調査の方法・所見　建築予定地内の南部及び東部のそれぞれに、重機により試掘坑を掘削し、遺構の有無を確認することとした。

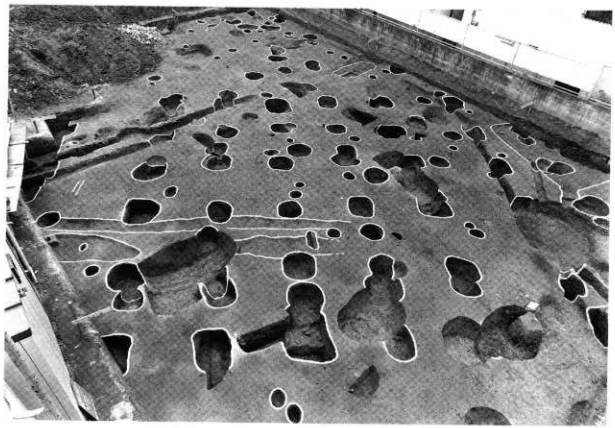
この結果、現行地表より地下40cm前後にて洪積層を確認したが、遺構及び遺物包含層はなく建設工事を着手することとなった。

図　　版



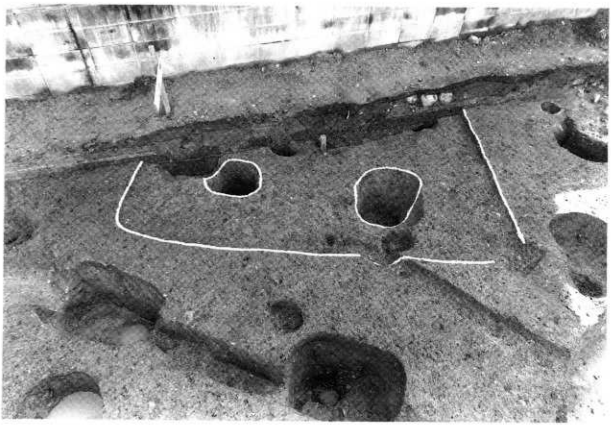
（1）遺構検出状況（西から）

（2）遺構完掘状況（西から）

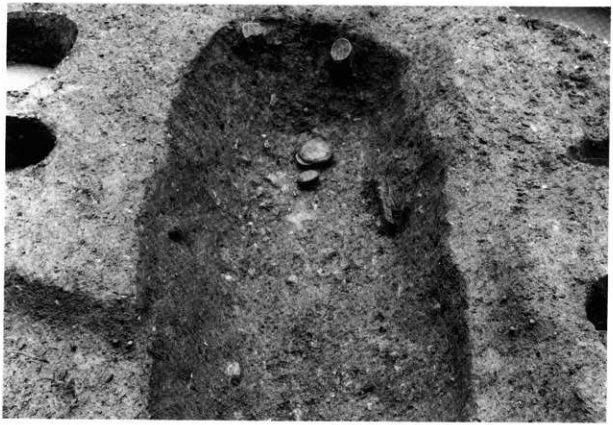


（1）遺構完掘状況（北西から）

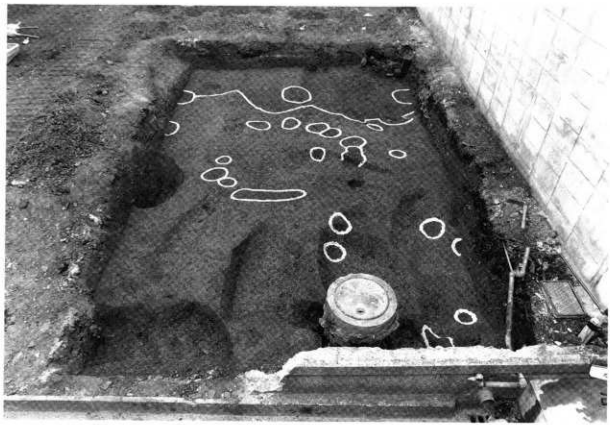
（2）倉庫1、2、3全景（南東から）



（1）竪穴住居1（北東から）

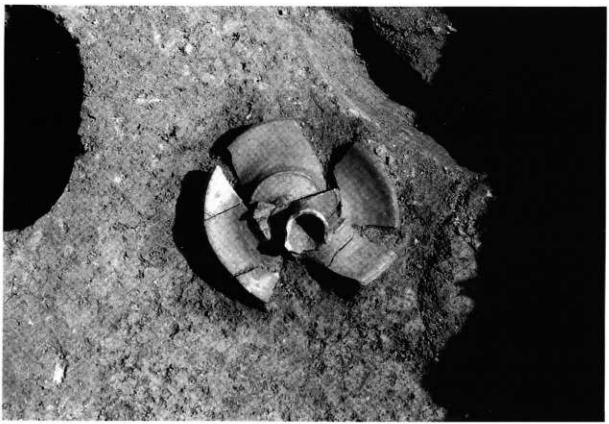


（2）土壙墓1（南から）

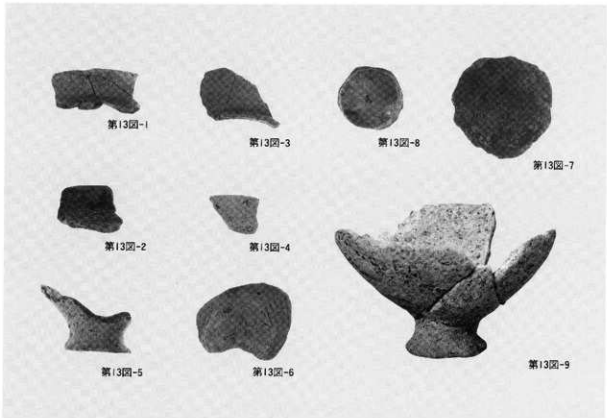


（1）遺構検出状況（北から）

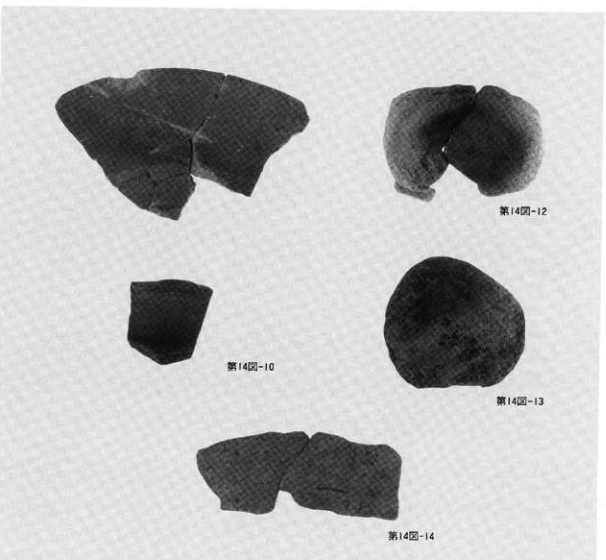
（2）遺構完掘状況（北から）



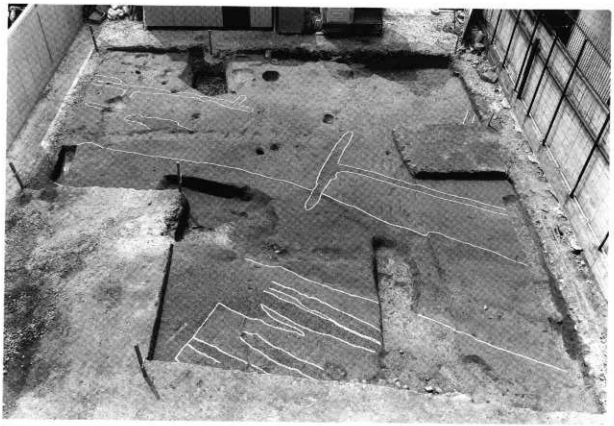
（1）土坑4高坏出土状況（西から）



（2）出土遺物



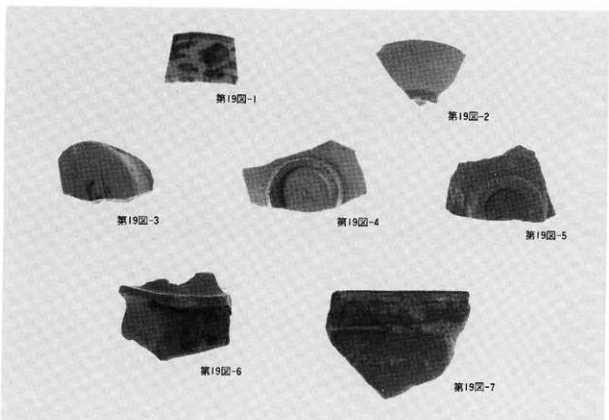
土坑3　出土遺物



（1）遺構検出状況（北から）

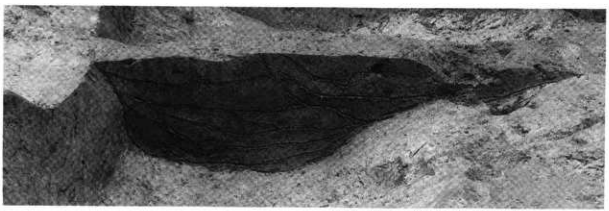
（2）遺構完掘状況（北から）

（1）溝1、2土層断面（東から）

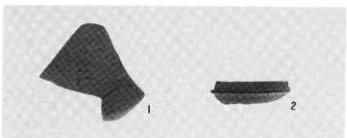


（2）溝1、2出土遺物

（1）遺構検出状況（南から）



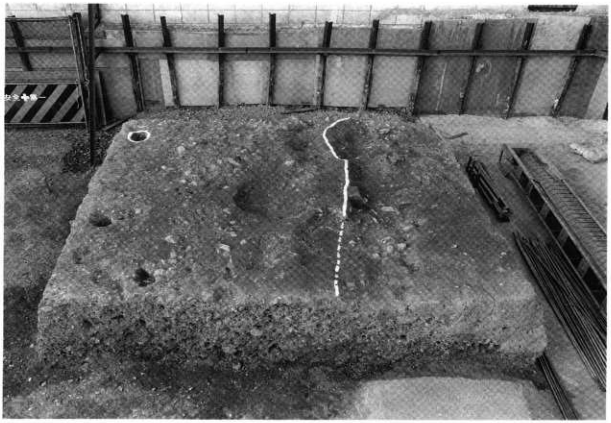
（2）溝1土層断面（東から）



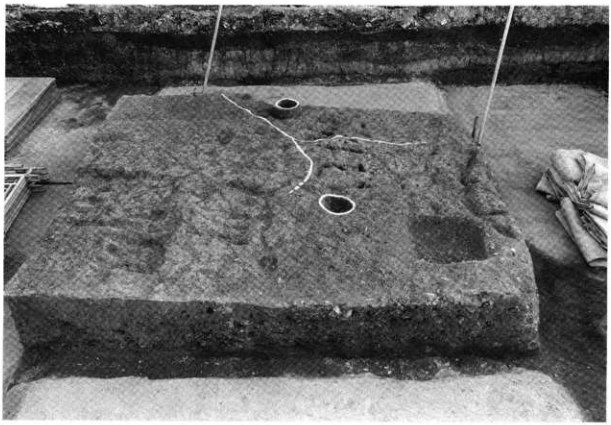
（3）出土遺物　岡町南遺跡第1次調査
1．溝1出土遺物（第51図－1）
2．表土中出土遺物（第51図－2）

（1）A区全景（南から）

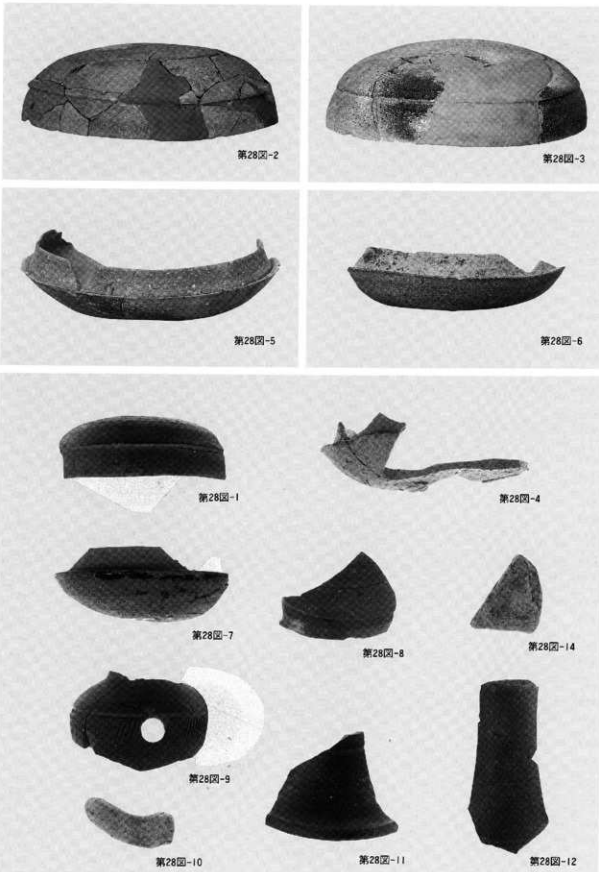
（2）B、C、D区全景（南西から）



（1）B区全景（南から）



（2）D区全景（北から）


第28図-2
第28図-3
第28図-5
第28図-6
第28図-1
第28図-4
第28図-7
第28図-8
第28図-14
第28図-9
第28図-10
第28図-11
第28図-12

B区土坑1出土遺物